

首里城跡

ー京の内燃発掘調査報告書(III)ー

平成19年度調査の追跡図



平成19年度調査の追跡図

平成23(2011)年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

－京の内跡発掘調査報告書（III）－
平成6年度調査の遺構図



平成6(1994)年度 調査区内の遺構全体図

平成23（2011）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

－京の内跡発掘調査報告書（III）－

平成6年度調査の遺構編

平成23（2011）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

戦後まもなく連合国軍総司令部、いわゆる GHQ (General Head Quarters) に因って、本土と南西諸島の行政分離宣言がなされ、昭和 21 (1946) 年に米軍政府が成立した。このような中で、琉球政府文化財保護委員会によって昭和 30 (1955) 年 11 月 29 日付で首里城跡は、史跡に指定される。その後、本土復帰の昭和 47 (1972) 年 5 月 15 日に国指定史跡として指定されています。

更に、平成 12 (2000) 年 12 月 2 日には首里城跡を含む 9 資産がユネスコ世界遺産条約に基づき「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として「世界遺産」(文化遺産) に登録されている。丁度、今年度に世界遺産登録 10 周年目を迎える、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録 10 周年記念事業（実行委員会事務局：県教育庁文化課。後援：内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所）が、9 資産を中心とした各種イベント（講演会、シンポジウム、リレー講座、出土品巡回展）や関連イベント（首里城公園 中秋の宴、首里城祭、現代版組踊「肝高の阿麻和利」ほか）等が開催されている。

さて、首里城跡は 500 余年に亘って琉球王国の王城として、沖縄の歴史・文化の中心的な核となって、個性豊かな沖縄の歴史と文化の礎を築き上げてきたグスクとして国内外に知られています。

首里城は沖縄独自の建築技術や石積みなどの土木技術の粋を集めて完成された県内最大規模のグスクであったが、太平洋戦争末期に起きた沖縄戦による戦没で旧国宝（昭和 8 年 1 月 23 日指定）であった首里城正殿、歓会門、瑞泉門、白銀門などの多くの建造物や城壁の石積みはことごとく破壊され、消失しました。

戦災で灰燼に帰した首里城跡には、琉球大学が昭和 25 (1950) 年に創設され、昭和 57 (1982) 年までの 32 年間キャンパスとして使用されました。

県民の首里城復元に対する熱い期待と要請により昭和 60 (1985) 年度から沖縄開発庁（現在の内閣府）、建設省（現在の国土交通省）、文部省（現在の文部科学省）、沖縄県によって首里城跡の復元整備事業が開始され古都首里城の歴史的風土にふさわしい区域として今日まで継続的に遺構確認調査に基づく復元整備が進められています。

首里城跡の復元整備の中で平成 4 (1992) 年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、在りし日の姿（1712 年の首里城再建を始めとする 18 世紀前半）を現在に写し出す形で首里城公園として一部公開されました。その後、平成 11 (1999) 年に白銀門、平成 12 (2000) 年が系団座・用物座及び二階御殿、平成 15 (2003) 年には京の内、平成 19 (2007) 年が書院・鎮之間などの新たな建造物群が復元された。特に書院・鎮之間については、平成 21 (2009) 年 7 月 23 日付で国の名勝として指定されています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された区域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物空間が集中する区域とは離れた内郭の南西地域にあり、文献や伝承に拠ると首里城の聖域的空間として国王即位の儀式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭祀がおこなわれた空間として位置付けられています。また、京の内には、首里城築城以前に古いグスクがあった場所としても考えられています。このような中で、「京の内」跡の復元整備事業に必要となる位置確認、規模、遺構の変遷などを解明する目的で平成 6 (1994) 年度から平成 9 (1997) 年度まで継続的に発掘調査が沖縄県教育委員会によって実施されました。この調査で平成 6 年度に 1459 年の火災で消失した倉庫跡が発見され、当時の琉球王国の海外交易によって将来された中国をはじめとする東南アジア（タイ、ベトナム）、本土を含めた各地域の陶磁器 1,162 個体と多くの金属製品やガラス製品が確認されました。これらの陶磁器や金属・ガラス製品は、平成 12 年 6 月 27 日付で国の重要文化財（考古資料の部）「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点 附一、金属製品 一括 附一、ガラス玉 一括」として戦前・戦後をとおして、沖縄県ではじめて指定されました。

さて、今回の報告書に掲載した内容は、平成 6 年度の調査より検出された遺構を網羅したものであります。本書が首里城跡の城郭研究や考古学、民俗学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いに存じます。

末尾ながら内閣府 沖縄総合事務局 沖縄記念公園事務所をはじめとする関係機関、並びに発掘調査や遺構の解釈および出土品の分析指導にご協力をいただきました関係各位に深く敬意を表すとともに心より厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 守内 泰三

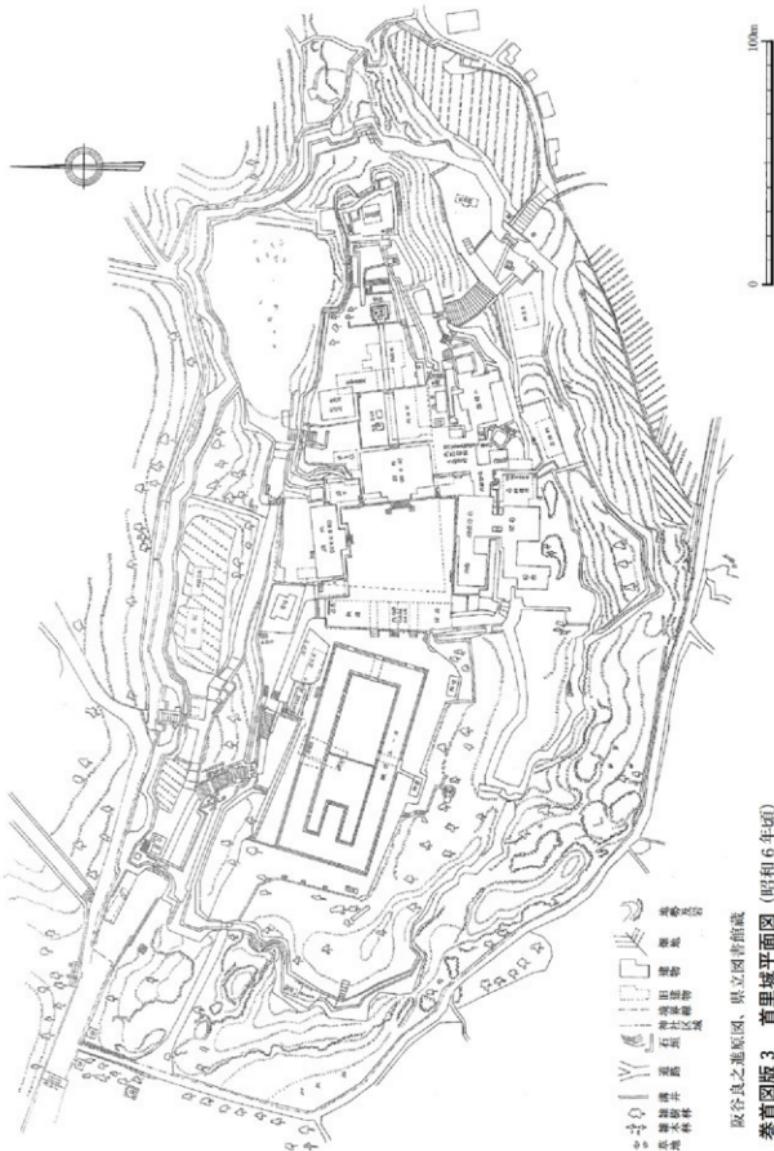


卷首図版1 首里城航空写真（1944年）の米軍撮影

（①首里城跡、②真玉橋、③豊見城グスク、④御物グスク、⑤屋良座森グスク、⑥三重グスク、⑦硫黄グスク）



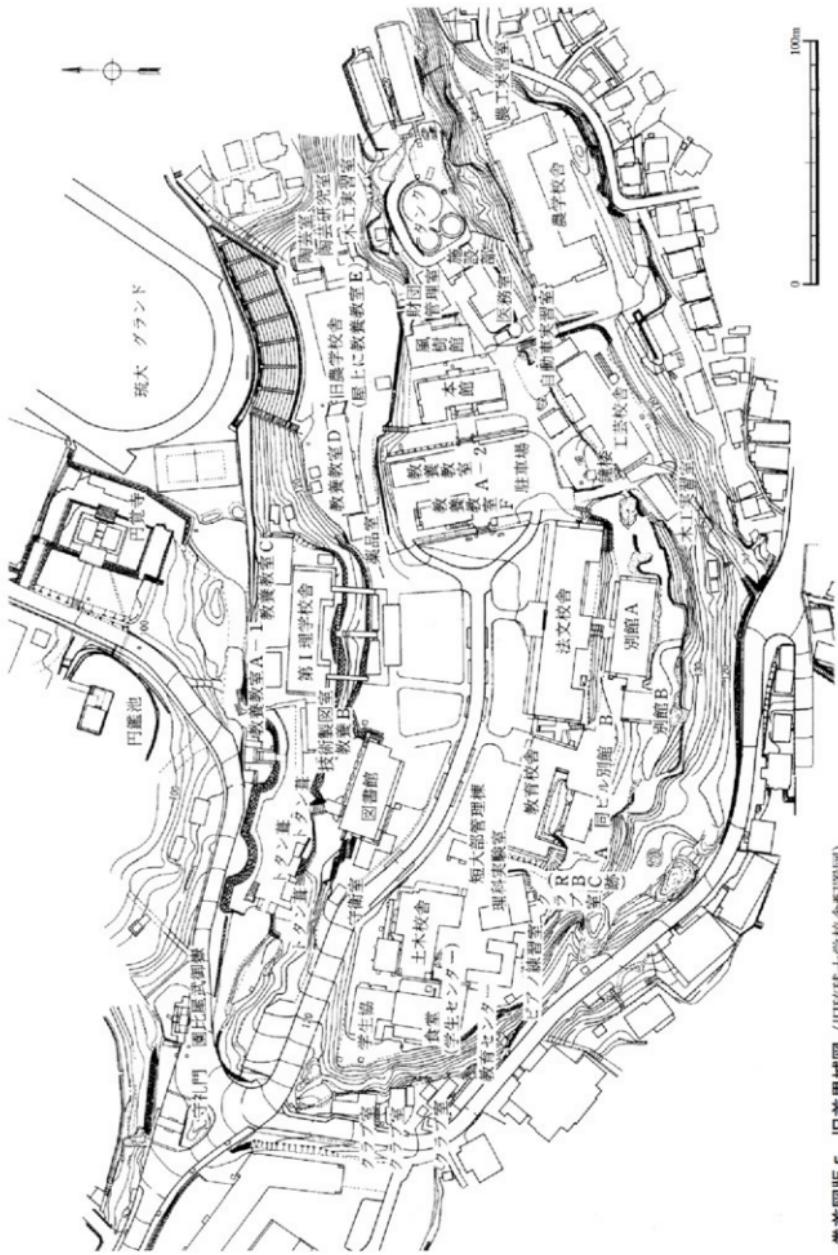
卷首図版2 1945年4月2日 米軍撮影(CV20-103-63)の首里城周辺
(財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室 所蔵)



阪谷良之進原図、県立図書館蔵
卷首図版 3 首里城平面図 (昭和6年頃)



卷首図版4 1984年 国土地理院撮影（OK84-IX C-12-8）首里城跡と琉球大学

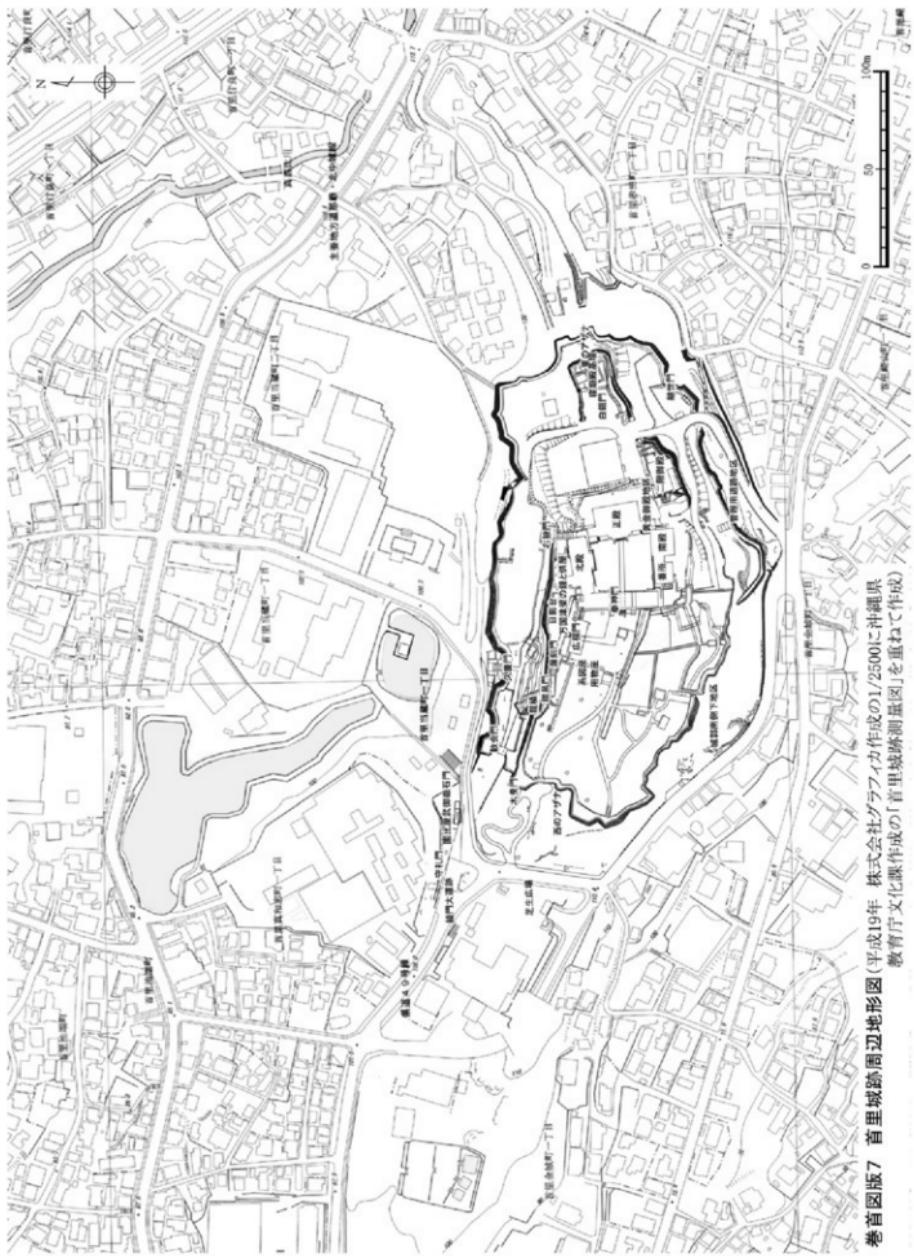


卷首図版5 旧首里城圖（旧琉球大学校舎配置図）



卷首図版 6 2004 年 国土地理院撮影 (COK2004-IX C-8-7) 首里城跡

卷首図版7 首里城跡周辺地形図(平成19年 株式会社グラフィカ作成の「沖縄県
教育文化課作成の首里城跡測量図」を重ねて作成)





卷首図版8 2009年 首里城跡の航空写真（株式会社グラフィカ所有）



卷首図版 9 上段：調査区全景（東側より望む）
下段：調査区の東半分を望む



卷首図版 10 上段：調査区の西半分を望む
下段：調査区西側遺構の状況



卷首図版11 上段：調査区西侧(B~D-14~17グリッド)を望む
下段：調査区中央(B~D-12~15グリッド)を望む



卷首図版 12 上段：調査区を南側より望む
下段：調査区東側(B～D-10～14グリッド)を望む



卷首図版 13 上段：調査区東側(B~D-10 ~ 12 グリッド)を望む
下段：調査区東側(B~D-10・11 グリッド)を望む



卷首図版 14 上段：調査区東側(B-C-10~13 グリッド)を望む
下段：調査区中央(B~D-14·15 グリッド)を望む



卷首図版 15 調査区中央(B~D-13・14 グリッド)を望む



卷首図版 16 上段：調査区西侧(B・C-15～17 グリッド)を望む
下段：調査区中央(C・D-13～15 グリッド)を望む



卷首図版 17 上段：調査区西側(C-D-15・16 グリッド)を望む
下段：調査区西側(C-D-15～17 グリッド)を望む

例　　言

- 1 本事業は国営首里城公園整備事業に伴うもので、内閣府　沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所からの委託（受託）を受けて沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化課が行い、発掘調査及び資料整理等については沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 本報告書は、平成6年度に実施した国営首里城公園（約4ha）の京の内北側地区（調査面積約2,000m²）で検出された遺構を網羅したものである。出土品の報告については、改めて報告するが、今回報告した遺構と出土品との時代関係について整合性は譲っていない。従って今後、遺構の時代観において変更もあり得る。
- 3 遺構の時代観は、平成9年度刊行の「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（I）一」で遺構の数を46基と報告した。この報告書を基本にして、平成12年度刊行の「特別企画展 首里城京の内展—貿易陶磁からみた大交易時代—」及び平成20年度刊行の「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（II）一」において遺構数を39基に整理をおこない本報告に至っている。
- 4 本報告書で掲載した航空写真は、国土地理院の1944年米軍撮影（3PR/5M3 IV XXIBC JAN-3F/1524 REST）、1984年（OK84-IX C-12-8）、2004年（COK2004-IX C-8-7）を複写掲載した。2009年首里城跡の航空写真是、株式会社グラフィカの航空写真を複写掲載した。1945年4月2日米軍撮影（CV20-103-63）の航空写真是、沖縄県教育委員会史料編集室所蔵を複写掲載した。
また、本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000、1/50,000の地形図を使用した。那覇市都市計画部都市計画課発行の1/10,000の地形図、平成16年度沖縄県教育庁文化課作成の首里城跡測量図、沖縄県企画部情報政策課委託作成の地形図を使用した。
- 5 報告書抄録に掲載した座標系は、地形測量及び写真測量業務で委託した成果をインターネットで公開（<http://Vldb.gsi.jp/sokuchi/tky2jgd/>）されているWeb版TKY2JGDを利用した。日本測地系から世界測地系に変換した。入力方法を例示すると、入力値は平面直角座標を選択し、日本測地系「15系」を選択後に「X座標：23598.267m、Y座標：21971.191m」を入力後に変換方法を「世界測地系→日本測地系」を選択した。計算結果は「北緯：26° 12' 32.15599''、東経：127° 43' 18.24229''」が求められたものを記した。
- 6 遺構及び土層図面及び写真の一部は、平成11年度に当センターへの首里・若狭・兼城の三資料室からの引っ越し作業の際に誤って廃棄されたようである。その為、図面や写真が欠落した部分については、これを補完するかたちで編集した。
- 7 本報告書は、金城亀信を中心に、瑞慶覧尚美・赤嶺雅子・伊藤恵美利・中山晋ほかの協力を得て、編集を行った。なお、発掘調査・資料整理などの調査体制については、第I章の第3節に記してある。報告の原稿は、全て金城が執筆した。
- 8 本報告書に掲載された現場の写真撮影は全て、金城亀信がおこなった。出土遺物の撮影及び現像・焼付けは矢舟章浩・伊佐えりながおこなった。
- 9 発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序

卷首図版

例言

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 首里城跡公園整備事業に至る経緯	1
第2節 調査に至る経緯	7
第3節 調査の体制	9
第4節 調査の経緯	16
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	18
第1節 地理的環境	18
第2節 歴史的環境	23
第Ⅲ章 調査の概要	29
第1節 調査地域	29
第2節 調査区の設定	47
第Ⅳ章 遺 構	49
第1節 遺構の概要	49
A. 遺構の種類と概略	49
B. 各時期別の遺構	52
イ. 第Ⅰ期	57
ロ. 第Ⅱ期	93
ハ. 第Ⅲ期	127
ニ. 第Ⅳ期	201
ホ. 第Ⅴ期	269
ヘ. 第Ⅵ期	337
a. 第Ⅵ期前半	347
b. 第Ⅵ期後半	435
報告書抄録	486

挿図目次

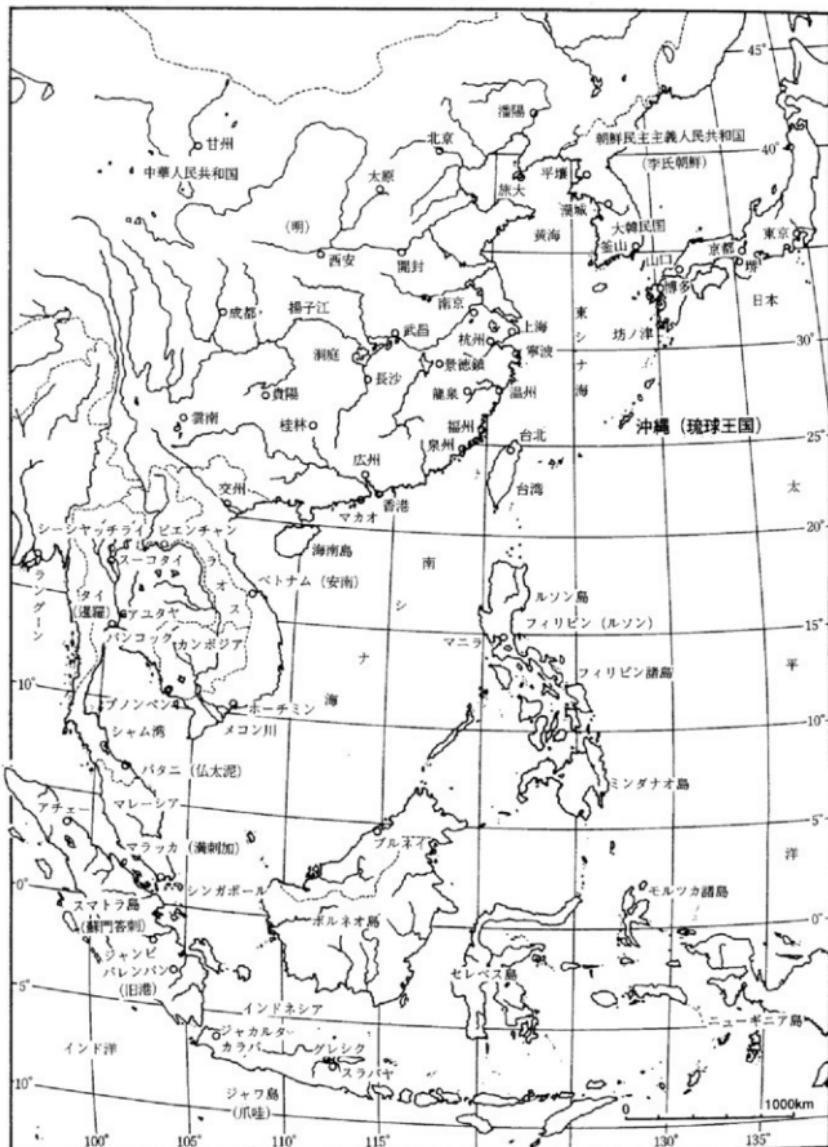
図目次

第1図 沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国	(i)	第46図 C-D-10、D-11石積みSA04・SA35平面及び立面	205
第2図 首里城跡とグスク時代の周辺遺跡	2	第47図 B-C-10-11石積みSA05-B（外面）・SA05-A・B （内面）平面及び層序	213
第3図 旧首里城跡（旧琉球大学校舎配置図）	3	第48図 B-C-12-13石積みSA07・SA11・SA12 平面及び 立面・断面	221
第4図 首里城城郭等復元整備事業等 年度別事業箇所	6	第49図 B-14-15石積みSA14 平面及び断面・層序	223
第5図 首里城周辺の横断図	19	第50図 B-16-17石積みSA27・SA30 平面及び層序	239
第6図 首里城周辺主要文化遺産分布図	24	第51図 C-10-11石敷きSS01-02、SS03-B、SS04-A・B 平面及び断面・層序	247
第7図 首里城と城内の地名	33	第52図 C-10-11石敷きI期（SS01-02、SS03-B、SS04-A） II期（SS02-SS04-A・B）の推定復元	251
第8図 首里城と城内の地名	37	第53図 C-10-11石敷きI期（SS01-02、SS03-B、SS04-A） 平面及び断面・層序	255
第9図 発掘調査地図（上段）と 「首里古地図」（1700年）（下段）		第54図 C-10-11石敷きII期（SS02、SS04-A・B） 平面及び断面・層序	259
第10図 首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年）	39	第55図 C-10-11石敷きSS01-02、SS03-B、SS04-A 造構残存の盤張と刻印石の位置図	263
第11図 首里城平面図（高島良徳氏所蔵）	39	第56図 C-10-11石敷きSS01-02、SS03-B、SS04-A 造構残存の盤張と刻印石	263
第12図 首里城平面図（昭和6年頃）	40	第57図 京の内北地区第V期（16世紀前半～19世紀後半） 造構の推定復元	271
第13図 首里城京の内の空間変遷	41	第58図 B-C-12-15石積みSA06、SA13、SA15、SA21、 SA23、SA31、北側レリフ 平面	275
第14図 首里城跡京の内地図 年度別発掘調査箇所	42	第59図 B-12-13石積みSA06 平面及び断面・層序	281
第15図 京の内地図で検出された御獄及び区画石積みから 推定した京の内空間の復元案	43	第60図 B-12-13石積みSA13 平面及び層序	289
第16図 「京の内」跡造構配置図及びグリッド設定	48	第61図 B-14石積みSA14-15 平面及び断面	295
第17図 造構全体図	53	第62図 B-14石積みSA14-15（東側レリフ） 平面及び 断面・層序	297
第18図 京の内北地区第I期（14世紀前半～14世紀後半） 造構の推定復元	58	第63図 B-14石積みSA14-15（西側レリフ） 平面及び 断面・層序	301
第19図 B-15-16石積みSA24 平面・断面及び層序	61	第64図 C-13-15石積みSA21-SA23（排水溝①・②） 平面及び層序	311
第20図 B-16土塙SK03 平面と層序	67	第65図 B-14-15石積みSA31 平面及び層序	317
第21図 B-16土塙SK03の延長 平面と層序	77	第66図 C-D-12北側敷きSS05 平面及び断面・層序	325
第22図 B-13-14グリッド内のピット 平面と断面	84	第67図 B-12-13北側レリフと石積みSA13 平面及び 層序	333
第23図 C-D-15グリッド内のピット 平面と断面	87	第68図 昭和6年頃の首里第一尋常高等小学校及び琉球大学 校舎配置図	339
第24図 京の内北地区第II期（14世紀終末～15世紀前半） 造構の推定復元	94	第69図 京の内北地区第VI期（19世紀終末～昭和58年） 造構の推定復元	343
第25図 B-11-12石積みSA01 平面と立面及び断面	97	第70図 首里城平面図（昭和6年頃）	348
第26図 B-11-12石積みSA01 立面と刻印石	101	第71図 京の内北地区第VI期前半（19世紀終末～昭和20年） 造構の推定復元	349
第27図 B-11-12石積みSA01 外面石積みの刻印石	105	第72図 首里城平面図（昭和6年頃）と京の内跡検出造構 との重ね図	353
第28図 設置状況模式図	106	第73図 B-13-17石積みSA16-22-26-29、排水溝SD06-B、 SD07-A・B、石敷きSS03-A 造構配置図	357
第29図 B-11-12、C-12 SA01（建物） 推定プランと 根石設置箇所	106	第74図 B-16石積みSA26、排水溝SD07-B 平面及び断面・ 層序	363
第30図 B-C-10-11石積みSA05-A（外面）・SA05-A・B （内面）平面及び層序	111	第75図 B-16石積みSA29 平面及び層序	369
第31図 B-14-15土塙SK02 平面及び層序	121	第76図 B-15-17石積みSA16、排水溝SD06-B 平面及び 層序	373
第32図 京の内北地区第III期（15世紀中頃） 造構の推定 復元	128	第77図 B-15石積みSA22、排水溝SD07-A 平面及び断面・ 層序	381
第33図 B-C-12石積みSA08-SA10 平面及び断面	131	第78図 B-13-14石敷きSS03-A 平面及び層序	389
第34図 C-D-14-17石積みSA17、SA18-B、SA25-A・B 平面配置図	135	第79図 B-C-11便所：第I期（石積みSA02、溝SD03） 平面及び断面	395
第35図 C-D-14石積みSA17 平面及び層序	141	第80図 B-C-11便所：第II期（溝SD03ほか） 平面及び	
第36図 C-D-14石積みSA17 外面の刻印石	145		
第37図 D-16石積みSA18-B 平面及び層序	151		
第38図 D-17石積みSA25-A・B 平面及び層序	157		
第39図 C-13-14石積みSA33-34 平面及び層序	165		
第40図 C-13-14石積みSA33-34 立面及び層序	169		
第41図 下之御庭首里森御獄地区B-C-12石積み SA18-A・SA32、排水溝SD04-A 平面	173		
第42図 下之御庭首里森御獄地区及び京の内地図B-C-12 SD04-A 立面及び層序	177		
第43図 B-12排水溝SD05-A 平面及び断面	189		
第44図 B-15土塙SK01（石積みSA19-20、SA28） 平面及び 層序	197		
第45図 京の内北地区第IV期（15世紀後半～16世紀初頭） 造構の推定復元	202		

断面・層序	403
第81図 C-12-13石積みSA09、排水溝SD05 平面及び 層序	411
第82図 C-D-16-17建物SB01、排水溝SD04-B 平面及び 断面・層序	421
第83図 C-D-16-17建物SB01(便所)の推定復元	425
第84図 旧首里城園(旧琉球大学校舎配置図).....	436
第85図 旧琉球大学校舎配置図と(平成6~9年度)京の内 地区的検出遺構との重ね図	437
第86図 京の内北地区第VI期後半(昭和24年~昭和58年) 遺構の推定復元	441
第87図 旧琉球大学校舎配置と(平成6年度)京の内地区 の検出遺構との重ね図	445
第88図 旧首里城園(旧琉球大学校舎配置図).....	449
第89図 C-11-12石積みSA03 平面及び層序	451
第90図 琉球大学石積み①・②(SA03)と京の内跡検出遺 構との相関関係図	455
第91図 琉球大学石積み①・②(SA03)と京の内跡検出遺 構との相関関係図	457
第92図 B-C-13~16排水溝①~④平面	463
第93図 B-C-13~16排水溝①~④立面及び層序	467
第94図 C-D-15排水溝(琉大の布掘り基礎)SD01 平面	479
第95図 C-D-16排水溝(琉大の布掘り基礎)SD02 平面 断面	482
第96図 B-11石列SR01 平面	484
表目次	
第1表 首里城郭等復元整備事業等の事業費の推移	5
第2表 平成6(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数 の新旧関係	17
第3表 首里城周辺主要文化遺産分布表	25
第4表 當銘氏論文の内容を基に作成したフローチャート	26
第5表 切り石積みの外側と内面の関係	51
第6表 第I期 SA24遺構観察表	60
第7表 第I期 SK03遺構観察表	66
第8表 第I期 SK03の延長(HSK04)遺構観察表	76
第9表 第I期 B-13-14ビット遺構観察表	84
第10表 第I期 C-D-15ビット遺構観察表	86
第11表 第II期 SA01遺構観察表	96
第12表 第II期 SA05-A遺構観察表	110
第13表 第II期 SK02遺構観察表	120
第14表 第III期 SA08、SA10遺構観察表	130
第15表 第III期 SA17遺構観察表	140
第16表 第III期 SA18-B遺構観察表	150
第17表 第III期 SA25-A、SA25-B遺構観察表	156
第18表 第III期 SA33、SA34遺構観察表	164
第19表 第III期 SA18-A、SA32、SD04-A遺構観察表	172
第20表 第III期 SD06-A遺構観察表	188
第21表 第III期 SK01遺構観察表	196
第22表 第IV期 SA04-SK03遺構観察表	204
第23表 第IV期 SA05-B遺構観察表	212
第24表 第IV期 SA07、SA11、SA12遺構観察表	220
第25表 第IV期 SA14遺構観察表	232
第26表 第IV期 SA27、SA30遺構観察表	238
第27表 第IV期 SS01、SS02、SS03-B、SS04-A、SS04-B 遺構観察表	246
第28表 石敷きI期 (SS01-02、SS03-B-SS04-A)・II期 (SS02-SS04-A-B)の規模比較	251
第29表 第V期 SA06遺構観察表	280
第30表 第V期 SA13遺構観察表	288
第31表 第V期 SA15遺構観察表	294
第32表 第V期 SA21、SA23遺構観察表	310
第33表 第V期 SA31遺構観察表	316
第34表 第V期 SS05遺構観察表	324
第35表 第V期 B-12-13北側レング遺構観察表	332
第36表 废藩置県後の首里城及びその周辺における主要 文教施設等略年表	338
第37表 第VI期前半 SA26、SD07-B遺構観察表	362
第38表 第VI期前半 SA29遺構観察表	368
第39表 第VI期前半 SA16、SD06-B遺構観察表	372
第40表 第VI期前半 SA22、SD07-A遺構観察表	380
第41表 第VI期前半 SS03-A遺構観察表	388
第42表 第VI期前半 SA02遺構観察表	394
第43表 第VI期前半 SD03遺構観察表	402
第44表 第VI期前半 SA09、SD05遺構観察表	410
第45表 第VI期前半 SD04-B、SB01遺構観察表	420
第46表 SB01(便所)の規模	425
第47表 第VI期後半 SA03遺構観察表	450
第48表 第VI期後半 排水溝①~④遺構観察表	462
第49表 第VI期後半 SD01、SD02、SR01遺構観察表	478
図版目次	
卷首図版 1 首里城航空写真(1944年)の米軍撮影	
卷首図版 2 1945年4月2日 米軍撮影(CV20-103-63)の首里 城周辺	
卷首図版 3 首里城平面図(昭和6年頃)	
卷首図版 4 1984年 国土地理院撮影(OK84-IX C-12-8)首 里城跡と琉球大学	
卷首図版 5 旧首里城	
卷首図版 6 2004年 国土地理院撮影(COK2004-IX C-8-7) 首里城跡	
卷首図版 7 首里城跡周辺地形図	
卷首図版 8 2009年 首里城跡の航空写真	
卷首図版 9 上段: 調査区全景	
卷首図版 9 下段: 調査区の東半分を望む	
卷首図版10 上段: 調査区の西半分を望む	
卷首図版10 下段: 調査区西側遺構の状況	
卷首図版11 上段: 調査区西側(B-D-14~17リット)を望む 下段: 調査区中央(B-D-12~15リット)を望む	
卷首図版12 上段: 調査区南側より望む 下段: 調査区東側(B-D-10~14リット)を望む	
卷首図版13 上段: 調査区東側(B-D-10~12リット)を望む 下段: 調査区東側(B-D-10~11リット)を望む	
卷首図版14 上段: 調査区東側(B-C-10~13リット)を望む 下段: 調査区中央(B-D-14-15リット)を望む	
卷首図版15 上段: 調査区中央(B-D-13-14リット)を望む	
卷首図版16 上段: 調査区西側(B-C-15~17リット)を望む 下段: 調査区中央(C-D-13~15リット)を望む	
卷首図版17 上段: 調査区西側(C-D-15-16リット)を望む 下段: 調査区西側(C-D-15~17リット)を望む	
図版 1 上: B-15-16 SA24検出前の状況 下: SA24検出直後の状況	65
図版 2 上: B-16 SK03より東側を望む 下: SK03北より南側を望む	71
図版 3 上: B-16 SK03より西側を望む 下: SK03南より北側を望む	72
図版 4 上: B-16 SK02(東側)試掘場 南壁 下: SK03(東側)試掘場 西壁	73
図版 5 上: B-16 SK03(東側)試掘場 北壁 下: SK03(西側)試掘場 南壁	74
図版 6 上: B-16 SK03(西側)試掘場 西壁 下: SK03(西側)試掘場 北壁	75
図版 7 上: B-16 SK03延長部分 南より北側を望む 下: SK03延長部分 東より西側を望む	81
図版 8 上: B-16 SK03延長部分 東壁 下: SK03延長部分 南壁	82
図版 9 上: B-16 SK03延長部分 南壁 下: SK03延長部分 西壁	83

図版10	B-13-14ピットを南側上空より望む	85
図版11	上：C-D-15ピットを西側上空より望む 下：C-D-15ピット東より西側を望む	91
図版12	上：C-D-15ピット西より東側を望む 下：C-D-15ピット北より南側を望む	92
図版13	上：B-11-12 SA01ほかを西側上空より望む 下：SA01 南側上空より望む	107
図版14	上：B-11-12 SA01 東より西側を望む 下：SA01 西より東側を望む	108
図版15	上：B-11-12 SA01 北より南側を望む 下：SA01 北より南側を望む	109
図版16	上：B-C-10-11 SA05-Aほかを南側上空より望む 下：SA05-A 北より南側を望む	115
図版17	上：B-C-10-11 SA05-A 東より西側を望む 下：SA05-A 南より北側を望む	116
図版18	上：B-C-10-11 SA05-A 外面の切り石を北より望む 下：SA05-A 外面の切り石を南より望む	117
図版19	上：B-10 SA05-A東壁 下：B-C-10-11 SA05-A 内側野面石積みと外面の切り石	118
図版20	左：B-10-11 SA05-A 内側の野面石積みを西より望む 右：SA05-A 内側の野面石積み	119
図版21	上：B-14-15 SK02ほかを東側上空より望む 下：B-14 SK02東側 西壁	125
図版22	上：B-14-15 SK02西側 西壁	126
図版23	下：SK02西側 北壁	126
図版24	上：B-C-12 SA08、SA10ほかを南側上空より望む 下：SA08、SA10 西より東側を望む	132
図版25	上：B-C-12 SA08、SA10 南より北側を望む 下：SA08、SA10 東より西側を望む	133
図版26	上：C-D-14 SA17、D-16 SA18-B、D-17 SA25-A-Bを東側上空より望む	134
図版27	上：C-D-14 SA17、D-16 SA18-B、D-17 SA25-A-Bを北側上空より望む	137
図版28	上：C-D-14 SA17 南壁、上右：C-D-14 SA17 南壁、下：SA17 南より北側を望む	145
図版29	上：C-D-14 SA17 東より西側を望む 下：SA17 西より東側を望む	149
図版30	上段：D-16 SA18-Bを西側上空より望む 中段左：SA18-B 西より東側を望む 中段右：SA18-B 東より西側を望む 下段左：SA18-B 南より北側を望む 下段右：SA18-B 北より南側を望む	155
図版31	上：D-17 SA25-A-Bほかを北側上空より望む 下：SA25-A-Bほかを北側上空より望む	161
図版32	上：D-17 SA25-A-Bを南側上空より望む 下：SA25-A-Bを南より北側を望む	162
図版33	上：D-17 SA25-A-Bほかを西側上空より望む 下：SA25-A-B 西より東側を望む	163
図版34	上：C-13-14 SA33-34 西より東側を望む 下：SA33-34北より南側を望む	170
図版35	上：C-13-14 SA33-34 東より西側を望む 下：SA33-34南より北側を望む	171
図版36	上：平成9（1997）年の下之御庭首里森御嶽地区調査前の状況、下：発掘調査状況	178
図版37	下之御庭首里森御嶽地区 遺構検出状況	179
図版38	上・下：下之御庭首里森御嶽地区 遺構検出状況	180
図版39	B-C-12 SA18-A、SA32、SD04-Aほかを南側上空より望む	181
図版40	B-C-12 SD04-A 南より北側を望む	182
図版41	上：B-C-12 SD04-A、SA32 北より南側を望む 下：SD04-A 南壁	183
図版42	上：B-C-12 SD04-A 南壁と西壁 下：SD04-A 東壁	184
図版43	上：B-C-12 SD04-A 東より西側を望む 下：SD04-A 南より北側を望む	185
図版44	上：B-12 SA18-A 西より東側を望む 下：SA18-A 東より西側を望む	186
図版45	上：B-12 SA18-A 北より南側を望む 下：SA18-A 南より北側を望む	187
図版46	B-12 SA18-A、SD06-Aほかを南側上空より望む 上：B-12 SD06-A 南より北側を望む	193
図版47	下：SD06-A 東より西側を望む	194
図版48	上：B-12 SD06-A 北より南側を望む 下：SD06-A 西より東側を望む	195
図版49	上：B-15 SK01ほかを西側上空より望む 下：SK01 西側上空より望む	198
図版50	上：B-15 SK01 北より南側を望む 下：SK01 東より西側を望む	199
図版51	上：B-15 SK01 西より東側を望む 下：SK01 北より南側を望む	200
図版52	C-D-10、D-11 SA04、SA35を西側上空より望む	209
図版53	上：C-D-10、D-11 SA04、SA35 西より東側を望む 下：SA04、SA35 南壁	210
図版54	上：C-D-10、D-11 SA04、SA35 東より西側を望む 下：SA04、SA35 南より北側を望む	211
図版55	上：B-C-10-11 SA05-Bほかを南側上空より望む 下：SA05-B 南より北側を望む	217
図版56	上：B-C-10-11 SA05-B 西より東側を望む 下：SA05-B 北より南側を望む	218
図版57	上：B-C-10-11 SA05-B 北より南側を望む 下：SA05-B 東より西側を望む	219
図版58	上：B-C-12-13 SA07、SA11、SA12 西より東側を望む 下：B-13 SA07 南より北側を望む	225
図版59	上：B-13 SA07 東壁ほかを西より望む 下：SA07 東壁ほかを西より望む	226
図版60	上：B-13 SA07 北より南側を望む 下：SA07ほかを東より西側を望む	227
図版61	上：B-13 SA07ほかを南より北側を望む 下：B-C-12 SA11 東壁ほかを西より望む	228
図版62	上：B-C-12 SA11 西より東側を望む 下：SA11 東より西側を望む	229
図版63	上：B-C-12 SA11 東より西側を望む 下：SA11ほかを北より南側を望む	230
図版64	上：B-12 SA12 北より南側を望む 下：SA12 南より北側を望む	231
図版65	上段左：B-14-15 SA14ほかを南側上空より望む 上段右：SA14 東壁、中段：SA14 南壁・西壁 下段：SA14 北壁	237
図版66	上：B-16-17 SA27、SA30を西側上空より望む 下：SA27、SA30 西より東側を望む	243
図版67	上：B-16 SA30 東壁ほかを西より望む 下：B-16-17 SA27 南壁ほかを北より望む	244
図版68	上：B-16-17 SA27、SA30 西壁 下：SA27、SA30 北壁	245
図版69	上：C-10-11 SS01～SS04ほかを南側上空より望む 下：SS01～SS04 西より東側を望む	264
図版70	上：C-10-11 SS01～SS04 東より西側を望む 下：SS01、SS02 北より南側を望む	265
図版71	上：C-10-11 SS01、SS02 南より北側を望む 下：C-10 SS03-B 西より東側を望む	266
図版72	上：C-10 SS03-B 北壁ほかを南より望む	266

下 : SS03-B-SS04-A 東より西側はかを望む	267
国版73 上 : C-10 SS03-B, SS04-A・B 北より南側を望む	
下 : SS04-A・B 東より西側を望む	268
国版74 上・下 : B-C-12~15 SA06, SA13~15、 SA23, SA31, SS05 南側上空より望む	
国版75 上 : B-C-12~14 SA06, SA13~15, SA31を東側 上空より望む、下 : SA06, SA13~15, SA31を南 側上空より望む	270
国版76 上 : B-12~13 SA06はかを南側上空より望む	279
下 : SA06はかを西より東側を望む	285
国版77 B-12~13 SA06 東より西側を望む	286
国版78 上 : B-12~13 SA06 北側はかを南より望む	
下 : SA06はかを北より南側を望む	287
国版79 上段 : B-12~13 SA13 西壁はかを東より望む 二段 : SA13東壁はかを西より望む 三段 : SA13はかを北より南側を望む 下段 : SA13はかを南より北側を望む	293
国版80 上 : B-14 SA15 東西レゾン 南側上空より望む	
下 : SA15東西レゾン 北より南側を望む	296
国版81 上 : B-14 SA15東側レゾン 北壁	
下 : SA15東側レゾン 東壁	305
国版82 B-14 SA15東側レゾン 西壁	306
国版83 上 : B-14 SA15西側レゾン 北壁	
下 : SA15西側レゾン 東壁	307
国版84 上 : B-14 SA15西側レゾン 東壁	
下 : SA15西側レゾン 南壁	308
国版85 B-14 SA15西側レゾン 西壁	309
国版86 上 : C-13~15 SA21, SA23を南側上空より望む	
下 : C-13~14 SA21 北側はかを南より望む	315
国版87 B-14~15 SA31はかを南側上空より望む	321
国版88 上 : B-14~15 SA31 北壁	
下 : SA31 南壁	322
国版89 上 : B-14~15 SA31 西壁	
下 : SA31 (SA15西側レゾン) 東壁	323
国版90 C-D-12 SS05はかを南側上空より望む	329
国版91 上 : C-D-12 SS05 南より北側を望む	
下 : SS05 東壁	330
国版92 上 : C-D-12 SS05 南壁	
下 : SS05 西壁	331
国版93 B-12-13 北側レゾンを南より望む	332
国版94 B-12-13 北側レゾンの北壁層序	333
国版95 上・下 : B-14~17 SA16-22-26・29, SD06-B, SD07-A・B, SS03-A を望む	361
国版96 上段左 : B-16 SA26, SD07-Bを南側上空より望む 上段右 : SA26, SD07-B 北より南側を望む 中段 : SA26, SD07-B 南より北側を望む 下段 : SA26, SD07-B 西壁	367
国版97 上 : B-16 SA29はかを西側上空より望む	
下 : SA29 西壁	370
国版98 上 : B-16 SA29 西壁	
下 : SA29 北より南側を望む	371
国版99 上 : B-15~17, SD06-B, SA16を南側上空 より望む、下 : B-16~17 SD06-B 北壁	377
国版100 上 : B-15~17 SD06-B, SA16 南より北側を望む	
下 : SA16 南より北側を望む	378
国版101 上 : B-15~16 SA16 南より北側を望む	
下 : SD06-B, SA16 西より東側を望む	379
国版102 上 : B-15 SA22, SD07-Aを西側上空より望む	
下 : SA22, SD07-Aを北側上空より望む	385
国版103 上 : B-15 SA22, SD07-A 南より北側を望む	
下 : SA22, SD07-A 西より東側を望む	386
国版104 上 : B-15 SD07-A 南壁	
下 : SD07-A 東より西側を望む	387
国版105 上段左 : B-13~14 SS03-Aを南側上空より望む	
上段右 : SS03-A 西より東側を望む	393
中段 : SS03-A 南より北側を望む	
下段 : SS03-A 北より南側を望む	399
国版106 上 : B-11 SA02はかを南側上空より望む	
F : SA02東より西側を望む	399
国版107 上 : B-11 SA02 北より南側を望む	
F : SA02北東より南側を望む	400
国版108 上 : B-11 SA02 北西より東側を望む	
F : SA02東内を西より東側を望む	401
国版109 上 : B-C-11 SD03はかを南側上空より望む	
F : SD03 東より西側を望む	407
国版110 上 : B-C-11 SD03 北より南側を望む	
F : SD03の一部を北より南側を望む	408
国版111 上 : B-C-11 SD03内 西壁	
F : SD03内 東壁	409
国版112 上 : C-12~13 SA09、SD05を北側上空より望む	
F : SA09 西壁	415
国版113 上 : C-12~13 SA09 南より北側を望む	
F : SD05、SA09 南より北側を望む	416
国版114 上 : C-12~13 SA09 西より東側を望む	
F : C-13 SD05 北より南側を望む	417
国版115 上段左 : C-12~13 SA09, SD05 東より西側を望む	
上段右 : C-13 SD05 東より西側を望む	
下段 : C-12~13 SA09, SD05 東より西側を望む	418
国版116 上 : C-D-16~17 SB01, SD04-Bを北側上空より望む	
F : SB01, SD04-B 北より南側を望む	429
国版117 上 : C-D-16~17 SB01, SD04-B 西より東側を望む	
F : SB01, SD04-B 東より西側を望む	430
国版118 上段左 : C-D-16~17 SB01, SD04-B 西側北壁	
上段右 : SB01, SD04-B 東側北壁	
下段 : SB01, SD04-B 南より北側を望む	431
国版119 1984年琉球大学校舍西側部の拡大国土地理院撮影 (OK84-IX C-12-8)	449
国版120 上 : C-11~12 SA03を南側上空より望む	
F : SA03はかを南側上空より望む	456
国版121 上右 : C-11~12 SA03 南壁	
下左 : SA03はかを南側上空より望む	
下右 : SA03 南壁	457
国版122 上 : C-11~12 SA03 北より南側を望む	
F : SA03 東より西側を望む	461
国版123 上 : B-C-13~14 排水溝①の南壁と排水溝④の状況	
F : B-C-15~16 排水溝①の南壁と排水溝④の状況	471
国版124 左 : B-C-13~14 排水溝①~④を南側上空より望む 右 : B-C-13~16 排水溝①~④を東側上空より望む	
475	
国版125 上・下 : B-C-14~15 排水溝①~④を西側上空より 望む	476
国版126 上 : B-C-15~16 排水溝①~④を西側上空より望む 下 : B-C-13~16 排水溝①~④を西側上空より望む	
477	
国版127 上 : C-D-15 SD01を西側上空より望む	
F : SD01を西より東側を望む	480
国版128 上 : C-D-15 SD01を北より南側を望む	
F : SD01を東より西側を望む	481
国版129 上 : C-D-16 SD02を北側上空より望む	
F : SD02を南より北側を望む	483
国版130 上 : B-11 SR01を南側より望む	
F : SR01を北より南側を望む	485



第1図 沖縄(琉球王国)の位置と周辺諸国

14世紀末~16世紀の琉球王国主要対外交易国

日本、李氏朝鮮、明(中国)、呂宋(フィリピン)、安南(ベトナム)、
暹羅(タイ)、満刺加(マラッカ)、蘇門答剌(スマトラ)、
旧港(バレンバン)、爪哇(ジャワ)

第Ⅰ章 序 章

第1節 首里城跡公園整備事業に至る経緯

沖縄県（第1図）の県庁所在地のある那覇市（第2図）首里当蔵町3丁目・金城町1丁目（第3図～第15図）には、室町時代（1338年～1573年）の中頃から明治時代（1868年～1912年）の初期頃までの約500年に亘って第一尚氏（1406年～1469年）、第二尚氏（1470年～1879年）の尚氏王統の居城となった首里城（第4図～第15図）があった。琉球王国の政治・経済・文化の中心として役割を果たしてきた首里城は歴代の琉球国王によって、当時の琉球王国の土木・建築技術などの枠を集めて築城された沖縄の代表的なグスク（城郭）であった。グスク内には正殿、北殿、南殿などの多くの建築物が存在し、そのいくつかは旧国宝（正殿、守礼門、歓会門、瑞泉門、白銀門、圓比屋武御嶽石門の6件）として大正14（1925）年に指定されていた。

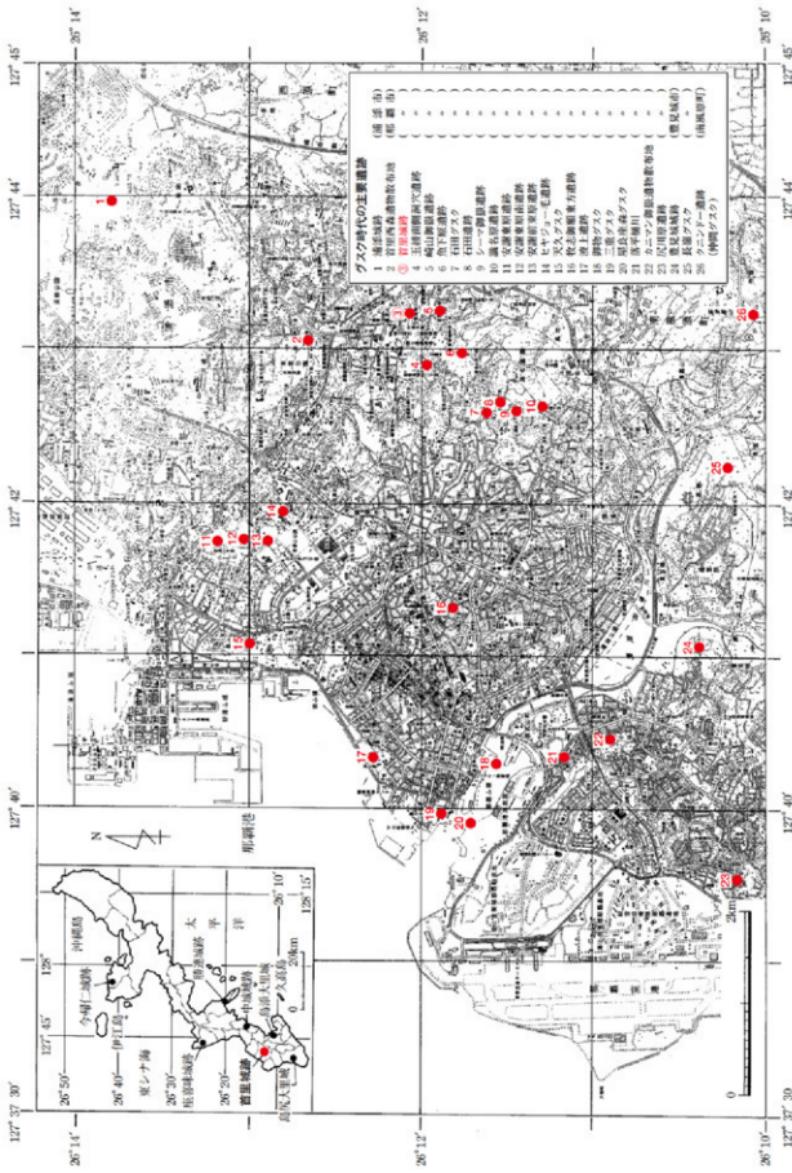
琉球王国の遺産でもあった首里城も昭和20（1945）年の太平洋戦争末期に起きた沖縄戦で、米軍の艦船及び航空機などからの集中砲火を受け、正殿や南殿・北殿などの多くの建造物が徹底的に破壊され、灰燼に帰ってしまった。更に戦後は、首里城跡に琉球大学が昭和25（1950）年に創設され、その造成工事（昭和24年6月から校舎建設）によって改変がなされキャンパスとして昭和57（1982）年までの32年間使用された（第3図）。

首里城及びその周辺文化財の整備に至るまでの時系列的な経過として、昭和45（1970）年に当時の琉球政府文化財保護委員会によって首里城跡及び周辺文化財の復元整備計画を策定した。その後に、この構想を踏まえて日本政府が第一次沖縄復帰対策要綱を策定し、閣議決定がなされた。沖縄が本土に復帰した昭和47（1972）年度から『第一次沖縄振興開発計画』（1972年～1981年までの10カ年）が着手された。この計画では、戦災文化財の復元を積極的に推進することが明記されている。第一次沖縄振興開発計画を踏襲して昭和57（1982）年に策定された『第二次沖縄振興開発計画』（1982年～1991年）では、より具体的な公園計画の位置付けがなされ、この計画で首里城一帯の整備が提言された。現在の公園整備計画の骨子となったのが、同年度に那覇市が策定した『首里金城地区歴史的地区環境整備基本計画』であった。当該計画を基本に、二年後の昭和59（1984）年度に沖縄県が都市計画公園を決定する目的で調査を実施し、首里城と一体となる周辺文化財も含めた歴史的な風致を構成している区域約18haを公園の範囲とした。本計画が今日の首里城の復元整備の指針となった『首里城公園基本計画調査報告書』（註1）であった。

その後、昭和61（1986）年度に首里城内郭の約4haを沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域として『都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）』として復元整備をおこなうことが閣議決定された（第4図・第9図上段）。翌年の昭和62（1987）年度には、沖縄県が国営公園区域を除いた城郭の外側の区域約14haを『県営首里城公園』として位置付け、建設大臣より都市計画事業の認可を受けて『首里城公園基本設計』（註2）を策定し、計画に基づいて整備が実施されている。

以上のような計画を踏まながら首里城跡の復元に伴う遺構確認の発掘調査と平行しながら復元整備が実施されてきた。但し、これらの計画が策定される以前の琉球政府時代には、昭和32（1957）年に復元修理された圓比屋武御嶽石門（註3）や昭和33（1958）年復元の首里城第二の坊門守礼門（註4）などがあった。

首里城跡で最初に復元整備が着手されたのは、昭和49（1974）年に竣工した歓会門であった。次いで昭和59（1984）年竣工の久慶門であった。首里城正殿の復元工事は、平成元（1989）年から始まり、同時に北殿、南殿・番所、奉神門、廣福門などの復元工事も実施された。平成4（1992）年には首里城正殿を含めた建造物群が復元整備され、「首里城公園」として一部が公開されている。その後、系國座・用物座（平成12年3月復元竣工）、京の内（①平成13年度：工事着手、②平成15年度：復元竣工）、下之御庭首里森御嶽（平成9年12月復元竣工）、二階殿（①平成10年度：敷地造成及び外構整備着手、②平成10年度：建築工事着手、③平成11年度：復元竣工）、書院・鎮之間（①平成15年度：外構整備着手、②平成16年度：建築工事着手、③平成19年度1月：復元竣工）が順次整備され、一部地域（二階殿、書院・鎮之間）を除いて一般に公開された。その間の平成12（2000）年12月2日には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」（註5）として首里城跡・圓比屋武御嶽石門を含む9の資



第2図 首里城跡とグスク時代の周辺遺跡

100m



第3図 旧首里城圖 (旧琉球大学校舎配置図)

産がユネスコ「世界遺産」に登録されている。平成 20 年には書院・鎮之間の庭園が復元（註 6）され一般に公開された。なお、書院・鎮之間については「首里城書院・鎮之間庭園」の名称で、平成 21 年 7 月 23 日付で国の名勝として指定されている（註 7）。

次に首里城跡外郭等の復元整備に伴う遺構確認調査などについて時系列的にその概略を記すと、沖縄が本土に復帰した昭和 47（1972）年度から沖縄開発庁の補助を受けて沖縄県教育委員会が「首里城城郭等復元整備事業」（第 4 図・第 1 表）として、首里城外郭の歓会門復元整備事業から着手した。順次年度計画に沿って外郭を半時計回りに復元整備が実施され、久慶門、木曳門、西のアザナ（物見）の石積み、京の内南側物見石積み、繼世門、東のアザナ（物見）の石積み、そして本事業の最終年度にあたる平成 13（2001）年度に右掖門北側城郭の石積みの復元工事をもって、首里城外郭の石積みや櫓門（歓会門、久慶門、繼世門）及び石門（木曳門）の全てが復元整備（註 8）された。復元整備された首里城外郭の全長は、1,080m（その内、10 m は管理用道路）であった。

首里城内郭の施設等の整備に伴う遺構確認調査は、昭和 59（1984）年度から歓会門・久慶門内側地区（調査面積：約 4,000m²、調査期間：8 月 20 日～12 月 14 日）の遺構確認調査（註 9）から開始された。昭和 60・61 年度（1985・86 年）に首里城正殿跡の遺構確認調査（調査面積約 1,500m²、調査期間：昭和 60 年 8 月～10 月、昭和 61 年 7 月～3 月）が実施され、正殿跡から 5 時期（I 期基壇～V 期基壇：14 世紀代～1945 年）の基壇跡（註 10・11）が検出されている。この成果や沖縄県立図書館に収蔵されている阪谷良之進製図の「旧首里城図（昭和 6 年頃）」などを基にして首里城正殿の設計がなされ、昭和 63（1988）年に首里城正殿の設計が完了し、平成元（1989）年から首里城正殿の建築工事が始まり平成 4（1992）年に復元竣工している。

以下、昭和 63 年から平成 21 年度までに実施された遺構確認調査を便宜的に番号を冠し、時系列的に調査年度と調査地区などを記す。

- ① 昭和 63（1988）年度：南殿・北殿跡の遺構調査（調査期間：6 月 24 日～平成元年 3 月 25 日）。
- ② 平成元（1989）年度：御庭跡・奉神門跡の遺構調査（調査期間：6 月 5 日～平成 2 年 3 月）。
- ③ 平成元（1989）年度：下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡（調査面積 5,240m²、調査期間：元年 10 月 10 日～平成 3 年 3 月 26 日）。
- ④ 平成 2（1990）年度：右掖門及び周辺地区発掘調査（調査面積：850m²、調査期間：10 月 18 日～平成 3 年 3 月 26 日）。
- ⑤ 平成 5（1993）年度：東のアザナ地区発掘調査（調査面積約 700m²、調査期間：10 月 5 日～平成 6 年 9 月 26 日）。
- ⑥ 平成 6（1994）年度：京の内（北側）地区（調査面積約 2,000m²、調査期間：11 月 21 日～平成 7 年 3 月 28 日）。
- ⑦ 平成 7（1995）年度：京の内（南側）地区（調査面積 1,000m²、調査期間：11 月 21 日～平成 8 年 3 月 28 日）。
- ⑧ 平成 8（1996）年度：京の内（西側）地区（調査面積 1,000m²、調査期間：7 月 1 日～平成 9 年 3 月 28 日）・下之御庭首里森御獄地区（調査面積 64m²、調査期間：平成 9 年 2 月 20 日～3 月 21 日）。
- ⑨ 平成 9（1997）年度：二階殿地区（調査面積 1,300m²、調査期間：8 月 4 日～平成 10 年 3 月 20 日）。
- ⑩ 平成 13・14（2001・02）年度：書院・鎮之間地区発掘調査（調査面積 850m²、調査期間：9 月 17 日～平成 14 年 3 月 15 日）。
- ⑪ 平成 15（2003）年度：黄金御殿地区発掘調査（調査面積 450m²、調査期間：6 月 2 日～12 月 27 日）。
- ⑫ 平成 16（2004）年度：淑順門地区発掘調査（調査面積：570m²、7 月 20 日～平成 17 年 3 月 1 日）。
- ⑬ 平成 17（2005）年度：御内原西地区（調査面積 565m²、調査期間：8 月 1 日～平成 18 年 1 月 31 日）・黄金御殿地区発掘調査（調査面積 50m²、調査期間：10 月 24 日～12 月 1 日）。
- ⑭ 平成 18（2006）年度：錢藏跡発掘調査（調査面積 300m²、調査期間：9 月 1 日～平成 19 年 3 月 14 日）。
- ⑮ 平成 19（2007）年度：錢藏跡・御内原北地区発掘調査（調査面積 300m²、調査期間：9 月 3 日～平成 20 年 2 月 29 日）。
- ⑯ 平成 20（2008）年度：錢藏跡南側～西側地区発掘調査（調査面積 300m²、調査期間：9 月 1 日～平成 21 年 2 月 28 日）。
- ⑰ 平成 21（2009）年度：御内原北地区発掘調査（調査面積 370m²、調査期間：9 月 14 日～平成 22 年 3 月 26 日）が実施されている。

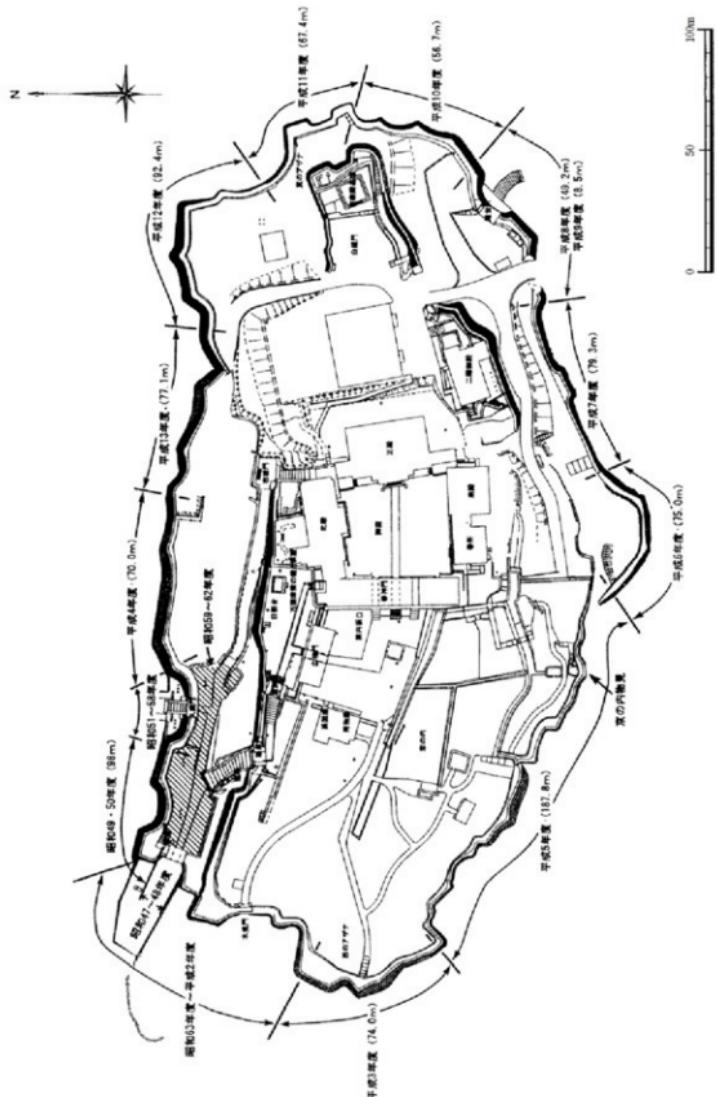
このような中で、首里城内でも最も重要な聖域であった「京の内」地域の復元整備の気運が高まり、「京の内」地域の実施計画に必要な当時の石積み遺構などを検出して、「京の内」の実施計画に反映させるべき情報の収集を目的として内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所（首里出張所）からの委託を受けて沖縄県教育庁文化課が「京の内」地区の遺構確認を目的とした発掘調査を平成 6 年度から平成 9 年度まで実施（第 9 図上段・第 14 図）した。

第1表 首里城城郭等復元整備事業等の事業費の推移

(単位:千円)

No.	年 度	事 業 名(事業箇所等)	事 業 費	うち 国 費	補 助 費
1	昭和47(1972)年度	首 里 城 歓 会 門 復 元 整 備	24,925	23,678	9.5/10
2	48(1973)	"	12,992	12,324	"
3	49(1974)	首 里 城 歓 会 門 久 慶 門 接 続 石 壁 復 元 整 備	22,094	11,047	1/2
4	50(1975)	" (49 ~ 50 年 度 計 98m)	51,016	12,008	"
5	51(1976)	首 里 城 久 慶 門 造 構 調 査	4,184	2,092	"
6	52(1977)	首 里 城 久 慶 門 復 元 整 備	22,408	17,925	8/10
7	53(1978)	"	24,235	19,388	"
8	54(1979)	"	31,333	19,388	"
9	55(1980)	"	23,872	19,097	"
10	56(1981)	"	25,263	19,979	"
11	57(1982)	"	34,466	16,295	"
12	58(1983)	"	22,019	16,463	"
13	59(1984)	首 里 城 城 郭 復 元 整 備 (歓 会 門 ・ 久 慶 門 内 側 の 石 壁 ・ 石 叠 等)	20,051	15,720	"
		"	20,051	15,720	"
14	60(1985)	(歓 会 門 ・ 久 慶 門 内 側 の 石 壁 ・ 石 叠 等) 首 里 城 城 郭 復 元 整 備 檢 討 委 員 会 首 里 城 正 殿 位 置 確 認 調 査 委 託	1,091	1,091	-
			4,155	4,155	-
15	61(1986)	首 里 城 城 郭 復 元 整 備 (歓 会 門 ・ 久 慶 門 内 側 の 石 壁 ・ 石 叠 等)	20,050	15,719	8/10
16	62(1987)	" (歓 会 門 ・ 久 慶 門 内 側 の 石 壁 ・ 石 叠 等)	20,050	15,719	"
17	63(1988)	(歓 会 門 右 披 門 城 壁)	26,230	20,564	"
18	平成元年(1989)年度	" (歓 会 門 前 庭 及 び 歓 会 門 接 続 城 壁 24.6m)	107,764	84,487	"
19	2年(1990)	" (木 戻 門 と そ の 接 続 城 郭 70.0m)	107,784	84,502	"
20	3年(1991)	" (西 の ア ザ ナ 等 城 郭 74.0m)	107,790	86,640	"
21	4年(1992)	" (久 慶 門 東 側 城 郭 70.0m)	116,195	92,956	"
22	5年(1993)	" (西 の ア ザ ナ から 繼 世 門 に か け て の 城 郭 187.8m)	116,195	92,956	"
23	6年(1994)	" (西 の ア ザ ナ から 繼 世 門 に か け て の 城 郭 75.0m)	116,195	92,956	"
24	7年(1995)	" (西 の ア ザ ナ から 繼 世 門 に か け て の 城 郭 79.3m)	125,465	100,372	"
25	8年(1996)	" (西 の ア ザ ナ から 繼 世 門 に か け て の 城 郭 49.2m)	125,465	100,372	"
26	9年(1997)	" (繼 世 門 及 び 両 側 石 壁 8.5m)	127,804	102,243	"
27	10年(1998)	" (繼 世 門 の 東 側 城 郭 56.7m)	127,804	102,243	"
28	11年(1999)	" (東 の ア ザ ナ 東 側 城 郭 67.4m)	130,038	104,030	"
29	12年(2000)	" (東 の ア ザ ナ 北 側 城 郭 92.4m)	130,037	104,030	"
30	13年(2001)	" (右 披 門 北 側 城 郭 77.1m)	123,169	98,532	"
① 外 郭 の 距 離		1.030m			
② 外 郭 城 門 (歓 会 門 ~ 繼 世 門) 及 び 各 門 接 続 石 積み の 距 離		40m			
③ 外 郭 を 横 断 す る 管 理 用 道 路 の 幅		10m			
外 郭 全 長 ① + ② + ③ =		1.080m	1,972,190	1,524,692	-

* 沖縄県教育府文化課発行『平成14年度版 文化行政要覧』に加筆修正



沖縄県教育厅文化課発行「平成6年度版～平成14年度版 文化行政要覧」を基に作成
第4図 首里城城郭等復元整備事業等 年度別（1972年度～2001年度）事業箇所

註文献・引用文献

- 註1. 首里城公園基本計画調査委員会「首里城公園基本計画調査報告書」1984年9月。
- 註2. 沖縄県土木建築部「首里城公園基本設計」1986年3月。
- 註3. 仲座久雄〔國比屋武御嶽石門復元工事報告〕『沖縄文化財調査報告 1958年』『沖縄文化財調査報告(1956年~1962年)』監修 沖縄県教育庁 文化課 那覇出版社 昭和53(1978)年7月。
- 註4. 沖縄県教育委員会「沖縄県有形文化財 旧首里城保存修理工事報告書」1993年3月。
- 註5. 文化庁・沖縄県教育委員会 監修「世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群－玉陵・園比屋武御嶽石門・今帰仁城跡・座喜味城跡・勝連城跡・中城城跡・首里城跡・識名園・齋場御嶽－」琉球王国のグスク及び関連遺産群 世界遺産登録記念事業実行委員会(沖縄県教育委員会 教育庁文化課気付) 2001年2月8日。
- 註6. 沖縄タイムス「書院・鎖之間庭園を復元」「首里城公園内あすから公開」(内容:17世紀の首里城内書院・鎖之間庭園が復元された。首里城内にあった三つの庭園の中でも本格的に復元。松園や古文書、古写真などを根据資料として、岩場は琉球石灰岩を使用し、樹種はソテツやリュウキュウウマツを植栽。芝生は与那国島から取り寄せ、当時の姿に地形を再現した。庭園は17世紀中頃に冊封使などの接待に使用。) 沖縄タイムス社 2008(平成20)年7月31日(木)朝刊。
- 註7. 平成21年度版「文化行政要覧」沖縄県教育文化課 平成22(2010)年3月。
- 註8. 平成14年度版「文化行政要覧」沖縄県教育文化課 平成15(2002)年11月。
- 註9. 沖縄県教育委員会「首里城跡－歓会門・久慶門内郭地域の復元整備事業にかかる造営調査－」1998年3月。
- 註10. 沖縄県教育委員会「旧首里城正殿跡位置確認調査報告書」1986年3月。
- 註11. 畠道嗣一・上原 静「首里城正殿跡の調査」「文化課紀要」第4号 沖縄県教育委員会 1987年3月。

参考文献(発行年度順に記載)

1. 沖縄県「首里城公園整備計画調査」1986年6月。
2. 内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所・社団法人 日本国公園総合協会「首里城地区造園土木基本設計報告書」1988年3月。
3. 財團法人 海洋博覧会記念公園管理財団「国営沖縄記念公園首里城地区整備計画」1995年3月。
4. 沖縄県教育委員会「首里城跡－南殿・北殿跡の造営調査報告書－」1995年3月。
5. 沖縄県教育委員会「首里城跡－御庭跡・奉神門跡造営調査報告書－」1998年3月。
6. 沖縄県教育委員会「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)」－1998年3月。
7. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－下之御庭跡・用物庫跡・塙泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木戸門跡発掘調査報告書－」2001年3月。
8. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－右振門及び周辺地区発掘調査報告書－」2003年3月。
9. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－」2004年3月。
10. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－」2005年3月。
11. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－」2005年3月。
12. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書－」2006年3月。
13. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－」2006年3月。
14. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－」2007年3月。
15. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－」2007年3月。
16. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－下之御庭首里森御殿地区発掘調査報告書－」2008年3月。
17. 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)」－2009年3月。
18. 沖縄県土木建築部 南部土木事務所 街路公園班「首里城公園」(概要リーフレット) 2009年3月。
19. 首里城公園管理センター「沖縄 首里城公園」(案内リーフレット) 2010年3月。

第2節 調査に至る経緯

第1節の首里城跡公園整備事業と関連して、本格的に首里城跡の復元整備が動き出してきたのは、昭和42(1967)年から始まった琉球大学の移転と、これに伴う跡地利用計画で次の三つの構想 ①県立芸術大学構想(県企画調整部)、②広域史跡公園構想(那覇市)、③首里城復元を核とした史跡整備構想(県教育庁・県文化財保護審議会)(註1)が検討された。最終的に首里城正殿などの文化遺産を復元し、首里城を含む地域を歴史的な都市公園として整備(註2)することで構想が決まり、「首里城公園基本計画調査報告書」(註3)で確定した。なお、琉球大学移転の開始と終了時期は、昭和56(1981)年から始まり、翌年の昭和57(1982)年までの二ヶ年間を要して、現在の西原町字千原へ移転した。琉球大学の移転直後から沖縄県教育委員会は、沖縄開発庁の補助を受けて昭和60(1985)年に国指定史跡首里城跡の現状変更申請の手続きを経て、戦後初めて城内の歓会門・久慶門内郭地域の発掘調査が実施された。この発掘調査と平行して沖縄県教育委員会は、県単独の予算で昭和60(1985)年10月2日～昭和61(1986)年2月14日迄の期間、旧首里城正殿跡の位置確認を目的とした発掘調査がなされた。

昭和 61（1986）年度に首里城内郭の約 4 ha を沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域に位置付け「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」として復元整備をおこなうことが閣議決定された。内郭の約 4 ha の復元整備に伴う遺構確認調査が昭和 63（1988）年から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所より沖縄県教育委員会が委託を受けて復元整備に伴う遺構確認の発掘調査が行われ、今まで継続的に実施している。

復元整備に伴う内郭の遺構確認調査は、昭和 63（1988）年の南殿跡・北殿跡地域の発掘調査から始まっている。翌年の平成元（1989）年は、特に調査対象面積が広範囲となり、その対象地域が御庭跡・奉神門跡地域および下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門まで達した。平成 2（1990）年は右掖門及び周辺地区的発掘調査が実施された。これらの発掘調査で確認された遺構などの調査成果を基にして首里城正殿・南殿・北殿などを含めた建造物群が復元整備され、平成 4（1992）年に首里城公園の第一期開園部分として首里城正殿を初めとする多くの建造物群が一部公開されて今日に至っている。

首里城内の復元整備や遺構確認のための発掘調査の進捗に伴い、未整備地域の首里城南側にある「京の内」地域の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料となる石積み遺構などの情報の収集を兼ねて平成 6（1994）年度より調査が開始された。「京の内」地域の一部は、明治 11（1936）年に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって発掘調査が実施された。伊東・鎌倉の両氏の報告（註 4）では首里城の第一拡張時に造成された古い段階の郭であると解釈がなされているのみであり、復元整備に必要な情報としては不足しているようであった。

その後、伊東・鎌倉の両氏が発掘した首里城京の内跡から出土した明代の華南彩釉陶（三彩手軸陶器）の研究をおこなった亀井明徳氏は、華南彩釉陶が国内で最も多量、且つ器種も豊富に出土していることを確認（註 5）している。

上記の伊東・鎌倉の論文や亀井氏の論文などの情報や現存する「首里城古図」・「首里城図」などの古絵図（第 13 図）の手掛かりを得てから「京の内」地区の発掘調査の事前調査とした。

ところで「京の内」地域は正殿・南殿・北殿・奉神門の存在する政治的建造物が集中する区域とは離れていて、内郭の南西側にあり、首里城の発祥とも関係のある聖域的な場所でもあった。京の内は、城内でも東のアザナ（標高 135.5m）に次いで、高所（標高 135m）に位置する。古絵図から精度の高い第 13 図の「首里城古絵図」に基づくと「京の内」には、五つの御嶽が存在していたようであり、南側の高所には首里森御嶽、西南側に真玉森御嶽、西側に「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽があったようである。その他に、首里森御嶽の東隣りに家屋（第 13 図・図 B の区画 B）や南殿番所の北西側（第 13 図・図 B の区画 A）には家屋が 2 棟描かれている。その他に「京の内」の内郭には御嶽や建物空間を仕切る石積みが四基程度と、最も高い南側地域に入る西側部分には、階段と石造りの拱門（アーチ門）が描かれている。以上の配置を念頭に入れながら発掘調査を平成 6（1994）年 11 月 21 日から平成 7（1995）年 3 月 28 日までの期間実施した。

註文献

註 1. 琉球新報「難航する琉大跡地利用／県立芸大・史跡公園／首里城復元／三構想の意見対立」1980（昭和 55）年 9 月 16 日（火）朝刊。
註 2. 沖縄タイムス「首里城公園を国営公園に／復帰 20 年事業へ／正殿 67 年度までに復元／植木構想を発表」1984（昭和 59）年 6 月 13 日（水）朝刊。

註 3. 首里城公園基本計画調査委員会「首里城公園基本計画調査報告書」1984 年 9 月。

註 4. 伊東忠太・鎌倉芳太郎「南海古陶窯」宝雲舎 1937 年。

註 5. 亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編 三上次男博士喜寿記念 論文集編集委員会 1985 年。

参考文献

1. 糸数兼治・當眞嗣一・上原 静「旧首里城正殿跡位置確認調査報告書」沖縄県教育委員会 1986 年 3 月。
2. 當眞嗣一・上原 静「首里城正殿跡の調査」『紀要』第 4 号 沖縄県教育委員会 文化課 1987 年 3 月。
3. 沖縄県教育委員会「首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－」1998 年 3 月。
4. 沖縄県教育委員会「首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告書－」1995 年 3 月。
5. 首里城研究グループ「首里城入門－その建築と歴史－」ひるぎ社 1989 年。
6. 「首里城公園ガイドブック」財团法人 海洋博覧会記念公園 管理財團首里城公園管理センター 2000 年 3 月。

第3節 調査の体制

京の内跡の発掘調査は、平成6（1994）年度～平成8（1996）年度までの三ヵ年実施し、資料整理については京の内発掘調査報告書（I）の刊行年度である平成9（1997）年度と今回の報告書作成までに係った平成21（2009）、平成22（2010）年度に限定して、下記のような体制で実施した。なお、職名等は当該年度のものを標記。

○ 平成6（1994）年度 組織（遺構調査年度）

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	嘉陽 正幸
○ 事業所管	沖縄県教育庁文化課	課長	西平 守勝
	同上	副参事	上原 武次
○ 事業総括	同上	課長補佐	知念 勇
	同上	課長補佐	新垣 末子
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管理係	係長 比屋根 正治
	同上	タ	主査 新垣 和子
	同上	タ	副主査 新崎 文子
	同上	タ	副主査 宮城 直子
	同上	タ	主事 伊波 盛治
○ 事業実施	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	係長 大城 慧
	同上	タ	主任専門員 岸本 義彦
	同上	タ	主任 任島 袋 洋
	同上	タ	専門員 長嶺 均・専門員 金城 透
	同上	タ	指導主事 西銘 章
	同上	埋蔵文化財係史跡整備班	班長 上原 静（発掘総括者）
	同上	タ	指導主事 運天 和夫
	同上	タ	指導主事 我那覇 念
	同上	タ	主任 盛本 敏
	同上	タ	主任 金城 亀信（発掘担当者）
	同上	タ	調査嘱託 高宮とり・渡邊尚子

○ 専門調査指導・助言（遺構調査、資料整理 平成6年度～平成8年度）

文化庁記念物課	調査係	整備部門	主任文化財調査官	田中哲雄	平成6年
同上	タ	史跡部門	文化財調査官	伊東正義	平成7年
同上	タ	史跡部門	文化財調査官	増潤 徹	平成8年
奈良国立文化財研究所	元所長	坪井清足	（平成6年）		
同上	飛鳥藤原宮跡発掘調査部	元部長	牛川喜幸	（庭園 平成6年）	
中国福建省文化庁文物所	副所長	鄭國珍	（陶磁器・城郭 平成7・8年）		
福建省博物館	副研究員	楊 琦	（陶磁器・城郭 平成6年）		
ベトナム 国立ハノイ考古学研究所	主任研究員	チン・カオン・トゥホン	（Trinh Cao Tuong）		
カナダ トロント大学	教授	リチャード・ピアソン	（R.J.Pearson）		
九州大学 文学部	教授	西谷 正	（城郭 平成7年）		
専修大学 文学部	教授	亀井明徳	（陶磁器 平成6年）		
愛媛大学 法文学部	助教授	村上恭通	（鉄製品 平成8年）		
東京外国语大学	専任講師	小川英文	（フィリピン・東南アジア考古学 平成6年）		
青山学院大学 文学部	教授	田村晃一	（考古学 平成6年）		

- 熊本大学 法文学部 元教授 白木原和美（考古学 平成6年）
鹿児島大学 法文学部 教授 上村俊雄（考古学 平成6年）
名古屋大学 文学部 教授 渡邊 誠（考古学 平成7年）
沖縄国際大学 文学部 教授 高宮廣衛（考古学 平成6・8年）
ノルウェー科学アカデミー 博士 トゥール ハイエルダール（Thor Heyerdahl）（平成8年）
鎌倉考古学研究所 所長 手塚直樹（陶磁器 平成8年）
漆器文化財科学研究所 所長 四柳嘉章（漆器 平成6年）
沖縄県指定無形文化財保持者 前田孝允（琉球漆器 平成6年）
沖縄県文化財保護審議会 委員長 嵩元政秀（史跡・名勝・考古学 平成6年）
沖縄県文化財保護指導委員 玉津博克（史跡・名勝 平成6・7年）
福岡市美術館 学芸員 尾崎直人（タイ・ベトナム陶磁 平成7年）
福岡市教育委員会 埋蔵文化財係 主事 佐藤一郎（陶磁器 平成8年）
宇佐市教育委員会 文化課 文化財係 技師 江藤和幸（史跡・考古学 平成8年）
浦添市美術館 学芸員 金城聰子（漆器 平成6年～8年）
那覇市教育委員会 文化課 課長 金武正紀（陶磁器・考古学・史跡 平成6年～8年）
同 上 ↗ 主査 烏 弘（考古学 平成6～8年）
同 上 ↗ 主事 玉城安明・主事 仲宗根 啓（考古学 平成6・7年）
那覇市教育委員会 壺屋焼物博物館準備室 室長 渡名喜 明（美術・工芸 平成7・8年）
同 上 非常勤学芸員 我部太郎（美術史 平成7・8年）
北谷町教育委員会 文化課 主事 山城安生（考古学 平成6年）
南風原町教育委員会 文化課 学芸員 上地克哉（考古学 平成6年～8年）
玉城村教育委員会 社会教育課 主事 西平 剛（史跡・考古学 平成6年～8年）
糸満市教育委員会 文化課 主事 湯城 清（考古学 平成7年）
同 上 ↗ 主事補 大城一成（考古学 平成7年）
中城村教育委員会 生涯学習課 主事 渡久地 真（史跡・考古学 平成6年）
今帰仁城跡整備研究委員会 委員 名嘉正八郎（歴史 平成7年）
同 上 委員 赤嶺和男（建築 平成8年）
財団法人 沖縄県文化振興会 史料編集室 主幹 安里嗣淳（考古学 平成6～8年）
沖縄県立博物館 学芸課長 當眞嗣一（史跡・考古学 平成6年）
琉球大学 元教授 仲松弥秀（民俗・地理学 平成7年）
法政大学 文学部 元教授 外間守善（国文学 平成6年）
琉球大学 法文学部 教授 池宮正治（国文学 平成6～8年）
琉球大学 法文学部 教授 高良倉吉（歴史学 平成6～8年）
浦添市教育委員会 文化課 主幹 安里 進（考古学 平成8年）
琉球大学 法文学部 教授 池田榮史（考古学 平成6・7年）
碁山町教育委員会 係長 山田 正（史跡・考古学 平成8年）
○ 聞き取り調査および情報提供者（平成6～8年度）
阿波根直盛・新垣幸有・石川逢仁・上江洲安英・上間秀政・大城宜英・我喜屋宗徳・我喜屋 満・桂 辰哉・小橋川興永・島 秀範・城間富吉・高江洲良吉・田場典喜・仲本政治・真栄平房敬・宮城盛長・屋嘉比朝勇・屋比久益貢・首里城復元期成会・琉球大学
○ 発掘調査協力者（遺構実測など 平成6～8年度）
県教育庁文化課 埋蔵文化財係 主任 烏袋 洋・金城 透（平成6～8年）
県教育庁文化課 埋蔵文化財係 指導主事 西銘 章（平成6年）

県教育庁文化課 埋蔵文化財係 嘱託調査員 新城 恵・田中ゆきの・仲座久宣（平成6・7年）
同 上 タ タ 上原清乃・仲與根ゆかり（平成6～8年）
同 上 タ タ 仲間留美・又吉純子（平成6～8年）
同 上 タ タ 長田 剛（平成7・8年）
同 上 史跡整備係 嘱託調査員 矢沢秀雄（平成6～8年）
同 上 タ タ 上原 久（平成6・7年）

石垣市教育委員会 文化課 主事 烏袋綾野（平成6年）

下地町教育委員会 文化財係 主事 川満邦弘（平成7年）

○ 発掘調査作業員（平成6年度）

呉屋正一・小波津夏子・山畠キミ・玉城富子・呉屋光子・大城輝子・小波津ヨシ子・幸地ヨシ子・
小橋川恵子・小橋川幸子・永吉弘子・小湾清美・仲程喜美子・川鍋敬子・福嶺フミ子・仲里ハル子・
玉城信子・嘉敷キミエ・呉我フジ子・新垣美智子・中田邦子・嘉手納 太・諸見里幸子・烏袋文子・
松本倫子・柚木崎末子・堀切邦子。琉球大学 学生 米須美津・北谷 香・比嘉宮子・神里利恵子。
富山大学 学生 古屋聰洋。

○ 資料整理作業員（平成6年度）

安和千代子・平良貴子・外間 瞳・烏袋春美・金城礼子・西銘バトロシニア・仲村恒子・島 京美・
備瀬枝美子・座間味美津子・立津春枝・島袋里美・喜屋武さおり・源河秀子・玉城恵美利・知念純子・
石巒眞由美・新垣千恵子・川満奈美子・喜舎場かおり・高良三千代。

別府大学 学生 城間 駿。

○ 発掘調査協力者（平成6年度）

金成淳一・松本 茂（以上2名 富山大学 学生）。山本正昭（奈良大学 学生）。

松竹 讓・喜屋武盛世・宮里富二男（以上3名 松竹重機）。澤紙直彦（与那嶼測量設計）

国営沖縄記念公園事務所 首里出張所・海洋博覧会記念公園 管理財団首里城管理センター

○ 平成7（1995）年度 組織（遺構調査年度）

○ 事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 仲里長和
○ 事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 西平守勝
同 上 副参事 濱比嘉勝
○ 事業総括 同 上 課長補佐 日越国昭
同 上 課長補佐 新垣末子
○ 事業事務 沖縄県教育庁文化課 管理係 主幹兼係長 比屋根正治
同 上 タ 主査 新垣和子
同 上 タ 副主査 宮城直子
同 上 タ 副主査 新崎文子
同 上 タ 主事 伊波盛治

○ 事業実施 沖縄県教育庁文化課 史跡整備係 係長 上原靜（発掘統括者）
同 上 タ 指導主事 運天和夫
同 上 タ 指導主事 我那霸念
同 上 タ 主任 盛本勲
同 上 タ 主任 金城亀信（発掘担当者）
同 上 タ 嘱託調査員 高宮とり・渡邊尚子

○ 事業協力 沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 係長 大城慧
沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 主任 烏袋洋

沖縄県教育庁文化課 墓蔵文化財係 指導主事 西銘 章
同 上 専門員 金城 透

○ 発掘調査作業員（平成7年度）

大城輝子・仲程喜美子・永吉弘子・島袋文子・稲福フミ子・仲里春子・玉城信子・小波津ヨシ子・
袖木崎末子・城間智子・與屋正一・小波津夏子・山畠キミ・與屋光子・幸地ヨシ子・玉城富子・
小橋川恵子・小橋川幸子。

別府大学 学生 城間 隆、琉球大学 学生 米須美津、富山大学 学生 金成淳一、松本 茂、沖縄国際大学
学生 上原 久

○ 資料整理作業員（平成7年度）

伊波小百合・新垣千恵子・石橋朝子・小嶺禮子・浜元春江・又吉純子・仲間留美・大村広美・高良三千代・
玉城恵美利・安和千代子・平良貴子・金城 薫・知念純子・岡村綾子・上原園子・外間 瞳・津波古好子・
比嘉登美子・折田衣代・金城美折・金城さおり・長田剛・伊波和歌子・又吉亜由美

○ 平成8（1996）年度 組織（遺構調査年度）

○ 事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 仲里 長和
○ 事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 大城 将保
同 上 副参事 川満 一成
○ 事業総括 同 上 課長補佐 日越 国昭
同 上 課長補佐 稲嶺 靖子
○ 事業事務 沖縄県教育庁文化課 管理係 主幹兼係長 比屋根 正治
同 上 ♀ 主査 村山 佐代
同 上 ♀ 副主査 新垣 敏子
同 上 ♀ 主任 當間 保智
同 上 ♀ 主事 上原 直樹

○ 事業実施 沖縄県教育庁文化課 史跡整備係 係長 上原 静（発掘總括者）
同 上 ♀ 指導主事 運天 和夫
同 上 ♀ 指導主事 我那霸 念
同 上 ♀ 主任 盛本 煎
同 上 ♀ 主任 金城 亀信（発掘担当者）
同 上 ♀ 嘱託調査員 高宮とり・渡邊尚子
同 上 ♀ 嘱託調査員 矢沢秀雄・稲垣千明

○ 事業協力 沖縄県教育庁文化課 墓蔵文化財係 係長 大城 慧
同 上 ♀ 主任 島袋 洋
同 上 ♀ 指導主事 比嘉 啓
同 上 ♀ 専門員 長嶺 均・金城 透
同 上 ♀ 専門員 上地 博・仲座 久宜

○ 発掘調査作業員（平成8年度）

大城輝子・仲程貴美子・永吉弘子・小波津ヨシ子・桃原隆信・瑞慶覧長祐・瑞慶覧繁美・真栄城千枝子・
宮城澄子・中原ミツ子・安次富マサ子・諸見里幸子・金城和也・城間 隆・山本正昭・喜舎場盛安・
安次富正寿・桃原佐恵美・仲村トヨ子・山内利江子・小松博幸・中塚末子・與我フジ子・宮国恵子・
与那嶼勢津子・大城愛子・大城かおる・外間徳男

○ 資料整理作業員（平成8年度）

米田愛子・知念純子・岡村綾子・新垣千恵子・伊波小百合・嘉数禮子・金城 薫・備瀬枝美子・浜元春江

・玉寄智恵子・石橋朝子・石垣奈美・津波昭史・鳥袋春美・仲宗根三枝子・城間千鶴子・田場直樹・
當山慶子・金城美祈・我那覇悠子・比嘉孝子

◎ 平成9(1997)年度 組織 「京の内跡発掘調査報告書(1)」報告書刊行年度)

○事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	安室 肇
○事業総括	沖縄県教育庁文化課	課長	大城 将保
	同 上	課長補佐	日越 国昭
	同 上	課長補佐	種嶋 靖子
○事業事務	沖縄県教育庁文化課	管理係	主幹兼係長 大浜 節
	沖縄県教育庁文化課	管理係	主査 村山 佐代
	同 上	タ	主査 砂川 邦子
	同 上	タ	主事 上原 直樹
○事業実施	沖縄県教育庁文化課	史跡整備係	係長 上原 靜
	同 上	タ	充指導主事 運天和夫
	同 上	タ	充指導主事 我那覇 念
	同 上	タ	主任 盛本 煉
	同 上	タ	主任 金城 透
	同 上	埋蔵文化財係	主任 金城亀信
	同 上	タ	補助員 渡邊尚子・花城五百子・宮城利香・崎浜陽子
	同 上	タ	嘱託調査員 矢沢秀雄・鳥袋春美・赤嶺雅子・玉寄智恵子
	同 上	タ	嘱託調査員 又吉純子・比嘉優子・城間 肇

○資料整理指導および協力者

文化庁 記念物課 埋蔵文化財部門 文化財調査官 坂井秀弥(中国陶磁)

文化庁 タ タ 文化財調査官 小池伸彦(考古学 生産遺跡)

出光美術館理事(元東京国立博物館 次長) 長谷部泰爾(中国陶磁)

出光美術館 学芸課長 弓場紀知(同 上)

国立歴史民俗博物館 考古研究部教授 吉岡康暢(中世陶器)

財団法人 市原市文化財センター 調査研究員 牧野光隆(考古学)

財団法人 沖縄県文化振興会 史料編集室 主幹 安里嗣淳

沖縄県教育庁文化課 埋蔵文化財係 係長 大城 肇

同 上 タ 主任専門員 岸本義彦

同 上 タ 主任 鳥袋 洋

同 上 タ 専門員 上地 博

同 上 タ 充指導主事 比嘉 聰

沖縄県立博物館 学芸課 主幹兼課長 當眞嗣一(「京の内」出土品展関係者)

同 上 タ 充指導主事 津波古 聰(「京の内」出土品展指導助言)

同 上 タ 学芸員 仲間留美(「京の内」出土品展示協力)

佐賀県教育庁文化課 課長補佐 大橋康二

沖縄県教育庁文化課 文化財係 有形文化財(美術工芸)主任 園原 謙

同 上 タ 民俗文化財 充指導主事 桃原茂夫

財団法人岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター調査課 課長補佐 高橋與右衛門

那覇市教育委員会 文化課 課長 金武正紀

岡山県古代吉備文化財センター調査第二課長 伊藤 見

東洋陶磁学会会員 森本朝子

山口県立萩美術館 学芸員 宮田絵津子

○発掘調査作業員（平成9年度）

小波津ヨシ子・大城輝子・大嶽愛子・永吉弘子・仲程喜美子・瑞慶覧 長祐・瑞慶覧 純美・諸見里幸子・安次富マサ子・勢理客智也・真栄城千枝子・宮城澄子・中原ミツ子・桃原隆信・島袋朝輝・桃原さおり・島仲恵子・比嘉清恵・比嘉剛・浦崎京子・伊佐美幸・上間宏美

沖縄国際大学卒業生 藤崎 京・別府大学卒業生 城間 駿・奈良大学 学生 山本正昭。

○資料整理作業員（平成9年度）

諸盛智秋・嘉数禮子・瀬瀬枝美子・石橋朝子・知念純子・岡村綾子・伊波小百合・玉城恵美利・源河秀子・渡邊尚子・牧志加代子・国吉春美・池原直美・瑞慶覧尚美・謝名元かずみ・茂太春枝・川上貴美子・上原富士子

○資料整理作業協力者（平成9年度）

比嘉孝子・新垣利津代・比嘉登美子・大城勝江・上原園子・城間千鶴子・外間 瞳・仲宗根三枝子・安和千代子・永友和子・村山理代・折田衣代・長田 剛・田中ゆきの・金城洋子・高良三千代・玉榮さとみ・吉田昌子・金城 薫・手嶋永子

○平成21（2009）年度 組織〔「京」の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）〕資料整理年度

○事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 金武 正八郎

同 上 教育指導統括監 大城 浩・教育管理統括監 岩井 健一

○事業統括 沖縄県教育庁文化課 課長 大城 慧

同 上 副参事兼文化班長 仲本 興彦

○事業事務 沖縄県教育庁文化課 文化班主任 篠田 卓也

同 上 タ主任 林 梨津子

同 上 記念物班班長 島袋 洋

同 上 タ指導主事 久高 健

○事業実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 参事兼所長 玉榮 直

同 上 総務班班長 嘉手苅 勤

同 上 総務班主任 木永 恵

同 上 タ再任用主査 知念百合子

同 上 タ主任 村吉由美子（予算担当）

同 上 調査班班長 金城龟信（資料整理・報告書作成担当）

同 上 タ主任 仲座 久宣（御内原地区発掘調査担当）

○資料整理指導および協力者

沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 教授 上原 静（考古学）

京都国立博物館 学芸課 工芸室長 久保 智康（金属製品解釈指導）

佐賀県立九州陶磁文化館 館長 大橋 康二（陶磁器）

千葉県立中央博物館 動物学研究科 上席研究員 黒住 耐二（貝類分析解釈指導）

○資料整理作業及び協力者（平成21年度）

沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班主任 知念 隆博（金属製品・ガラス製品 軟X線撮影・現像）

文化財調査嘱託員 岩元さつき・大城 剛・大堀 皓平・内間 真吾・岸本 竹美

埋蔵文化財資料整理嘱託員 赤嶺雅子・新垣利津代・池原直美・伊藝由希・石嶺敏子・伊藤恵美利・伊禮若奈・上原園子・上原美穂子・大村由美子・荻堂さやか・金城政史・金城友香・久保田有美・崎原美智子・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・平良貴子・

高良三千代・玉城照美・玉城実子・玉寄智恵子・友利映子・仲宗根三枝子・
諸久村泰子・外間瞳・比嘉登美子・久田慎子・又吉純子・矢舟章浩・
吉村綾子

資料整理作業員 上地由紀子・具志良子・津多 恵・宮里有季子・又吉志麻子

○ 平成 22 (2010) 年度 組織 「京の内跡発掘調査報告書(Ⅲ)」報告書刊行年度)

- 事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 金武正八郎
同上 教育指導統括監 大城浩・教育管理統括監 山里清
○ 事業総括 沖縄県教育庁文化課 課長 大城慧
同上 副参事兼文化班長 仲本興彦
○ 事業事務 沖縄県教育庁文化課 文化班主任 篠田卓也
同上 タ 主任 城間奈津子
同上 タ 主任 林梨津子
○ 事業事務 沖縄県教育庁文化課 記念物班 班長 島袋洋
同上 タ 指導主事 久高健
○ 事業実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 守内泰三
同上 総務班班長 嘉手勘勤
同上 タ 主査 玉寄秀人
同上 タ 主査 本永恵
同上 タ 主査 恩河朝子
同上 タ 再任用主査 比嘉市子
同上 タ 臨任主事 玉城飛鳥
同上 調査班班長 金城龟信(資料整理・報告書作成担当)
同上 タ 主任 渚戸哲也(叔順門西地区発掘調査担当)

○ 資料整理指導(平成 22 年度)

沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 教授 上原 靜(考古学)

京都国立博物館 企画室長 久保 智康(金属製品解釈指導)

東京文化財研究所 保存修復科学センター 分析化学研究室長 早川 泰弘(保存科学)

佐賀県立九州陶磁文化館 館長 大橋 康二(陶磁器)

糸満市役所 経済観光部商工労働課 課長 金城 善(歴史民俗関係指導)

○ 資料整理作業及び協力者(平成 22 年度)

沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班主任 中山晋(地形図データ処理加工)

文化財調査嘱託員 岩元さつき・内間真吾・大城歩・岸本竹美・具志堅清大・菅原沙香・瑞慶覧長順・
徳嶺里江・長嶺優・比嘉優子・宮城明恵・山口こずえ

埋蔵文化財資料整理嘱託員 亦嶽雅子・新垣みどり・新垣裕子・池原直美・伊藤由希・伊佐えりな・
石嶺敏子・伊藤忠美利・殷俞平・上地由紀子・上原園子・上原美穂子・
大村由美子・金城政史・具志良子・久保田有美・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・
高良三千代・玉城実子・玉城照美・玉寄智恵子・津多 恵・土田智恵美・
當山哲也・仲宗根三枝子・仲宗根めぐみ・中山まり・野村知子・比嘉登美子・
諸久村泰子・外間瞳・又吉志麻子・又吉純子・宮里絵里・矢舟章浩・
山川由美子・吉村綾子

資料整理作業員 城間裕子

第4節 調査の経緯

首里城京の内跡の発掘調査は、平成6（1994）年11月21日から開始して翌年の3月28日までの約5ヶ月間にわたって実施された（第9図上段）。なお、事前に不発弾検出のための磁気探査を9月19日・20日の二日間実施し、異常点の掘削探査に立ち合って調査を実施した。

調査地区的発掘前の状況は、平成4（1992）年の首里城正殿、北殿、南殿、奉神門、廣福門などの復元整備が完了し、首里城公園として一部が開園した。開園に伴って京の内地域は、北側の下之御庭から南側の斜面地まで客土がなされ、全面に芝張りで暫定的な仮整備が行われていた。客土は琉球大学の基礎跡より上になされていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をバックホウ（クローラ型）でおこない琉球大学の旧地表面まで剥ぎ取った後に磁気探査（水平探査）をおこなった。磁気探査の測線間隔は、1m間隔の35測線で探査の総距離は2,432mであった。磁気探査の結果、発掘調査地区内で異常点が61ヶ所が確認された。掘削を伴う確認探査で61ヶ所の内、29ヶ所が鉄筋コンクリート、鉄筋、鉄パイプ、鉄片、鉄筋コンクリート板、鉄屑、鉄管、番線（針金）入りコンクリート、マンホールの9種類が確認された。磁気探査での磁気異常測定から反応した磁気量は、5ガウス～50ガウス以上で鉄屑・鉄片・鉄パイプのサイズなどの差で、磁気量が変化するようであった。異常点61ヶ所の内、深度が90cm～100cmまでの範囲内で、磁気量が14ガウス～60ガウスの範囲内に収まった10ヶ所については、調査員が立ち合いで往時の遺物や遺物包含層を確認する目的も兼ねて不発弾の検出を行った。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や沖縄戦で使用された不発弾等は検出されなかった。

この時点で磁気探査を終了したが、琉大地盤を東側から西側へバックホウ（クローラ型）で慎重に旧表土を削平しながら掘り下げたところ手榴弾4発、砲弾2発を検出したため、関係機関に連絡を入れて処理を依頼した。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業による除去をおこなっていた調査員が持ち上げた石の下から完形の信管付の不発弾（推定サイズは長さ64.2cm、幅17.1cmで、野戦砲155ミリ砲弾以上から203ミリ未満の砲弾とみられる。弾頭信管が東に向いている事から米軍が那覇の西方13kmのチーピシにある神山島に重砲陣地を構築、この陣地から発射された砲弾の可能性がある。）が見つかり、調査員は手に持った石（25kg）を下ろすわけにもいかず、そのままゆっくりと栗石の中を歩きながら10数m離れた土砂置き場まで石を運んだ。急ぎ、調査員が戻って不発弾の状況を確認したところ砲弾先端の信管に青錆が発生し、非常に危険な状態にあると判断して土囊袋に土砂を入れて、土囊袋で不発弾の周辺を囲い、更に直射日光が当たらないようにブルーシートで覆い、直ちに警察に通報し、自衛隊へ不発弾処理を依頼した。

不発弾も無事撤去されたが、磁気探査は地表面から1m以内しか反応しないことが後になってわかった。また、発見された不発弾は、砲弾が回転しながら飛来し、回転しながら遺構内の栗石に潜り込んで、砲弾先端部分の信管が栗石に衝突することなく栗石と栗石の間に挟まつたまま停止して不発弾となつたことが判明した。

このような状況で琉球王国当時の地表面と首里第一尋常高等小学校（1912年～1945年）当時の地盤までバックホウ（クローラ型）や手振りで掘り下げたが、調査地区的南側半分は琉球大学校舎（短大管理棟、理科実験室、教育校舎及び同ビル別館、法文校舎及び同ビル別館Bなど）建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は琉大校舎地盤のレベルより低い地域は、道路、中庭、各校舎への通路と利用されたことと校舎などの構築物が建設される事がなかった事が幸いして、旧表土レベル内の軽微な擾乱を受けている程度で、全体的に遺構の保存状態は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までバックホウで慎重に削平しながら遺構を確認しながら掘り下げた。この辺はオペレーターの松竹謙氏の長年の経験（10年）と技術が生かされ5cm前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。遺構直上より下部の発掘調査は、人力による手作業で遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては確認され次第、第16図のように遺構の形状などから記号と番号を検出順に冠していく。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレンチを入れながら発掘調査を実施させた。結果として検出された遺構は51基（調査終了時点で、遺構番号に重複が発生）を数えた（註1）。その後、遺構の整理（途切れた石積み遺構同士が繋がり一つの遺構として整理、SA19・SA20・SA28が土壤SK01の倉庫跡となるなど）と検討をすすめたところ平成12（2000）年度の段階で39基（註2）となった（第1表）。

これらの遺構発掘調査で約5ヶ月を要したが、土層図や遺構の断面図の作成などで時間を要し、実測図が完成したのは、平成7（1995）年12月14日までの期間となり、実に発掘調査開始から終了までの期間は1年1ヶ月間（平成6（1994）年11月21日～平成7（1995）年12月14日）を要した。その間、国営沖縄記念公園事務所より新たに平成7年度事業（第14回）で、京の内南側一体の1,000m²を受託事業として県教育委員会が発掘調査を実施することとなり、管理用道路の北側一帯を「京の内北地区」（平成6年2,000m²）と同道路の南側一帯を「京の内南地区」（平成7年1,000m²）と地区を分けて、平成7年度の南地区の発掘調査と平行しながら平成6年の北地区的図面実測作業を行い、両地区とも無事に作業を平成7（1995）年12月14日に終了した。引き続き、平成8（1996）年7月1日～3月28日までの9ヶ月間、「京の内西側地区」（調査面積約1,000m²）を実施した。

第2表 平成6（1994）年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係

NO.	種類	遺構の記号と番号	旧件数（1994年時点）	新件数（2000年時点）
1.	石積み	SA01～SA27・SA29～SA34	33基	17基
2.	石列	SR01・SR02	2基	2基
3.	石敷き・磚敷き	SS01～SS03	3基	6基
4.	溝	SD01～SD07	7基	10基
5.	土壌	SK01～SK03	3基	3基
6.	建物	SB01・SB02	2基	1基
7.	階段	SA28	1基	0基
遺構合計			51基	39基

平成6（1994）年に実施した京の内北地区（約2,000m²）の埋め戻しは、平成8（1996）年2月29日に遺構や往時の面を保護するために白砂を15cm前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区2,000m²に敷いて、その上に残土を50～70cmの厚さで盛って埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機（バックホウ、タイヤショベル、ローラー）を使用するため、埋め戻しの方法について協議しながら行った。遺構面については調査員立ち会いのもとで人力による埋め戻しを実施した。

註文献

- 註1. 沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会 平成10（1998）年3月。
 註2. 金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」重要文化財指定記念 特別企画展「首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－」沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。

引用及び参考文献

1. 貢団法人 海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成7（1995）年3月。
2. 金城亀信「首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶磁器－紅釉水注を中心に－」『特集 琉球考古学最新情報』考古学ジャーナル N0.437 1998年。
3. 沖縄県不発弾対策協議会「不発弾等処理対策便覧」2001年3月。
4. 平成15年度 大規模駐留用地等利用推進調査事業 文化庁支出委任「埋蔵文化財広域発掘手法検討調査業務概要－物理探査及び検証発掘調査の検討成果－」沖縄県教育委員会 2004年3月。
5. 平成15年度 文化庁支出委任「物理探査を利用した埋蔵文化財広域発掘調査手法－物理探査実施マニュアルおよび解説－」沖縄県教育委員会・社団法人物理探査学会 2004年3月。
6. 金城亀信「沖縄における物理探査の現状」『文化財と探査』vol.6 No.2 日本国文化財探査学会 2005年8月。
7. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年3月。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

首里城跡は、昭和47(1972)年5月15日の本土復帰の際に国の史跡として指定された。その後、平成12(2000)年12月2日に国際連合教育科学文化機関「ユネスコ(UNESCO)」の世界遺産(文化遺産)として首里城跡を含む9資産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として登録され、平成22(2010)年に登録10周年目を迎えた。

国指定史跡首里城跡は、沖縄県庁の所在地である沖縄本島南部の那覇市にあり、地番が那覇市首里当之蔵3丁目1番となっている。かつては琉球大学が所在した場所(第3図・第84図・第85図)であった。

那覇市の総面積は、平成20(2009)年10月現在で39.24km²(参考:1995年の総面積は38.74km²)を有している。那覇市の総人口は、平成21(2010)年11月末現在で318,300人、世帯数136,088世帯である[参考:平成8(1996)年10月1日現在の人口は300,809人、世帯数105,638世帯]。気候は亜熱帯気候に属している。

那覇市の平成22(2010)年12月現在の気象概要是、平均気温は23.1℃、最高気温33.2℃、最低気温9.1℃、総降水量2,895.5mmであった[参考:京の内跡の発掘調査を最初に実施した平成6(1994)年の那覇市の平均気温は23.0℃、最高気温33.7℃、最低気温10.3℃であった]。

曾て琉球王国の王都であった首里の町は、那覇市内でも比較的に標高の高い地域(第2図、第5・6図)にあり、概ね70~135m程度を有する第四紀層の琉球石灰岩台地に形成された町である。町の南側にある標高100~135mの丘陵上に首里城が立地している。

首里城跡(第5・6図)の北には、末吉の丘陵があり、西から西森(標高102.1m)や虎頭山(標高132.5m)、そして北東には王府時代に旧暦の正月・五月・九月に国王の親祭がなされた弁ヶ嶽(標高165.6m)と称される丘へと途切れながら小丘陵が点在する。これらの丘陵と首里城の間を儀保川が西へと流れ注いでいる。弁ヶ嶽の南側には、南風原町との境界となるナゲーラ川が南西へと流れる。南側には首里城眼下を流れる金城川と識名丘陵を望むことができる。首里丘陵の南側から西側一帯は急傾斜や緩斜面となり、金城川や真嘉比川が安里・大道の区域を流れ漸次、緩い傾斜をもって平坦地の那覇市内へと移行する。

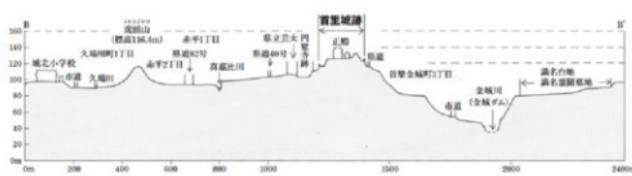
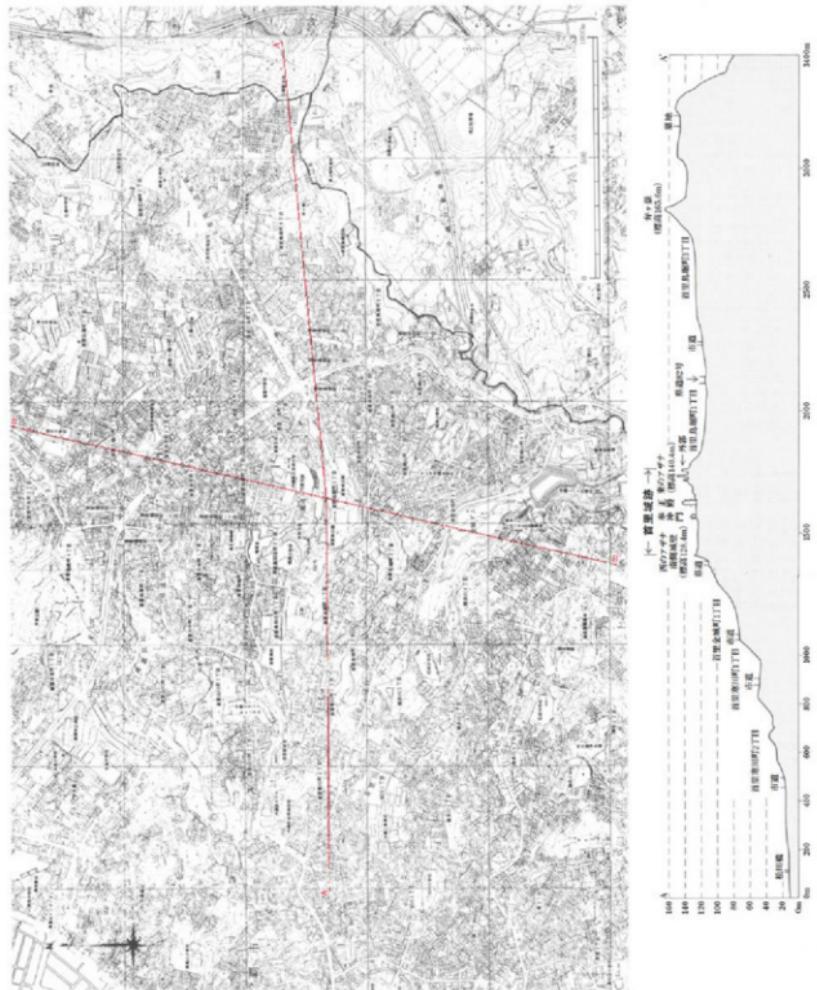
首里城を中心に周辺地形をみると東側および南・北の両側は、三方向に丘陵や河川による自然地形が城の障壁となっていて、西側の一部(松川・大道方面)と北西側の一部(松島・古島方面)が丘陵の尾根となり、緩やかな斜面となっている。この尾根緩斜面の内側が急斜面となり漸次、南北方向へ扇状に開いたような盆地状の地形となっている。首里周辺の地質の基盤は新第三紀与那原層下部シルト岩(泥岩)で、その上部に前述した琉球石灰岩(第四紀層琉球層群下部)が堆積している。

このように首里の南側丘陵地の西寄りの高所(標高100~135m)に城を普請するには最良の適地(第5図)であったものとして理解される。また、首里城内の東のアザナ(135.5m)、西のアザナ(125.5m)、京の内の物見(135m)からは、北は座喜味城跡・浦添城跡の立地する丘陵、東は久高島や大里城跡・糸数城跡の所在する丘陵地を確認することができる。南に目を向けると遠くは多々名グスク・八重瀬グスクのある丘陵地も確認できる。西側は天候が良ければ久米島・波名喜島・栗国島までが視野に入る日もある。

今回報告の対象となる地域は、首里城の内部下之御庭に接する南側の地域で琉球王国時代においては3~7m程度の高い石積みで区画されていた。俗に「京の内」と呼称されていた区域である。京の内は首里城の中でも聖域として崇められていた場所でもあった。京の内の南側は城内でも高い位置にあり、標高は135mを有し、北側に向かって傾斜しながら標高121mの平坦地である下之御庭へ移行する。下之御庭の北側から下位の久慶門・歓会門の内側地域は、昭和59(1984)年の発掘調査で斜面の中間から下は琉球王国時代の土木事業による造成で埋め立てられた人工の地盤であることが確認されている。

参考および引用文献

・沖縄県統計協会「2011県民手帳」2011年度版。



城北小学校～谷名台地図(総延長2400m)の横断図

第55図 首里城周辺の横断図
〔地形図全図(1:10,000) 那珂市都市計画部計画課 平成6年3月「首里城跡園地保育行文化事業を盛り込むせて作成した。」〕

- ・那覇市教育委員会『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書－』1986年。
- ・沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年。
- ・木崎甲子郎編著『琉球の地質誌』沖縄タイムス社 1985年。
- ・沖縄県文化財調査報告書 第88集『首里城跡－歓会門・久慶門内側地区の復元整備にかかる遺構調査－』沖縄県教育委員会 1988年3月。
- ・沖縄県文化財調査報告書 第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会 1998年3月。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年3月。
- ・那覇市役所『那覇市』公式ホームページ www.city.naha.okinawa.jp 確認日：2010年12月31日。

第2節 歴史的環境

昭和57（1982）年に那覇市教育委員会が報告した遺跡の実数は、38遺跡（註1）が確認されていたが、22年後の平成16（2004）年に沖縄県立埋蔵文化財センターが県内各市町村に依頼作成した「市町村別遺跡情報一覧（暫定）」に換ると那覇市内には79遺跡が登録されている（註2）。22年間で遺跡数が41件増加している。増加の原因は、個人住宅及び公共施設の建て替えによるものや昭和62（1987）年に米軍用地（牧港ハウジングエリア）が返還され、これに伴う土地区画整理事業で古墓群やグスク期の遺跡が21箇所（註3）発見され、発掘調査が実施された。那覇市教育委員会文化財課のひとつの考え方として、首里城周辺を「城下町的遺跡群」、那覇港周辺を「港町的遺跡群」などとして位置づけているようである（註4）。

首里周辺での遺跡調査（第6図）で、南側の識名丘陵では沖縄県農業試験場跡地の西方にある識名台地東縁の琉球石灰岩崖下に嵩下原第Ⅰ洞穴（旧石器時代）、嵩下原貝塚（縄文後期相当）の報告（註1）がある。識名台地内では識名原遺跡（弥生～平安時代相当～近世・近現代。註5）、識名シーマ御嶽遺跡（グスク時代。註6）などが確認されている。そして、首里城の南側に近接する崎山御嶽遺跡からは奄美諸島で形式設定された縄文後期の面繩東洞式土器や石斧などが報告（註7）があり、首里城城郭南側斜面（京の内南側崖下一帯）からも面繩東洞式土器が2片と荻窓式若しくは大山式土器1片、弥生～平安時代相当の土器1片などが報告（註8）されている。

更に首里城内郭の下之御庭～木曳門地区の調査では、面繩東洞式土器2片、嘉徳Ⅱ式系統の土器1片が報告（註9）されている。

次に首里城の北側に位置する末吉丘陵の東南縁及び周辺には、末吉町シカ化石出土地や首里西森遺物散布地（縄文後期・グスク時代）が報告（註1）されている。また、鳥堀から儀保に延びる石灰岩丘陵を「虎頭山」と称しているが、この丘陵地内で石斧が1点出土した虎頭山石器出土地（註1）がある。首里城の北に隣接した第一尚氏の墓陵であった天山陵（註10）の所在する丘陵西端近くに約2500年前の山川貝塚（縄文晩期相当）が報告（註1）されている。

首里城に関する文献資料で京の内との兼ね合いから、特に高世層理殿に関する主要な文献や最新の研究成果を記載する（参考図面：第7・8図）。

僧侶の袋中上人が記した『琉球神道記（1608年編集）』（註11）には、「この国の国王で、大世の主と申しあげるのは、毒蛇を恐れて高樓を建立し、厚い板で囲いを作った。・後略・・」と記載がある。

『中山世鑑（1650年編集）』（註12）には、1392年（洪武25年）に「察度王モ後ニハ驕者ノ御心ヤ出来ケン高ヨサウリトテ數十丈ノ高樓ヲ作り遊観ヲシガケル・（後略）」と、中山王察度が數十丈の高樓の“高ヨサウリ”（高世層理殿）にて遊観していることが記載されている。

『察輝本中山世譜（1697年～1701年編集）』（註13）の洪武25年の項にも「王後驕者建造數十丈之高樓・・後略・・」と記載されている。

『琉球國由來記（1713年編集）』（註14）項目の「樓」には、「當國、樓者、察度王、始高世層裡、造營於下之玉庭之南（向北方）」と記載されている。

『球陽（1743年～1876年編集）』（註15）の察度王43年（1392年）項目「高樓を建造して以て遊観に備る」に、「是れに由りて王、稍驕者にして、數丈の高樓を建造し、以て遊観に備ぶ。一日、樓に登り裁言して曰く、予此の樓に居る。誰か敢へて害を加へんやと。・後略・・」と記載されている。

第6図 首里城周辺主要文化遺産分布図



第3表 首里城周辺主要文化遺産分布表(第6図の番号と一致)

●遺跡

▲庭園・主要施設・池・橋

★御殿・洋所等(首里城内を除く)		■井泉	
1. 旗頭山石造出土地(アミ原古1点採集)	32. 旗頭入城跡(王仲時(ウジマサ)の堤高神女の官邸)	63. ハマツクガ一	63. ハマツクガ一
2. 首里城築城の窓ではなく、カマキヤ(織田)どの說(いわかる)	33. 伊江城(ウチヤ城)内の庭園	64. 安谷川	64. 安谷川
3. 山川以東(東側)の窓(織田)の窓(いわかる)	34. 仲田堀(ウタダガ)の庭園	65. ヤマツクガ一	65. ヤマツクガ一
4. 中城制御構(1875年に創建)	35. 中城制御構(中城)	66. ニシガ一	66. ニシガ一
5. 天山御所(第一尚氏:尚巴志の墓)	36. 旨重御内跡(王仲時代の高級神女首里大阿武良丸の官邸)	67. 山川通川	67. 山川通川
6. 円覚寺塔(1494年建立)	37. 当真家の庭園(草茶苑)	68. 佐久之川	68. 佐久之川
7. 貝摺奉行所(1612年創設)	38. 天女橋	69. 赤久萬水川	69. 赤久萬水川
8. 国学・孔子廟(国学・王所の最高学府で1798年に創建。孔子廟1837年に建立)	39. 円覺池	70. 嶺山通川	70. 嶺山通川
9. 御土工所跡(17世紀初頭に創設)	40. 御土池	71. 大池(オホシ)庭園	71. 大池(オホシ)庭園
10. 上毛(アマガミ)~近・現(じ)	41. 世持掘	72. 今城大通川	72. 今城大通川
11. 首里城跡(14世紀後半)	42. 金鏡洞	73. ポニージガ一	73. ポニージガ一
12. 紫雲閣(1469年、第一尚氏によって再建された第一尚氏居宅の幼少子の紫雲閣)	43. クムダクノ御イベ	74. 潮風川	74. 潮風川
13. シンダン・ジョウウクノ森(百年城内の王族の墓だと伝承される)	44. アモトドケノ御イベ	75. 寒水川通川	75. 寒水川通川
14. 真珠道跡(1522年に整備)	45. クムデ龜ノ御イベ	76. ヘルガ一	76. ヘルガ一
15. 守礼門(首里城第二の坊門。1528年創建)	46. アメイ龜ノ御イベ		
16. 緑門(大正解(16世紀初頭～15世紀前半に整備))	47. 安谷川ノ池		
17. 天界寺(第一尚氏:尚泰(ウヂヤ)や1450年～56年に創建)	48. 中里大池		
18. 王陵削除第六地盤(クスク時代)	49. 中里小池		
19. 玉陵(第二尚氏:王統の墓院。1501年創建)	50. アガスヌノ御イベ		
20. 世子殿跡(中城御殿といふ。1875年に日県立博物館に移転)	51. 国中城アマフレダケノ御イベ		
21. 中山門(首里城第一の坊門。1428年創建)	52. ソニヒヤブノ御イベ		
22. 嶺山御殿跡(クスク時代)	53. カナセヤンツウタキ		
23. 嶺山遺跡(白石出土)	54. 上山御イベ		
24. 首里城山古墓群(19世紀以前)	55. キミコシン御		
25. 首里城山古墓群(古墓群(クスク)窓(エ)	56. 米崎削減		
26. ナカシダカリヤマの古墓群(クスク)窓(エ)	57. 手乞(ハタケ)		
27. 御茶屋削除跡(1677年創建。東施(ヒタチ)の言葉)	58. 嶺山ノ坂		
28. 東施(御茶屋削除跡と嶺山削除。且王家(ウシヤ)の住居)	59. 内金城之小坂		
29. 嶺山御跡(御茶屋削除跡の別称として、1682年創建)	60. 内金城之大坂		
30. 魚下原第1洞穴(シカ化石長壁)	61. ビジュル毛		
31. 魚下原第2洞穴(クスク時代)	62. チュンナ一通川		

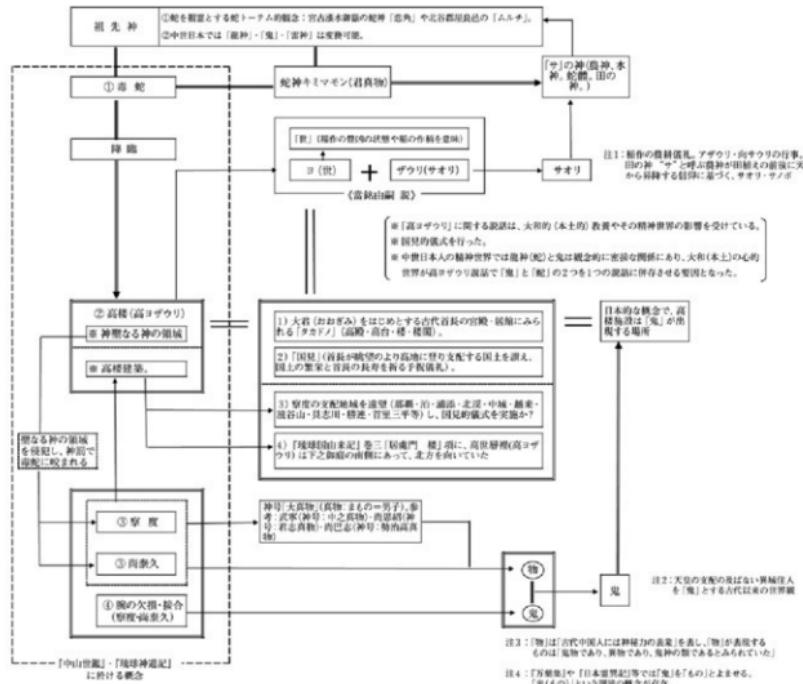
主な参考文献

・那覇市教育委員会『那覇市歴史地図一文化遺産と都市形態報告書』1988年3月。

・久喜豊(首里城町)・前島清(首里城町)『解説文七番書22第一番房 2000年1月。内閣府(首里城町)チサ古墓群発掘調査』『前島考古より』第42号 内閣府考古学研究会 1999年6月20日。

以上のように、この高世層理殿が浦添城内にあったとする解釈と首里城内に存在したとする二つの解釈があつたが、真榮平房敬氏の研究では、「...京ノ内には古くは「高よそうり殿」をはじめいくつかの殿舎がたつてゐたであろうが、長い歴史の中であるいは焼けた（向氏湧川家々譜に1576年高よそうり殿の炎上の記あり）」（註16）と記している。また、県内の家譜を整理・研究をおこなった比嘉朝進氏は、向氏湧川家々譜関係で、向氏一世越来王子朝理（尚宣威王長男）の五世を次いだ朝首の解説で、「1576年に天界寺（守礼門と玉陵の中間にあった）が失火し、火の手は城内の高樓に燃え移った。しかし、高所なのでだれも消しに登るものはなく、朝首ひとりが登って火を消し止めた。（中略）十一世朝略のとき湧川に改名。」（註17）と記載されている。

第4表 當銘氏論文の内容を基に作成したフローチャート



その他、當銘由嗣氏による「察度」や「高ヨザウリ」説伝に関する研究論文（註18）がある。當銘氏論文について、内容を整理して第3表のフローチャートを作成した。

當銘氏は、「察度」・「高ヨザウリ」の名称やそのもの本来有する語意などについて文献資料などを駆使し、高世層理の機能として、「高ヨザウリ」を、ヨ（世）+ザウリ（サオリ）であると考え、ヨ（世）は稲の作柄を意味するものと解釈し、ザウリ（サオリ）は、「サの神」が降臨することを意味しているのではなかろうかと推察している。また、高ヨザウリにおいて国王による国見的儀式が行われたという認識が過去にあったのではないだろうかと推察し、その根拠として『中山世鑑』（註12）に記載された事項を整理して、英祖王統第4代の玉城王の時代に琉球が北山・中山・南山の三山に分裂し、首里城を王城とする中山に支配する領域を那覇・泊・浦添・

北溪・中城・越米・読谷山・具志川・勝連・首里三平等があり、これらの地域は、概ね首里城の北側に望むことができ、高ヨザウリが北を向くとされたのは中山王である察度が自分の支配地を遠望して国見の儀式を行ったとの事ではないかと想定している。その他、當銘氏は、高ヨザウリ説話に関して「察度（神号：大真物）」＝「物」＝「鬼」と「蛇」＝蛇神（キミマモン：君真物）＝「サ」の神＝祖先神という2つの視点から考察を加えて、中世日本人の精神世界では龍神（蛇）と鬼は概念的に密接な関係から、その大和（本土）の心的世界の影響が高ヨザウリ説話において「鬼」と「蛇」の2つを1つの説話に併存させる要因となったのではないかと考察している。

高楼「高ヨザウリ」に関する説話は、純粹に琉球の内世界からのみ生じたものではなく、大和的（本土的）教養やその精神世界の影響を色濃く受けているものと結論付けている。高世層理の位置については、「琉球國由来記」（註14）の記載にある「高ヨザウリ（高世層裡）は首里城の下之御庭の南側にあって、北方に向いていた」と記述している。

以上のような状況から家譜資料の調査などから首里城内に“高ヨザウリ”が存在していたことがほぼ確定的となっているようである。

その他に、察度の子である中山王武寧を第一尚氏王統二代の尚巴志が1406（永樂4）年に攻め滅ぼした城は、浦添城ではなく首里城であったことが上記した高世層理殿の内容などからも推測されるところである。

また、第一尚氏王統の尚巴志が首里城に居住してたであろう察度王統の中山王武寧を滅ぼした事については、「おもろそうし」（註19）第四卷 あおりやあさすかさのおもろ御双紙「あちおそいしょよしらが節（一連番号206）」、第六卷 しより大君せんきみ君がなしも、とふみあがり きみのつんじのおもろ御双紙「あちそいしょよせりが節（一連番号292）」、第二十巻 くめすおもろ御さうし「あちおそいしょよしらが節（一連番号1375）」の三巻に謡の節回しの題目は異なるものの同じ内容の謡が重複した形で謡が存在することからも首里城内に察度王統による御嶽の創建が在ったことを謡ったものとして考えられる。具体例として次ぎに挙げる謡を記す。

第二十巻 あちおそいしょよしらが節（一連番号1375）

「一 首里大君ぎや 末 還びやり 降れわちへ 君ぎやせぢ もちよる成ちへ みおやせ 又 鳴響も国守
りぎや 真玉 還びやり 降れわちへ 又 首里社 ちょわる 英祖に末接司襲い 又 真玉社 ちょわる
てだが末接司襲い 又 見物内の真庭に 国揚がりは 煙らちへ 又 カわるめの御内に 君撓い 煙らちへ
又 聞声大君ちよ ありちよ 遣り交わちへ」

（大意：鳴り響く首里の大君、国守り神女が、神の末裔をして降り給いて、首里社、真玉社にまします英祖様の末裔、太陽神の末裔の国王様は、城内の見物内の真庭、かわれめの御内に、国揚がり、君撓いを煽らして、国を守ろう。神女の持つ靈力をきらめき輝かせて国王様に奉れ。）

ところで、首里城の城主となった尚巴志は、三山統一前の宣徳2（1427）年に城下の北西隣の安国山に池を掘り“龍潭”の完成と、その記念碑である“安国山樹樺木碑記”を建立している。その2年後の宣徳4（1429）年には南王山の他魯毎を滅して三山統一を成しとげたようである。

昭和60（1985）年～昭和61（1986）年の首里城正殿跡の発掘調査（註20）で、正殿の創建は14世紀前半～中葉もしくは14世紀代に第1期の正殿の創建がなされていたのではないかとの見解を提示し、少なくとも15世紀初頭～前半には察度を滅ぼした第一尚氏の尚巴志によって首里城内郭（当時は外郭）と“龍潭”が整備されたようである。

このことは、戦前の昭和11（1936）年12月29日～昭和12（1937）年1月11日までの期間に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって正殿前（北殿西側）1ヶ所、京の内北西側下（露頭した大岩斜面地に包含層か）2ヶ所、西ノアザナ東南側下1ヶ所の合計4ヶ所で発掘調査を実施している。伊東・鎌倉両氏の結論として「此の三地点の出土品は略一致して、首里城第一次擴張時代と推察される永樂16年（西紀1416年）～宣徳2年（西紀1427年）の頃の埋蔵であろうと想定される。」（註21）と記している。この3地点とは正殿前・京の内北西側下（東）、西ノアザナ東南側下である。また、次のようにも記している「此の第一次擴張の際には、瑞泉門から京の内西面の城門に至る線以西を、埋め立てたのではなかろうか…中略…北面の低地に對しては、石垣を築いて其の中に盛土し、更に其の石垣を地盤の鞏固な瑞泉門で支えてゐる。…中略…それ故に埋立地北部の城壁は、一方に

於いて降雨の際の水壓の防備を考へ、一方に於いては雨水を瑞泉門に集中するように工作してあるらしい。この見解は今日の発掘調査の成果からも卓越された見解であることが確認されている。

第二尚氏の初期に尚真王により中央集権の体制が築かれ強固な琉球王国の基礎ができあがり、首里城外郭である歓会門や久慶門の両門（1447年～1526年）が普請され、その頃に外郭の整備がなされたようであるが、外郭の着工時期や完成時期についてはよくわかっていないようである。

尚真の後を次いだ尚清王は、尚真によって確立した王国の基礎を継承し、発展させる。1546（尚清25）年には首里城石垣の補強工事と1553年の那那港の防備拠点であった屋良座森城の築造などが行われ、倭寇の侵入による対策が取られたようである。

尚真・尚清の両王統の頃に城の整備と城下の整備などが積極的に推進されたものと考えられているようである。

明治12（1879）年の廃藩置県により首里城の500余年にわたる歴史も最終の琉球王国となった尚泰王によって明治政府に首里城を明け渡して王城を去る。首里城の明け渡しと同時に熊本鎮台沖縄分遣隊の首里城入城があり、明治29（1897）年の撤退するまでの17年間に分遣隊が配備された（第10図）。その後は沖縄県師範学校や首里第一尋常高等小学校（第12図）などの文教施設として利用され、昭和19（1944）年には首里城地下に第32軍指令部壕が造られ、昭和20（1945）年4月には首里城は灰燼に帰してしまった。このように首里城は幾多の歴史的な変更を経て今日に至っている。

註文献

- 註1. 那那市文化財調査報告書 第5集『那那市の遺跡－詳細分布調査報告書－』那那市教育委員会 1982年3月。
- 註2. 「遺跡分布地図情報システム作成事業」[市町村別遺跡情報一覧（暫定）]沖縄県立埋蔵文化財センター 2004年3月。
- 註3. 那那市文化財調査報告書 第59集『銘軒古墓群（IV）－那那新都心地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告XIII－天久公園整理事業に伴う緊急発掘調査V－』那那市教育委員会 2004年3月。
- 註4. 1997年5月27日に那那市教育委員会文化課の島弘主査に遺跡数を確認した際に教示を戴いた。実数については遺跡を大系的に整理した上でしか判断はできないとのことであった。
- 註5. 那那市文化財調査報告書 第49集『識名原遺跡－識名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』那那市教育委員会 2001年3月。
- 註6. 那那市文化財調査報告書 第34集『識名シーマ御蔵跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』那那市教育委員会 1997年3月。
- 註7. 那那市文化財調査報告書 第67集『崎山御獄遺跡－首里崎山公園整理事業に伴う緊急発掘調査報告書－』那那市教育委員会 2005年3月。
- 註8. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第19集『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2004年3月。
- 註9. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集『首里城跡－下の御庭跡、用物跡、瑞泉門跡、漏刻門、廣福門跡、木戸門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。
- 註10. 安里嗣綱・底本 熟「天山陵跡調査の概略」[紀要]第1号 沖縄県教育委員会文化課 1984年。
- 註11. 斧薙社袋中 著、訳注 原田英雄『琉球神道記（1608年編集）』椿樹書林 2001年7月。
- 註12. 沖縄県教育委員会『重新校正世山世羅』卷二「洪武二十九年（中略）不思議ナケン高ヨサウリテ數十丈ノ楼アツリ遊闌ヲシ給ケルカ或時此樓ニ上り戲言ニ常ニ此様上ニ居輪程ナラハ毒蛇ノ恐モ無物トソ宣ケル。』昭和57（1982）年10月。
- 註13. 手納宗徳『第二巻 泰舜本中山世譜（上）（1697年～1701年編集）』訳注松清書屋史料叢書全三十巻 沖縄史料館松清書屋発行 昭和58（1983）年5月。
- 註14. 伊波晋誠・東恩納寛淳・横山 重「琉球國由來記（1713年編集）』風土記社 昭和63（1988）年2月。
- 註15. 鳥居辰太郎・手納宗徳・渡口清義・名嘉順一・糸敷兼治・外間守善『球陽（1743年～1876年編集）』読み下し編 沖縄文化史料集成5 球陽研究会編 角川書店 昭和57（1982）年5月。
- 註16. 真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社 1991年。
- 註17. 比嘉朝進「沖縄のサムレー」風土社 1990年。
- 註18. 富路由嗣「高ヨザウリ説話に関する一考察」[談谷村立歴史民俗資料館紀要]第25号 談谷村立歴史民俗資料館 2001年。
- 註19. 参照注 外間守善『おもろさうし』上・下全2冊 株式会社 岩波書店 2006年11月6日第3刷発行。
- 註20. 富路由嗣一・上原 静「首里城正殿跡の調査」[紀要]第4号 沖縄県教育委員会文化課 1987年。
- 註21. a. 伊東忠太・鍾倉芳太郎「B 球陽Rikukan発掘」『南海古陶瓷』 宝雲社 1937年。
b. 鍾倉芳太郎「セレベス 沖縄古振陶器」国書刊行会 1971年。

参考および引用文献

- ・沖縄県教育委員会『首里城跡』歓会門・久慶門内側地域の復元整理事業にかかる構造調査 1988年。
- ・沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』 1983年。
- ・首里城公園基本計画調査委員会『首里城公園基本計画報告書』事務局沖縄県土木建築課 1984年9月。
- ・首里城復元開成会・那那出版社編集部『那那集』首里城 那那出版社 1987年。
- ・金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」重要文化財指定記念 特別企画展「首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－」沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』県立埋蔵文化財センター 2009年3月。
- ・金城亀信宛：那那市教育委員会 當館由より「高橋「高ヨザウリ」に関する私見」 2010年10月。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査地域

京の内地域については、第Ⅰ章第2節でも概略を記したように首里城内でも最も神聖な聖域であった。また、京の内は、首里城発祥の“古グスク”として創建されたとする見解（註1）もある。ここでは京の内の性格について述べることにする。

最初に「京の内」の語義については『おもろさうし』（註2）で「きやのうち」・「けおのうち」・「けよのうち」と表現され、「けお」は「せぢ」の同義語で“靈力”的意味を持つ「きおのうち」は「せぢ“靈力”のある場所“聖域”」（首里城内の聖域）として考えられているようである（註3）。

民俗学の研究によると「きょう」の意味として、知念村の斎場御嶽内にある三庫理に入る右手側の大岩の頂上を“キヨウノハナ”（ギヨウノハナ）と称し、大岩直下の香炉から岩の上の“キヨウノハナ”を拵み、香炉の側にあったクバの神木を足掛かりにしてアマミキヨガ天降りされたといわれている（註4）。また、仲松弥秀氏は「神の来臨のことであるが、（中略）その前に微小鳥が存在する場合は、神は一たんその小島に上陸滞在される。（中略）このような浜前の岩島や小島を、沖縄では「トングワ」と称しているが、「京」（きょう）と称している村もある。」（註5）と記している。「京」（きょう）という表現に関する民俗事例として名護市嘉陽の集落前面の東方海上にある神が來訪する聖なる小島を“きょう”と称しているとのことである（註6）。

以上のようなことから「京の内」の「きょう」は神が降臨もしくは來訪する場所の意味合いと「うち」は“聖域”・“区域”などの意味もあることから「京の内」は神が降臨もしくは來訪する聖域として位置づけて整理ができるようである。その他に首里城の立地する丘陵一帯が、「京の内」と称されていたともいわれている（註1・7）。

首里城「京の内」については、『首里城古図』（註8）や『首里城略図』（註9）などの古絵図（古地図を含む）や『おもろさうし』・『琉球國由来記』（註10）などの文献がある。これらの資料や古絵図などから「京の内」地域には、『首里城古絵図』（第13図の図B）に描かれた御嶽と建物2棟の他に四・五条の区画石積みが確認される。

古絵図の描かれた時代差によっては、第13図の図A⑤の『武百年前首里城鳥瞰図』にあるように御嶽とみられるものが8基程度描かれている時期もあったようであるが、基本的には5基（第13図の図B）の『首里城古絵図』にみえる四つの御嶽で構成されていたものとして解釈がなされるところであるが真珠森御嶽は、洞穴（開口部）であるため、描かれていないようである。真珠森御嶽を含めた五つの御嶽で基本的に構成されている。

「京の内」の五つの御嶽（第7・8図・第15図）として、「京の内之三御嶽」（第7図56～58）・同図56＝神名：きょうのうちのあかるいの御いべ。同図57＝神名：きょうのうちのしきやちしきやだけ御いべ。同図58＝神名：きょうのうちのそのいたしきの御いべ。（の三神）と称される三つの御嶽と第7図55の首里森御嶽（神名：玉ノミヤノ御いべ）・同図51の真珠森御嶽（神名：真玉城の玉のみやの御いべ）の二つの御嶽である。京の内の御嶽構成は5基の御嶽が基本的なパターンとみられる。

この五つの御嶽の内、京の内の南側高所（標高135 m）に城内でも最も神聖で重要な御嶽であった「首里森御嶽」があった。この首里森御嶽の西側にある拱門（アーチ門）直下の洞穴が「真珠森御嶽」（標高132 m）である。

真珠森御嶽の北側から北西の平場空間（緩やかな傾斜地や小規模な平場を利用。標高131～132 m）に「京の内之三御嶽」がある。『京の内之三御嶽』の神名を『琉球國由来記』（註10）から共通する神名の存在の有無を検索したところ久志間切嘉陽村（名護市嘉陽）の濱板敷御嶽の神名が“そのいたじき御いべ”であった。“京の内之三御嶽”のひとつ目の御嶽と神名が一致していることが判った。京の内之三御嶽のひとつの御嶽と名護市嘉陽の濱板敷御嶽の神が仮に同一神であれば、将来において名護市嘉陽の濱板敷御嶽での祭祀を含めた研究をとおして“そのいたじき御いべ”がどのように嘉陽の濱板敷御嶽から京の内の御嶽へ來訪するのかを解明することができる鍵となるかもしれない。仮に北部の“そのいたじき御いべ”が南下して首里城へ來訪すると仮定すれば、第一・第二尚氏が伊平屋と伊是名を出自としていることから、名護市嘉陽の濱板敷御嶽と京の内之三御嶽との関係が解明されれば、琉球王国の祭祀や儀式を紐解くことのできる興味深い結論が導き出せるのではないだろうかと思慮

される。その他に京の内の前庭にあたる下之御庭には、京の内に所在する御嶽と同名の首里森御嶽（神名：きょううの内の前の御庭首里の御いべ）があり、首里森御嶽への遙拝所（第7図50）として考えられている。

ところで、首里城は聖名を「首里森グスク」あるいは「真玉森グスク」と称されるのは、京の内に所在した首里森御嶽・真玉森御嶽の名に由来するようである（註11）。両御嶽の中でも首里森御嶽は、沖縄の開闢神であるアマミキヨがつくられた御嶽とされる。この首里森御嶽のある平場空間の西側城壁と拱門（アーチ門）がすりつけられた箇所があり、この拱門手前の城壁近くに降臨神である天神または陽神のキミテズリ（君手摩）を迎えた場所と言われています。キミテズリの神を迎えた琉球王国の最高神女であった聞得大君を中心とした高級神女三十三君と共に歴代琉球国王に「世おそせち」（世を治める靈力）が高まるように「オボツ・カグラ」と「ニライ・カナイ」の神に祈願し、託宣を下した御嶽でもあったようである（註12）。

真玉森御嶽については、『球陽』（註13）巻二 尚徳王の項に「附 脩城由來」に次のように記載されている「遺老伝に説く。尚徳王薨じ世子幼冲にして国人皆叛く。王妃・乳母・世子を擁着して以て乱難を避け、皆真玉城に隠れる。軍兵追ひて之を試し、遂に之れを王城巣下に葬る。」と記載されていることから、尚徳王の王妃・世子らが隠れた場所が、京の内の平成7・8年度に実施した洞穴が該当するのではないかと考えられる。この洞穴が『球陽』に記載された真玉森城、即ち真玉森御嶽（第7・8図・第15図）ではないかと推定される。参考までに脩城の位置は、京の内南側崖下（第7・8図・第15図）にある。

ところで宮城栄昌氏は「神女は沖縄社会の政治的発展に即応してカミ→ノロ→キミの順序で発生し、キミ（君）は少なくとも神女の政治的組織化が進んだ段階に現れたもので、中央集権制国家が確立した尚真王代（1477年～1526年）のころの「おもろさうし」では、ほとんどの神が君と化している。」（註14）と記している。首里森御嶽の降臨神キミテズリ（君手摩）は、聞得大君を中心とする三十三君の君々に神が乗り降って琉球国王へ神託を伝えたパターンが完成するようである。三十三君の大部分は王室関係の女性であったようである。従って歴代の琉球国王と京の内の神事などを掌る高級神女組織とは密接な祭政一致の関係にあったことが推察される。

ところで第一尚氏王統（1406年～1469年）の最高神（神女）は佐司笠（さすかさ）であったが、第二尚氏王統（1470年～1879年）には、その地位を聞得大君に譲るが、佐司笠の地位は依然として高い神格であったようである（註15）。15世紀中頃まで京の内での祭祀や儀式において、その最高神は佐司笠であったことが理解されるところである。

京の内については、『中山世鑑』（註16）にあるように察度が1392年（洪武25年）に数十丈の高樓“高ヨザウリ”（高世層理殿）を造り遊覧したことが記されている。高世層理殿については、第II章第2節で詳細に記してあるので参照されたい。高世層理殿の位置については、『琉球國由来記』（註10）に高ヨザウリは下之御庭の南側にあって、北方に向いていたと記載されていることから京の内地域で物見のできる高台は、南側の標高135mにある首里森御嶽のあった一帯に高樓があったものと考えられる。平成7年度の遺構確認調査で礎石と瓦溜まりなどが検出されている（第15図：首里森御嶽から西側の城壁が途切れる城壁内側部分）。この礎石や瓦溜まりの遺構が高世層理殿の建物基礎として考えられる。この建物基礎（礎石、瓦溜まり）などが、1392年に察度が遊覧した高世層理殿の基礎なのか、或いは1576年の家譜資料（註3）にみえる天界寺が失火し、その火の手は城内の高樓に燃え移った際の高樓（高世層理殿）の礎石のいづれかに該当するものとして考えられるところである。

因みに久手堅憲夫氏は第7図に掲載した京の内の南西側城壁直下の崖下に“ジングンジュー・ウスマエース墓”が察度王の墓跡として考えている。その根拠として久手堅氏は、首里方言で“ジングンジュー”とは、守銭奴のことをいうが、これほどの陵墓を創建できるのは、一定の権力を有する豪族をおいていないとし、万松院の先代住職松久宗宗師の先々住職からの伝聞として「ジングンジュー・ウスマエース墓は、国王の墓だと伝えられている。」そして『球陽』の「察度伝説」で察度は国人から“仁君”と敬称されていたことなどから、“ジングンジュー・ウスマエース墓”は本来、“ジングンシュー・ウシムエース墓”が変化したものであり、“ジンクンシュー”は“仁君主”、“ウスマエー”を尊貴や長上の人への敬称である“御主前”として解釈している（註17）。

前記した京の内南側崖下一帯にある“脩城（クンダグスク）”や“ジングンジュー・ウスマエース墓”などの発掘調査が県立埋蔵文化財センターによって2001（平成13）年度に実施（註18）されている。調査報告によると

Ⅲ地区石積み遺構①がケンダグスクと考えられ、上段石積みと下段石積みの境目から15世紀に比定される和鏡が出土したとあり、伝承にあるケンダグスクの由来である肺骨は検出できなかつたとある。次にジングンジュー・ウスマース墓は、金網で囲われ調査ができなかつたが、I地区で古墓②基が確認されて、その内の古墓②は石積み外側に暗渠や細粒砂岩の蓋石が検出され、その構造から屋根や袖などを持たず、全体の印象として浦添市仲間の浦添ようどれや宜野湾市嘉数の小林墓を彷彿させるとし、当該遺構の戦前の状況に関する聞き取り調査から墓口のなく、梯子で登って墓室を覗きみることができたとある。この内容から今帰仁村蓮天の百次按司墓と同様の構造を持った遺構であった可能性を示唆し、聞き取り調査などの所見から当該墓を「ジングンジュー・ウスマース墓」に相当するのではないかと結論付けているが、位置関係などから前記した京の内南西側崖下に未調査である「ジングンジュー・ウスマース墓」が位置することなどから今後の調査によって判断がなされるものと思慮されるところである。

さて、京の内区画石積みや御嶽の位置が変更された時期として考えられたのが、1453（尚金福4）年に起きた王位継承をめぐる志魯・布里の乱の直後と1470（尚円元）年の第二尚氏王統のはじめ頃の1576年に失火した高樓（高世層理殿）の取り壇しなどによって「京の内」の区画石積みや御嶽の再建と位置の変更がなされたのかもしれないところである。ところで、1453年に起きた志魯・布リの乱について、高瀬基子氏の研究（註19）で、1450～1451年に朝鮮人漂流民万年と丁録がみた王城で暮らしや1456年2月に久米島漂着の築成と高石寿が四年余りを王城で暮らし、1461年5月末に朝鮮に帰国している事などから正殿の炎上はなかったとしている。

京の内の性格を概略的に述べたが、平成6年度の調査地区は、京の内の総面積約5,000m²の内の北側部分約2,000m²を対象とした。当該地域を京の内の北側に位置することから発掘調査地域を「京の内北地区」として仮称した（第9図上段、第14図）。平成7（1995）年度の発掘調査地域は、京の内の南側に位置することから「京の内南地区」、平成8年度の調査地域を京の内の西側に位置することから「京の内西地区」と仮称している。

註文献

- 註1. 首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社 1991年。
註2. 外岡守善・西郷信綱『おもろさうし』『日本思想大系』18 岩波書店 1972年。
註3. 註1・2に同じ。
註4. 伸松弥秀「新垣孫一翁よりの聞き書き」『知念城跡・塙場御嶽及び周辺構造基本構想・基本計画』1993年。
註5. 伸松弥秀（三）、来訪神の経路』『南島の海神祭』『古曆の村』沖縄民俗文化論 タイムス選書4 沖縄タイムス社 1977年。
註6. 平成9年に沖縄県教育庁文化財課民俗文化財指導主事の桃原茂夫氏より教示を戴いた。
註7. 真栄平敏『首里城物語』ひるぎ社 1991年。
註8. 加藤三吾『琉球の研究』文一路社 1906年。
註9. 雄倉芳太郎『セレベス 沖縄発掘古陶壺』国書刊行会 1975年。
註10. 「琉球国由来記」「琉球史料叢書」第2巻 東京美術 1972年。
註11-a. 伊波普猷「三、きみよし考－守護神の成長に関する論議－」『伊波普猷選集』下巻 沖縄タイムス社 1962年。
b. 平敷令治「首里森グスク」『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 1983年。
c. 平敷令治「真玉森グスク」『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社 1983年。
註12. 平敷令治「きみてづりのももかほうごと」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社 1983年。
註13. 島尻勝太郎・喜手納宗徳・渡波清・名庭順一・糸敷兼治・外岡守善『琉聞』読み下し編 沖縄文化史料集成5 球陽研究会編 角川書店 1982年。
註14. 宮城栄昌「三十三君」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社 1983年。
註15. 宮城栄昌「佐司笠」『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 1983年。
註16. 沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』1982年。
註17. 久手堅憲夫「首里の地名－その由来と縁起－」『南島文化叢書』22 第一書房 2000年10月12日。
註18. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』県立埋蔵文化財センター 2004年3月。
註19. 高瀬基子ほか「アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－」琉球孤叢書㊯ 有限公司 椿樹書林 2009年7月30日。

参考文献

- ・伸松弥秀「神と村－沖縄の村落－」伝統と現代社 1968年。
・沖縄県教育委員会「首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－」1995年。
・社団法人 日本公園総合会「平成11年度 首里城京の内地区調査検討会（第1回）説明資料」1998（平成11）年12月10日

首里城と城内の地名

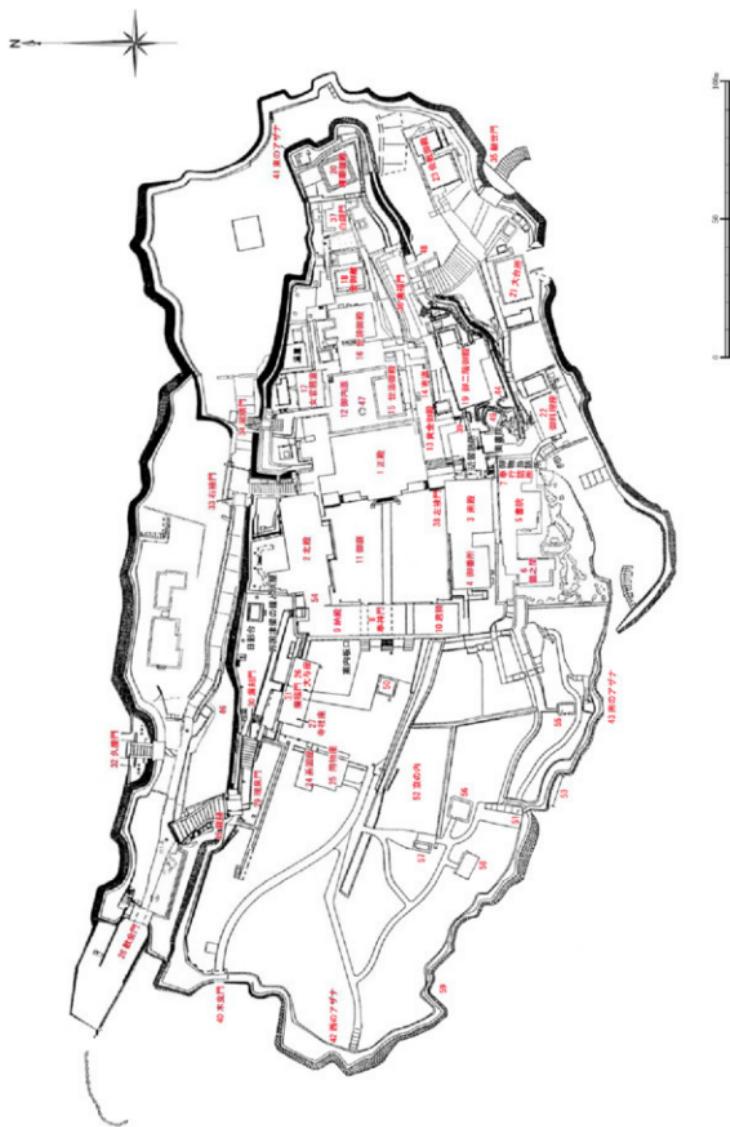
1. 正殿：唐波豊（百浦添）
2. 北殿：ニシヌウドゥン（西之御殿）
3. 南殿：フェースウドゥン（南御殿・南風之御殿・南風御殿）
4. 御番所
5. 書院（国王の政務を聽取決裁などの場所客殿、対面所の義がある。意味がある）
6. 鎮之間
7. 奉行詰所
8. 奉神御門（君誇御門）
9. 納殿
10. 君誇
11. 御庭
12. 御内原
13. 金御殿（黄金御殿）
14. 寄溝
15. 世添御殿
16. 世誇御殿
17. 女官居室
18. 金御藏（銭御藏を御用酒御藏と曰ふ）1733年
19. 御二階御殿（御住居所御殿）
20. 寝廟御殿
21. 大台所（百次）
22. 御料理座（御振舞座）
23. 佐敷御殿
24. 系団座
25. 用物座
26. 大手座
27. 寺社
28. 飲会門（アマヒ御門）
29. 瑞泉門（御龍舎）第一尚氏代の首里城正門か
30. 漏刻門 “かごみせ御門”
31. 広福門（長御門）
32. 久慶門（“ほこり御門”または、樋川御門（フィ

- ジャ一（ヒカワ）御門
33. 右掖門
34. 左掖門
35. 離世門
36. 美福門（第一尚氏尚巴志の頃の正門）
37. 白銀門（しらかねうちやう）
38. 左掖門
39. かわるめの御門
40. 木曳門
41. 高アザナ（東のアザナ、高あざな）
42. 島添アザナ（西のアザナ）
43. 南のアザナ（京の内の南側高所）
44. 二階御殿アザナ
45. 瑞泉（龍舎）
46. 寒水川井戸
47. 御地原の井戸
48. 赤田ウヂヨウノ御獄
49. 御内原ノミモノ内ノ御獄
50. 首里森御獄への遙拝所。神名：京ノ内ノ前ノ御ミヤ
51. 真玉城ノ御獄（神名：真玉城の玉のみやの御いべ）
52. 京の内
53. 肥城（第一尚氏最後の王「中和」(16歳)、王弟「於思」(13歳)、次弟「截溪」(10歳)のいづれかの墓）
54. 隱誇
55. 首里森御獄（神名：玉ノミヤノ御いべ）
56. 京の内之三御獄（神名：きょうのうちのあかるいの御いべ）
57. 京の内之三御獄（神名：きょうのうちしきやちしきやたけ御いべ）
58. 京の内之三御獄（神名：きょうのうちのそのいたしきの御いべ）
59. ジングンジュー・ウスメエース墓（仁君主御主前墓：察度王墓か）

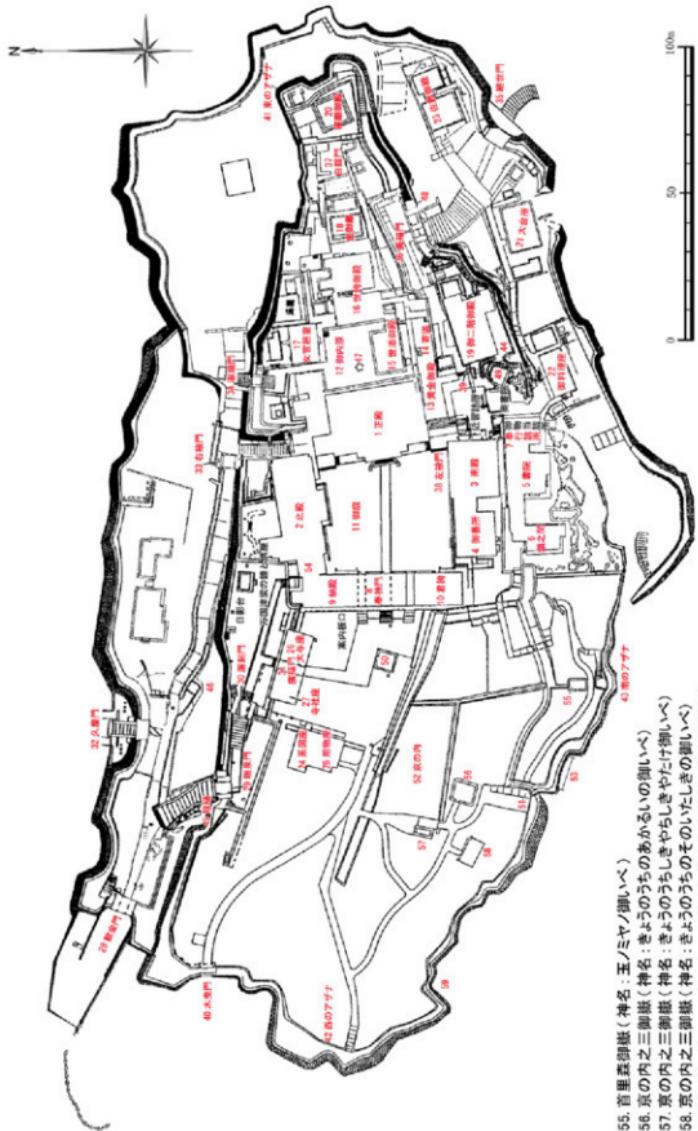
*首里城と城内の地名については、久手堅憲氏の『首里的地名—その由来と縁起』(南島文化叢書 22、第一書房 2000年10月12日発行)を基本にして、作成した。

*京の内之三御獄の位置や神名は、社団法人日本公園緑地協会作成の『平成11年度首里城京の内区画調査検討会(第1回)説明資料』(平成11年12月10日)を参考にした。

*高瀬恭子(5.第一尚氏最後の王「中和」)『アジアの海の古流跡－東南アジア・朝鮮・中国－』琉球弧叢書 20 榎樹書林 2009年7月



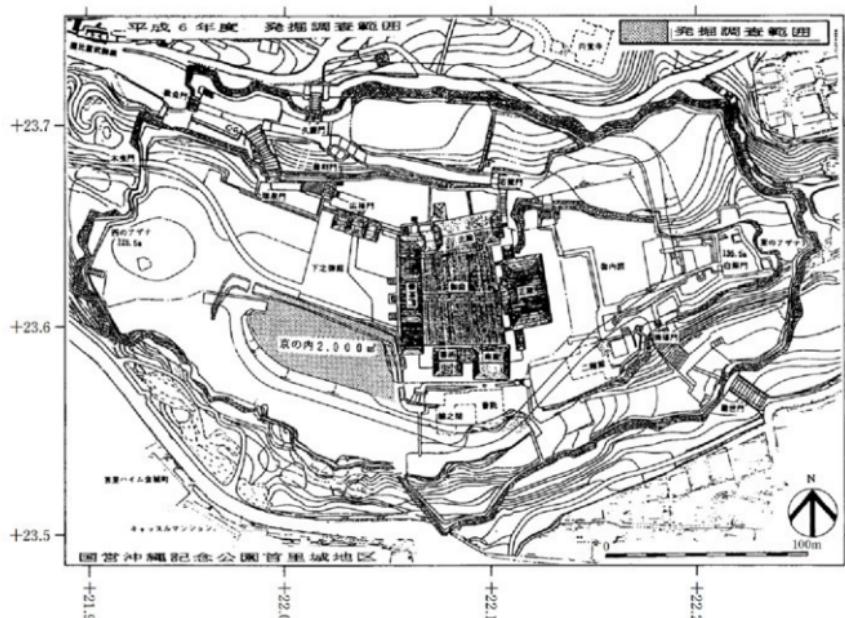
第7図 首里城と城内の地名 平成16年版 地形測量官から文化担当の田村善治（現ト松原）を基にして田村善治の「城跡地図」(1972年)、小瀬洋一「首里城と城内の地名」(沖縄県立沖縄歴史文化研究センター)、「琉球沖縄社会公報官僚監修図」(平成13年3月)などを参考にして作成した。



55. 首里城御城（神名：玉ノミヤノ御いへ）
 56. 京の内之三御城（神名：きこうのうちのあかるいの御いへ）
 57. 京の内之三御城（神名：きこうのうちのやちしきやにつけいへ）
 58. 京の内之三御城（神名：きこうのうちのそのいたしきの御いへ）
 59. シン・シングル・ウスマエーヌ島（仁喜主前島：源氏王島か）

第8図 首里城と城内の地名

平成16年度 沖縄県教育厅文化課作成の測量図（加工処理後）を基本にして田村泰氏の『琉球建築』（1972年）、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園首里城地区整備計画（平成13年3月）などを参考にして作成した。

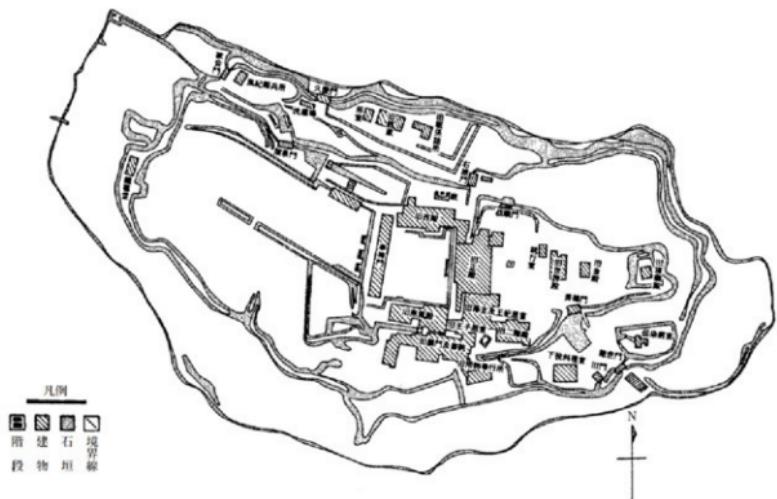


第9図 発掘調査地域（上段）と『首里古地図』（1700年）（下段）

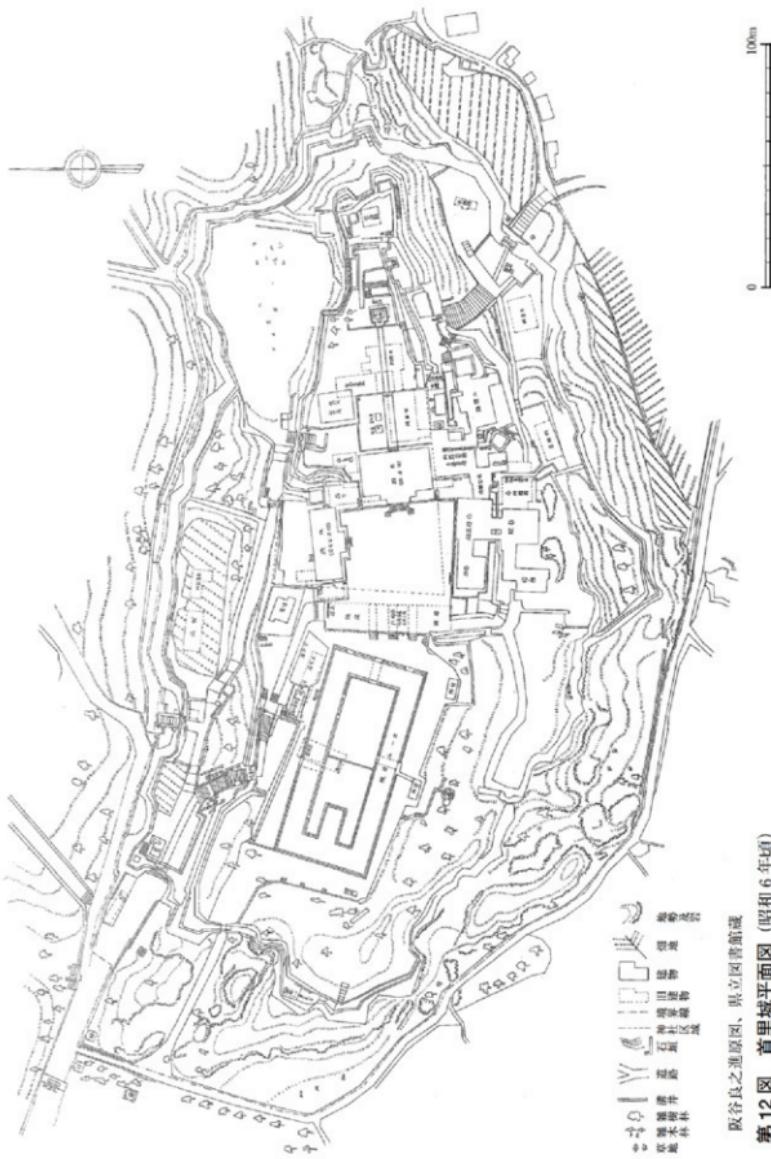
「琉球国絵図資料集第三集付録」1994年より複写：原図は沖縄県立図書館所蔵



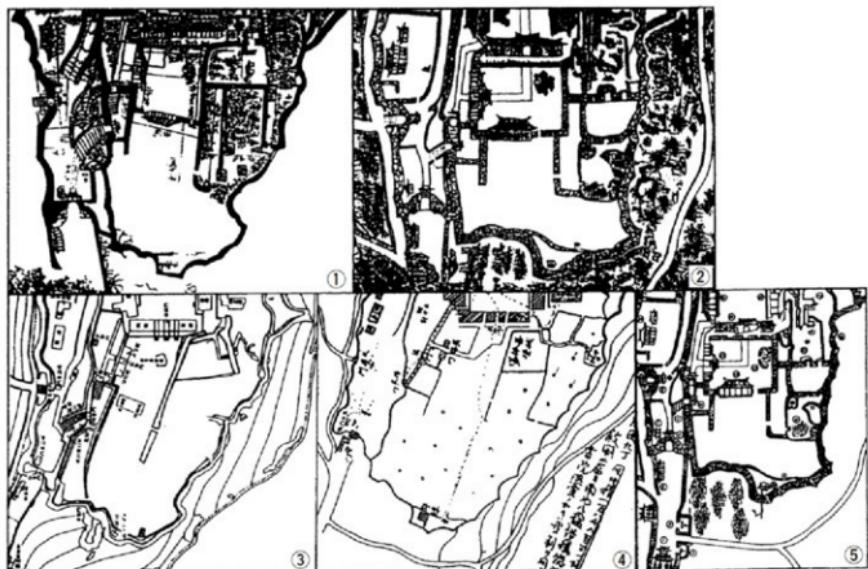
第10図 首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年）
『首里城跡』（1995年より複写）原図は沖縄県史編集室蔵（方位のみを加筆）



第11図 首里城平面図（島袋良徳氏所蔵）『首里城跡』（1995年より複写）



第12図 首里城平面図（県立国営歴史公園
阪谷良之進原図、昭和6年4月）



図A 首里城京の内空間の変遷

- ① 「首里城古絵図」(1703年～1707年か)
- ② 「首里古地図」(1700年、1854年)
- ③ 「琉球建築」(1937年)
- ④ 「首里城熊本鎮台分遣隊配置図」(1893年)
- ⑤ 「貳百年前首里城鳥瞰図」



図B「首里城古絵図」

(1703～1707年か)に修正・加筆

第13図 首里城京の内空間変遷 特別企画展「首里城京の内展—貿易陶磁からみた大貿易時代—」
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月より転載



第14図 首里城跡京の内地区 年度別発掘調査箇所

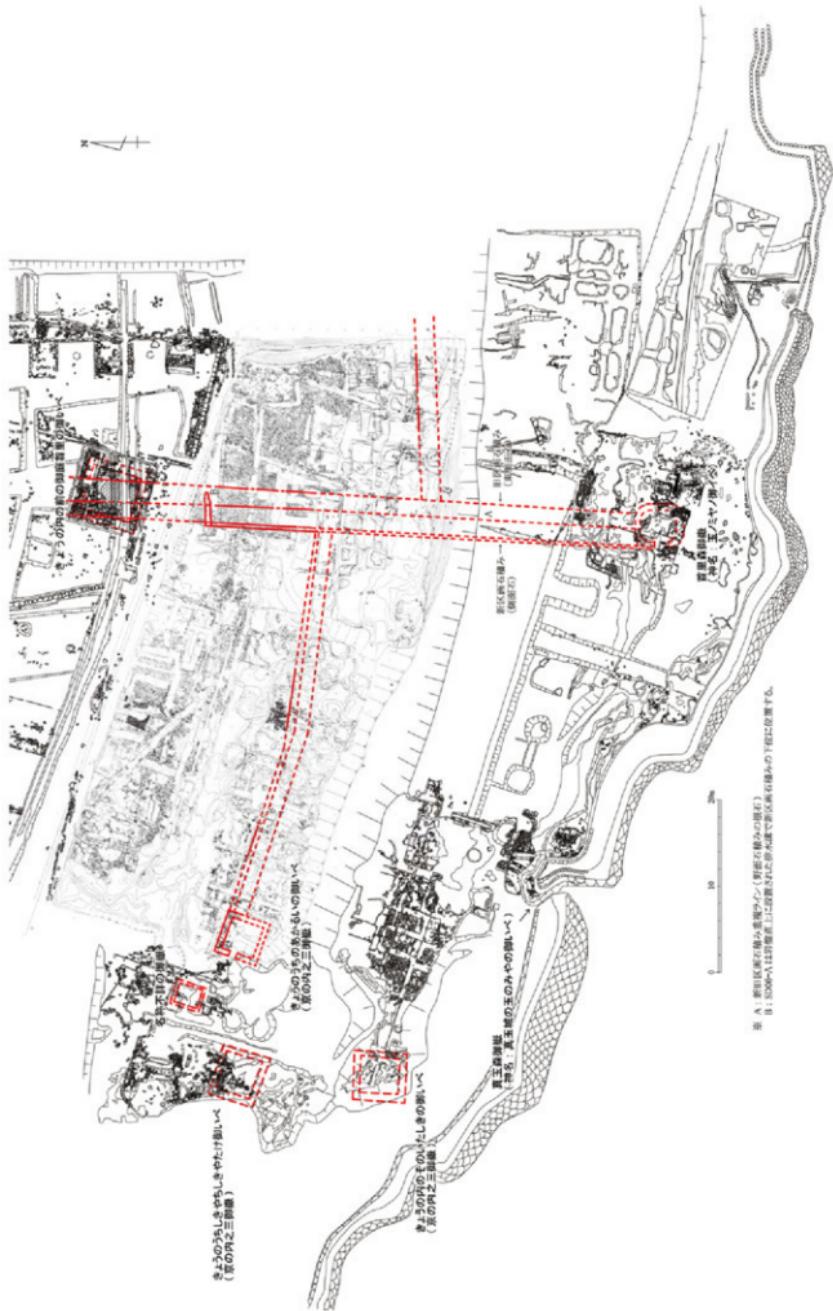


図 A：都計画区域から東側グラン（野町大通り）
B：SOMPO-HANSEI保険海上に位置された丸建新築工場の下間に位置する。

第158 高の木地区で検出された脚部及び足部を踏みから推定した京の内空間の遺存基
(前版の脚注、日本公文書館会作成平成11年度 京都市の内閣文庫資料会議第1回)

第2節 調査区の設定

平成6年度の京の内跡の発掘調査地区は、第1章第4節でも記したように京の内北地区2,000m²が発掘調査の対象となった。首里城地下には昭和20(1945)年のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦の際に第32軍司令部壕が昭和19(1944)年に構築されたことにより米軍の集中砲火を受けている事から事前に調査区内に不発弾等の有無確認を目的とした磁気探査を実施した。磁気異常のあった61箇所については調査員立ち合い(グスク時代～近世期の金属製品が反応する)で異常箇所の掘削を行った。

磁気探査の磁気異常箇所の有無を確認後に本格的な発掘調査を平成6(1994)年11月21日から開始して、平成7(1995)年の3月28日までの約5ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基に京の内の復元整備の計画がなされるため遺構保護を目的として、調査地区内全域に保護砂の白砂を厚さ10cm～15cmを敷きならした後に廃土で埋め戻した。

埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握できなくなるので、調査地区及びその周辺に基準点測量の三点(基-1、基-2、基-3)を測量業務に委託した。基準点の成果は下記のとおりである。

X = 23622.856	X = 23594.909	X = 23606.382
基-1 Y = 21998.541	基-2 Y = 21985.276	基-3 Y = 22047.613
H = 125.009 m	H = 126.486 m	H = 125.054 m

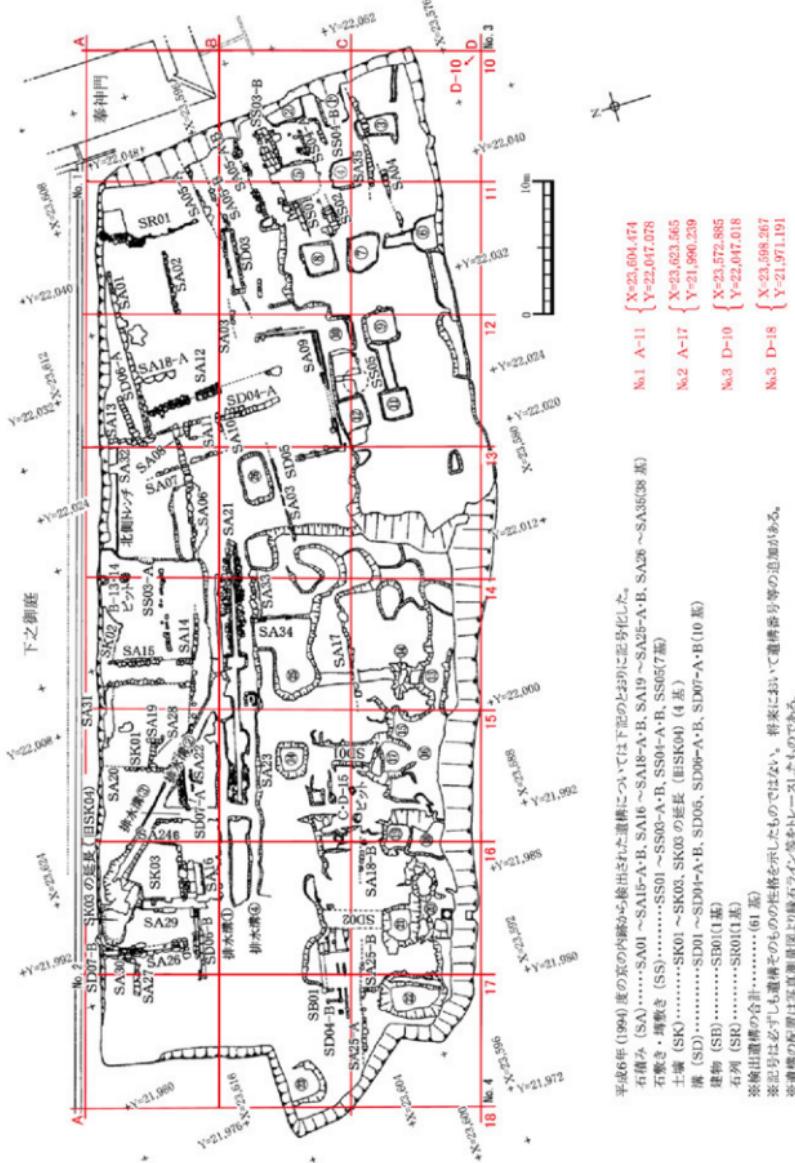
グリッドの設定(第16図)は、1グリッドの規模が10m×10mを単位とした。基準となった杭は、下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より50cmの地点に基準杭A-11を設定した。以下、側溝と平行させながら東西方向に10m間隔でA-12からA-17の杭を設定した。南北方向には基準杭A-11からA-17を標準とし、これを軸線としてA-17からW 90° 0' 00"Sに振って10m間隔でB-11・C-11・D-11の杭を設置し、グリット番号は東から西へ10・11・12…と数字を冠した。グリッドの番号はアルファベットを採用し、北から南へA・B・C…とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてA-10・B-10…と標記した。なお、グリッド名はグリット内の東南隅の杭に冠して、将来の調査に使用できるように設定した。

基準杭A-11とA-17を結ぶ軸線(南北基準座標軸N° 19' 00"Wに偏る座標軸)からW 180° 0' 00"Eへ振って、A-11から東側へ170cmの箇所にある奉神門基壇と丁度かち合うように基準杭A-11を設定した。

調査地区的A-11(北東)、A-17(北西)、D-10(南東)、D-18(南西)の4点のX座標とY座標については、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた(第16図)。

A-11 (X = 23604.474 Y = 22047.078)	A-17 (X = 23623.565 Y = 21990.239)
D-10 (X = 23572.885 Y = 22047.018)	D-18 (X = 23598.267 Y = 21971.191)

その他、A-11から東側にある奉神門基壇とかち合う接点(170cm)から奉神門南側階段がとり付けられた基壇(階段南側縁と基壇との接点)までの直線距離は6mと判読した。



第16図 「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定

第Ⅳ章 遺構

第1節 遺構の概要

A. 遺構の種類と概略

平成6年度の首里城京の内跡発掘調査で検出された遺構には石積み（階段を含む）、石敷き（埴敷きを含む）、土壙、溝、建物、石列などがある。検出された遺構のほとんどは真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるものが存在した（第16図・第17図）。

各種の遺構は発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化し、検出された順に番号を冠した。

具体的には、建物と付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を付した。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなった遺構もある。これについて古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して、新旧の番号と記号を併用した。基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかった。これは記号や番号の改正などによって図面整理や資料整理（ナンバーリングの変更など）で時間を費やし、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからであった。遺構の記号は以下のとおりであるが必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。なお、今回の報告で新たに遺構が3基確認されたことは、大きな成果であった。

遺構の種類は石積み（S A）、石敷き・埴敷き（S S）、土壙（S K）、溝（S D）、建物（S B）、石列（S R）の6種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

石積み（S A）

石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造は判っていない。石積みは外面と内面を並行に南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。古絵図にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成（岩盤の削平と掘り下げ）で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や幾度となる造成による嵩上げ等による内面の破壊や石積みの際に直接岩盤上に積み上げた事に起因するようである。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切り石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤（遺物包含層を二次的に使用）や削平した岩盤上に直接的に配置し、その上から切り石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切り石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げ高が高い位置にあつたため、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。他にも例外的ではあるが野面積みを積み上げ途中から裏込目石の代りに疊混りの土砂を投入する特殊な例があった。発掘調査の結果、明確な石積み（区画石積み・御嶽・倉庫・琉大の石積み）となったものと今回の整理で新たに確認された2基（S A 05 - B の内・外面）を加えると、切石積みでは東西方向に延びる石積みが15基（S A 03, S A 04, S A 05 - B の内・外面、S A 06, S A 08, S A 10, S A 14, S A 17, S A 18 - B, S A 25 - A, S A 27, S A 31, S A 33, S A 35）で、南北方向に延びるのは12基（S A 07, S A 11 ~ S A 13, S A 15, S A 18 - A, S A 19, S A 20, S A 25 - B, S A 30, S A 32, S A 34）が確認されている。これらの切石積みの対比・相関関係については、第5表で整理した。野面積みは1基（S A 24）のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇の縁石や建物の縁石が4基（S A 01, S A 01背面、S A 02, S A 09）、階段およびその脇石積み3基（S A 16, S A 19, S A 28）、側溝の縁石2基（S A 26, S A 29）、石積みの裏込目石の集石が2基（S A 21, S A 23）があった。以上の38基が石積み（S A）として取り扱ったものである。

なお、今回の資料整理をとおして、平成9（1997）年2月20日～3月21日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御嶽復元整備に係る遺構確認のための発掘調査で、下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内の石積み（SD04 - A と SA18 - A）と繋がっていく事を改めて確認（調査期間中に下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京

I
期II
期III
期IV
期V
期前M
半期後M
半期

の内を南北に横断して最高位にある首里森御獄へ繋がっていく事を現地で確認した。下之御庭の首里森御獄は京の内にある首里森御獄（本体）への遙拝所であることが石積み遺構からも推定できた。】した。

石敷き・埴敷き（SS）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニービスフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で破壊されたためである。埴敷きとしたものは埴瓦が敷かれた状態で検出されたのではなく、埴敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石と礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊・踊り場などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

石敷きの細粒砂岩製のものは4基（SS 01、SS 02、SS 03-B、SS 04-A・B）が存在し、小規模な構築物を囲む回廊様な遺構とみられ、当該遺構は切り合っている事から新旧、二時期が存在するようである。石敷きの石灰岩製のものは1基（SS 03-A）のみであったが、後述する首里第一尋常高等小学校の排水溝と関係し、一連のものとみられる。埴敷きは1基（SS 05）のみで、戦災やその後の造成で破壊された状態で検出されている。以上の6基を石敷き・埴敷き（SS）とした。

土壌（SK）

人為的な掘り込みや自然地形の部分的な落ち込みなどを総称して土壌とした。土壌は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の遺構と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの3種類があった。これらの土壌は3基（SK 01～SK 03）が確認されている。SA 19、SA 20、SA 28は完掘後に最終段階で倉庫内部であることが判明し、SK 01と名称を付けたものもある。

SK 02は岩盤の窪みなどを利用し、造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋めたものである。造成土（SK 02）直上にSA 15、SA 31の石積みがなされている。

SK 03はSA 24の石積みと同レベルで検出されたものであるが、SA 24の西側を一帯の窪地を埋めた造成土（遺物包含層を埋土に用いる）である。SK 03を発掘した結果、SA 24の外面の石積みが検出された。以上の3基を土壌（SK）として処理した。その他、SK 03と同時期の土砂が北西側にもある程度の広がりを持って分布していたことなどから“SK 03の延長（旧名称：SK 04）”として取り扱った。

溝（SD）

建物や石積みに付属する溝と最終的に便所となったものなどをSDと記号で表記した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは3基（SD 06-A・B、SD 07-A）が存在する。南北方向に延びるものも3基（SD 04-A、SD 05、SD 07-B）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ琉大の建物基礎（布堀り基礎跡）2基（SD 01、SD 02）や近代～現代の便所跡2基（SD 03、SD 04-B）が存在していた。以上の10基を溝とした。

建物（SB）

首里第一尋常高等小学校の頃の便所に伴う施設（覆い屋、基礎石、縁石、踊り場など）がセットで検出されたものを建物とした。1基（SB 01）のみであった。SB 01の建物の中にはSD 04-Bの便所跡が伴っている。

石列（SR）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたものであり、1基（SR 01）のみ確認されている。建物の縁石は石敷き遺構（SS 01、SS 02、SS 03-B、SS 04-A・B）の東南隅から検出された。京の内発掘調査報告書（I）で、東西方向に延びたものが1基（SR 02）と報告したが検討の結果、前述した石敷き遺構（SS 01ほか3基）と関連する一連のものと判断されたことから当該遺構は1基のみとなった。

以上の58基の遺構は一連のものもあるが個別の機能を尊重したため重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のa～dまでの4種類に分類と整理ができるようである。

a. 石積み（31基）

- a. 切り石積み (SA 03、SA 04、SA 05 - B 内・外面、SA 06 ~ SA 08、SA 10 ~ SA 15、SA 17、SA 18 - A・B、SA 19、SA 20、SA 25 - A・B、SA 27、SA 30 ~ SA 35) …… 27 基。
- ロ. 野面石積み (SA 24) …… 1 基。
- ハ. 排水施設を伴う切り石積みと関連する遺構 (SD 04 - A、SD 06 - A) …… 2 基。
- ニ. 拝所の一部となる切り石積みと関連する遺構 (SA 25 - A・B) …… 2 基。
- b. 建物および付属遺構 (9 棟)
- イ. 基壇を有する建物の面石 (SA 01・SA 01 背面) …… 1 棟。
- ロ. 排水溝や階段に取り付けられた建物 2 棟。1 棟目 (SA 09、SD 05)、2 棟目 (SA 26、SD 07 - B、SD 06 - B、SA 16、SA 22、SD 07 - A、SS 03 - A) …… 2 棟。
- ハ. 便所を伴う建物遺構は 3 棟が存在する。1 棟目 (SA 02、SD 03)、2 棟目 (SD 03、SD 03 関連施設)、3 棟目 (SB 01、SD 04 - B) …… 3 棟。
- ニ. 石敷き・縁石・礎石を伴う遺構 (SS 01、SS 02、SS 03 - B、SS 04 - A・B) …… 2 棟。
- ホ. 倉庫遺構 (取り付け階段を含む) (SA 19・SA 20、SA 28) …… 1 棟。
- c. 土壙 (3 基)
- イ. 倉庫遺構と重複する SK 01 (SA 19、SA 20、SA 28) …… 1 基。
- ロ. 土壙直上に遺構が存在する SK 02 (SA 15、SA 31) …… 1 基。
- ハ. 石積みを埋めた SK 03 (SA 24) …… 1 基。
- d. その他 (6 基)
- イ. 塗敷き遺構 (SS 05) …… 1 基。
- ロ. 石積みの裏込目石の集石遺構 (SA 21、SA 23) …… 2 基。
- ハ. 摂壁の裏込目石の集石遺構 (SR 01) …… 1 基。
- ニ. 建物の基礎 (布堀り基礎) 跡。溝 (SD 01、SD 02) …… 2 基。
- 以上のように大別すると 49 基が遺構として整理ができる。
- 次に石積みで切り石積みの外面と内面を対応関係について第 5 表で整理した場合、上記 a. イの切り石積み 27 基の内、倉庫跡の石積み SA 19・20 の 2 基、琉大の石積み SA 03 の 1 基、の合計 3 基を除外して今回、新たに確認された SA 05 - B (内・外面) の 2 基を追加すると 26 基となるが、切り石積みの対比・相関関係について検討したところ第 5 表のような結果が得られた。

第 5 表 切り石積み (区画石積み・御嶽) の外面と内面の関係

南 北 軸 方 向			東 西 軸 方 向		
No.	外 面 (外側)	内 面 (内側)	No.	外 面 (外側)	内 面 (内側)
①	SD04 - A と SA32 か	SA18 - A	①	SA04	未確認
②	SA07	SA12	②	SA05 - A (外面)	SA05 - A (内面)
③	既に破壊され消失	SA11	③	SA05 - B (外面)	SA05 - B (内面)
④	既に破壊され消失	SA13	④	SA06	SA10 か
⑤	SA15 (西側)	SA15 (東側)	⑤	SA08	SA10 か
⑥	消失	SA25 - B (御嶽)	⑥	SA14	既に破壊か。SA21・23 か
⑦	SA30	未確認	⑦	SA21 (既に破壊か)	SA33
⑧	未検出	SA31	⑧	SA17・SA18 - B・SA25 - A (御嶽)	既に破壊
⑨	既に破壊され消失	SA32	⑨	SA27	未確認
⑩	既に消失	SA34	⑩	SA31	未確認
			⑪	SA35	既に破壊
合 計 10 基			合 計 11 基		

B. 各時期別の遺構

発掘調査時点で出土した陶磁器を基に各時期別に遺構を整理すると、第Ⅰ期～第Ⅵ期（第17図）までの6時期に大別されるようであるが各遺構のトレンチ内から出土した陶磁器類を主とする遺物の整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定なものとして考慮されたい（第17図～第96図）。

- イ. 第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）……………（第18図）
- ロ. 第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）……………（第24図）
- ハ. 第Ⅲ期（15世紀中頃）……………（第32図）
- ニ. 第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）……………（第45図）
- ホ. 第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）……………（第57図）
- ヘ. 第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）……………（第69図）
 - a. 同期前半（19世紀終末～昭和20年）……………（第71図）
 - b. 同期後半（昭和24年～昭和58年）……………（第86図）

以下、各時期別に遺構を整理するが、個々の遺構の特徴や規模などについては観察表に呈示することにする。



第17図 遺構全体図

I. 第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）・（第18図）

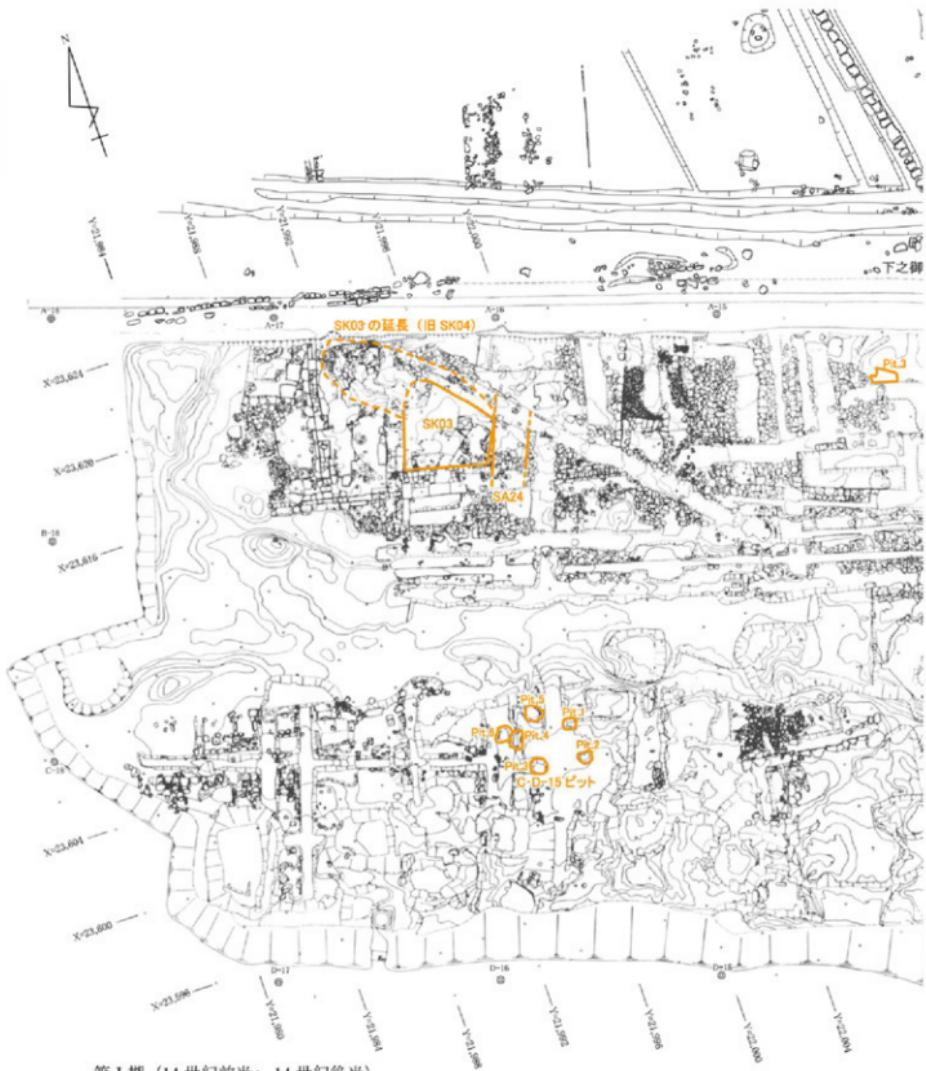
この時期の遺構としてはS A 24の野面石積み（第19図・第6表。図版1）と土壙SK 03（第20図・第7表。図版2～6）及び土壙SK 03の延長（第21図・第8表。図版7～9）が存在する。他に石灰岩を人為的に掘り込んだ大型のピット様のものがB-13・14のグリッドで3基（第22図・第9表。図版10）、C・D-15のグリッドで6基（第23図・第10表。図版11・12）が確認されているがプランは把握ができなかった。ピット内からウシなどの骨（註1）が出土している状況が窺えた。ウシなどを用いた何等かの祭祀儀礼が当該期にあったのではないかと考えられる。ウシの下顎骨を意図的に配置した事例として南風原町仲間村跡A地点（註2）だろうか。今後、大型（直径30～50cm）ピット内から出土するウシの骨の出土例が増加すれば祭祀と関係する遺構として位置づけられるのではないだろうか。

註文献および参考資料

註1. C・D-15のピット内からはウシの膝蓋骨、手根骨、中節骨、角突起などを含む37点が出土し、その他にブタ、ニワトリ、ウサギ、リクガメ、サメなどの骨が出土している。

奈良市内にあるサンティン毛遺跡に点在した按司墓4基を20年程前に市文化課が墓内の調査を実施した際、按司墓3基の骨壺には人骨がなく代わりにブタの骨が納められていたとのことである。市内の事例では人骨が拾えない場合は動物の骨に放入の塊を籠めて骨壺に納めたとのことであった（鴨城清氏の教示による）。

註2. 上地克也ほか「津嘉山古島・仲間村跡A地点・仲間村跡B地点・津嘉山クボー遺跡－那覇空港自動車道豊見城東道路・主要地方道那覇糸満線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」南風原町教育委員会 2005年3月（当該、牛下顎配列遺構の時期は12世紀から15世紀代で全国的にも例のない“闇田儀礼”と解されている。また、当該遺構の周辺には自生しないヤシ科樹木が33本が意図的に植栽された痕跡を確認している。）



第1期（14世紀前半～14世紀後半）

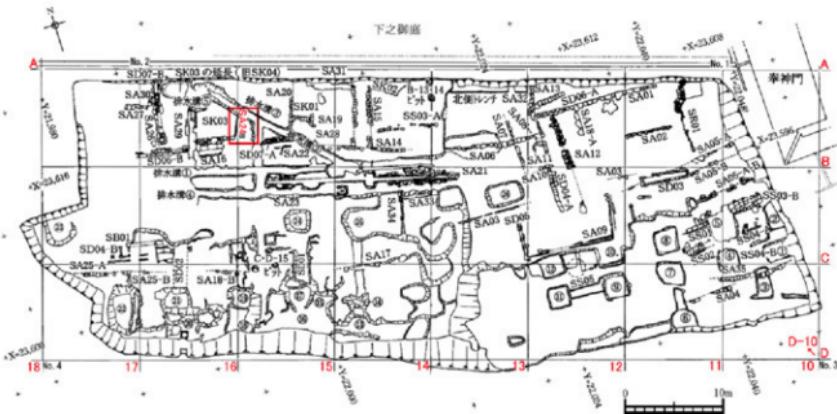
石積みSA24（野面石積み）

土塁SK03, SK03の延長（旧SK04）

ピット（B-13・14, C-D-15）

第18図 京の内北地区第I期(14世紀前半～14世紀後半)遺構の推定復元



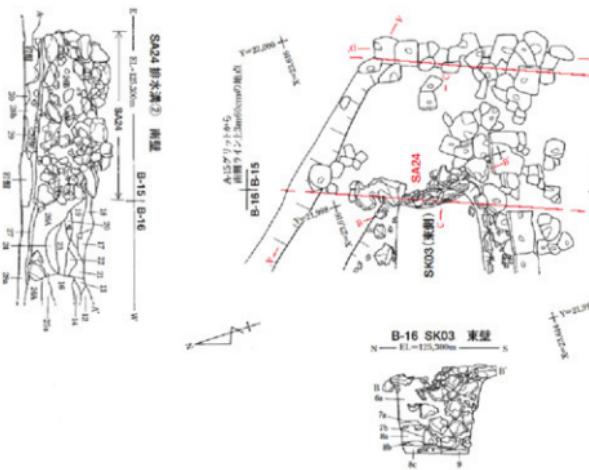


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第6表 第I期 SA24 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 幅 高	性格・形状・工法・機能の推定期間など	主軸方位	石積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-15-16 SA24 第18・19図	1m83cm 2m00cm 76cm	琉球王国成立以前の野面の石積み。南北方向に短く残る。岩盤および造成土盤より石積みを積み上げているが、西壁はルーズで土砂が能入する。根石と礫石を敷いた後に両面を積み上げながら小粒混じりの土砂を30~40cmの厚さで投入し、その直上から土砂を隠すように15~40cmの厚さで礫石を詰めた特殊な工法とみられる。14C前半~後半頃。	N20° 05' W	野面積み 85°	20~25cm 7~18cm 12~32cm	土壤SK03。根石から5番石までを含めた平均勾配は87°

B-16 SK03(東側)の圖面 東壁



B-16 SK03(東側)の圖面 西壁

第0層...—白色土層、表面は土色である。
第1層...—白色土層、表面は土色である。
第2層...—白色土層、表面は土色である。
第3層...—白色土層、表面は土色である。
第4層...—白色土層、表面は土色である。
第5層...—白色土層、表面は土色である。
第6層...—白色土層、表面は土色である。
第7層...—白色土層、表面は土色である。
第8層...—白色土層、表面は土色である。
第9層...—白色土層、表面は土色である。
第10層...—白色土層、表面は土色である。
第11層...—白色土層、表面は土色である。
第12層...—白色土層、表面は土色である。
第13層...—白色土層、表面は土色である。
第14層...—白色土層、表面は土色である。
第15層...—白色土層、表面は土色である。
第16層...—白色土層、表面は土色である。
第17層...—白色土層、表面は土色である。
第18層...—白色土層、表面は土色である。
第19層...—白色土層、表面は土色である。
第20層...—白色土層、表面は土色である。
第21層...—白色土層、表面は土色である。
第22層...—白色土層、表面は土色である。
第23層...—白色土層、表面は土色である。
第24層...—白色土層、表面は土色である。
第25層...—白色土層、表面は土色である。
第26層...—白色土層、表面は土色である。
第27層...—白色土層、表面は土色である。
第28層...—白色土層、表面は土色である。
第29層...—白色土層、表面は土色である。
第30層...—白色土層、表面は土色である。

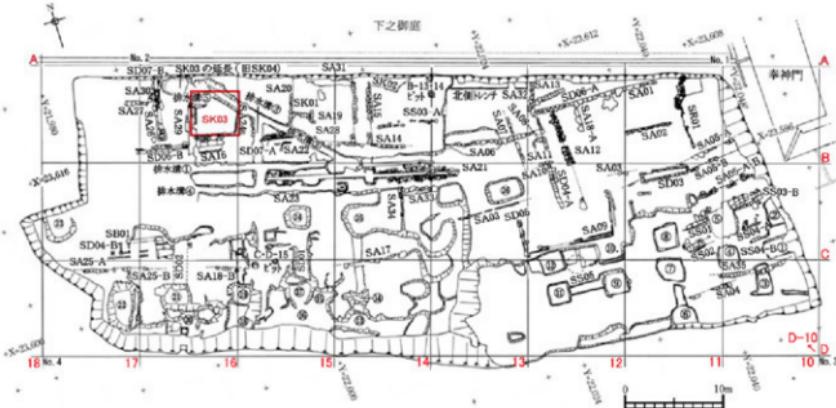
B-16 SK03(東側)の圖面 西壁

第0層...—白色土層、表面は土色である。
第1層...—白色土層、表面は土色である。
第2層...—白色土層、表面は土色である。
第3層...—白色土層、表面は土色である。
第4層...—白色土層、表面は土色である。
第5層...—白色土層、表面は土色である。
第6層...—白色土層、表面は土色である。
第7層...—白色土層、表面は土色である。
第8層...—白色土層、表面は土色である。
第9層...—白色土層、表面は土色である。
第10層...—白色土層、表面は土色である。
第11層...—白色土層、表面は土色である。
第12層...—白色土層、表面は土色である。
第13層...—白色土層、表面は土色である。
第14層...—白色土層、表面は土色である。
第15層...—白色土層、表面は土色である。
第16層...—白色土層、表面は土色である。
第17層...—白色土層、表面は土色である。
第18層...—白色土層、表面は土色である。
第19層...—白色土層、表面は土色である。
第20層...—白色土層、表面は土色である。
第21層...—白色土層、表面は土色である。
第22層...—白色土層、表面は土色である。
第23層...—白色土層、表面は土色である。
第24層...—白色土層、表面は土色である。
第25層...—白色土層、表面は土色である。
第26層...—白色土層、表面は土色である。
第27層...—白色土層、表面は土色である。
第28層...—白色土層、表面は土色である。
第29層...—白色土層、表面は土色である。
第30層...—白色土層、表面は土色である。





図版1 上：B-15・16 SA24(写真手前)検出前の状況 西側を望む(東より)
下： 同上 SA24(写真手前)検出直後の状況 西側を望む(東より)



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第7表 第Ⅰ期 SK03 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 長 残 存 幅 残 存 高	性格・形態・工法・機能の推定時期 など	主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-16 SK03 第18-20図	5m32cm 4m45cm 深さ 1m16cm	琉球王国成立以前の土壙でSA24の機能停止直後に造成で埋められた庭地。平面観が正な台形状となる。土壙内の包含層は上・下層とも時間差が無いため短期間でSA24を埋めたものとみられる。14C前半～後半頃。	南北軸は SA24の N20° 05' W 東西軸は SD07の N77° 00' W	— —	規模 幅277～ 445cm。 深さ76～ 116cm。 長さ40～ 532cm。	石積みSA24の西側前面部 の庭地(当時は平地か)を埋 めた二次堆積土(造成土)。 土壙SK03内から鍍金弁文 鏡・白磁ビロースクタイプ碗 II・天目茶碗などが出土。

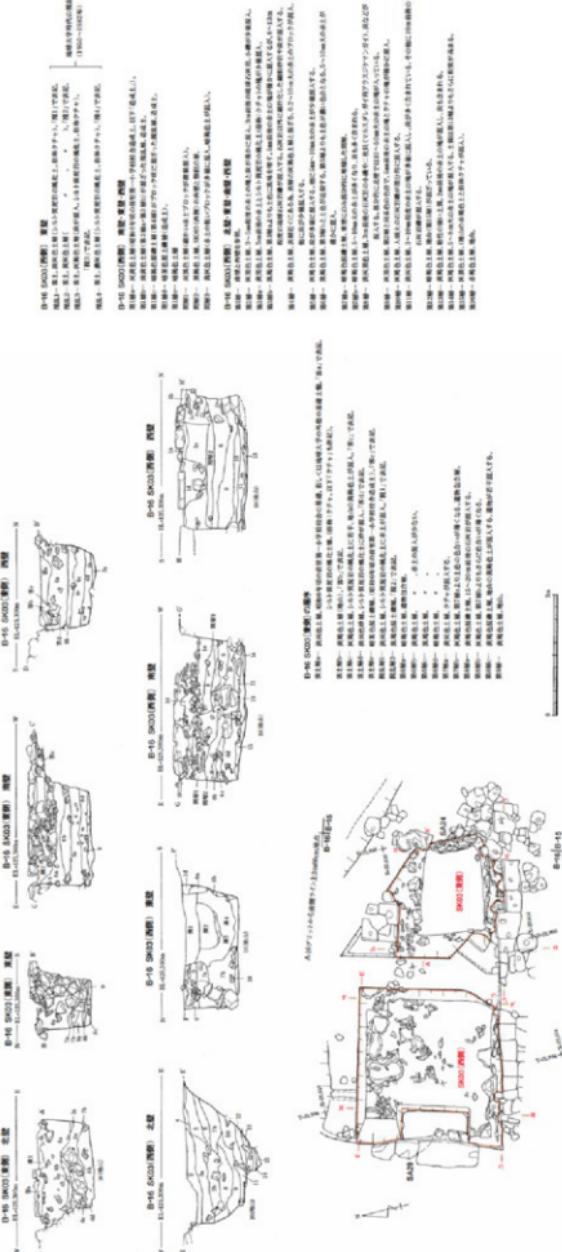
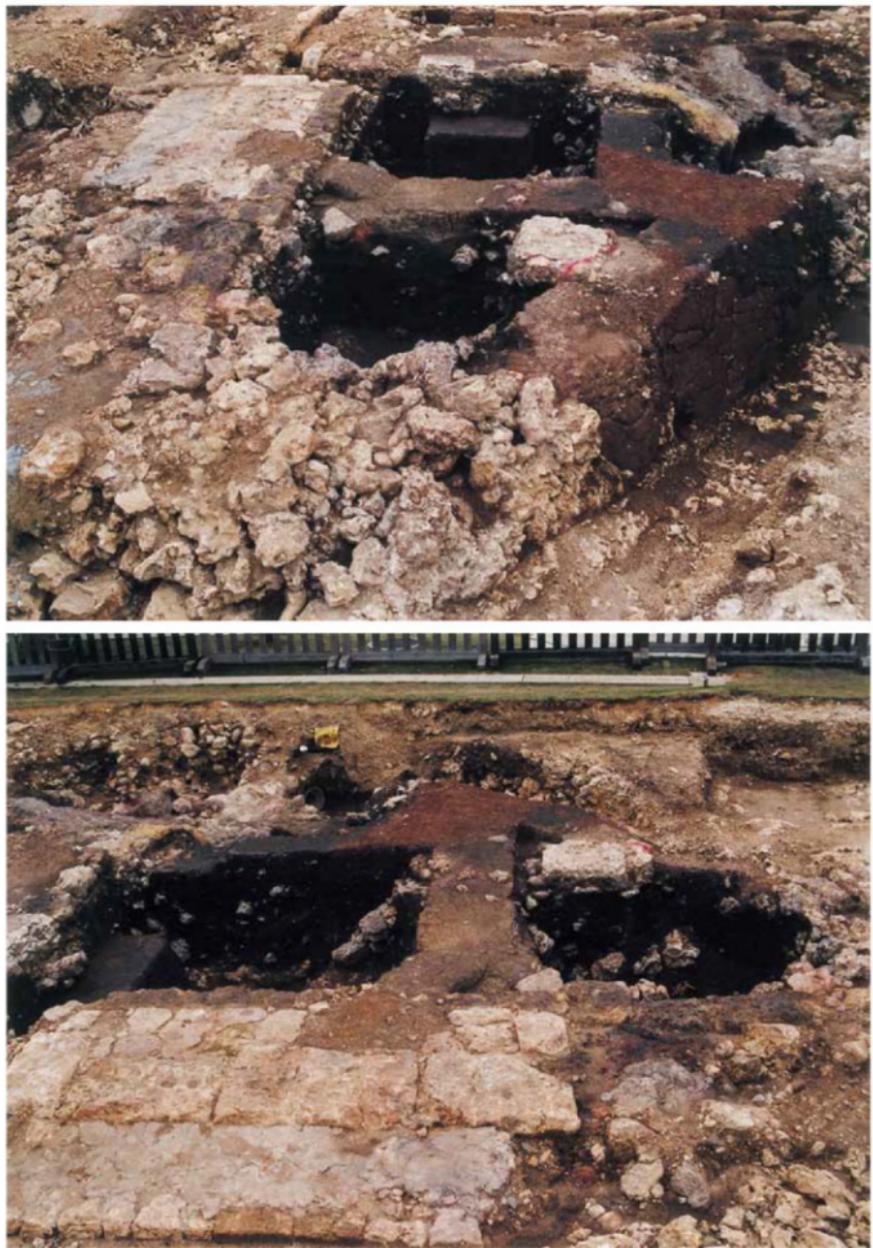


図202 図 B-16-2002M001 - 2003M001 平面図・断面



図版2 上:B-16 SK03 西より東側を望む
下:同上 SK03 北より南側を望む



図版3 上：B-16 SK03 東より西側を望む
下：同上 SK03 南より北側を望む



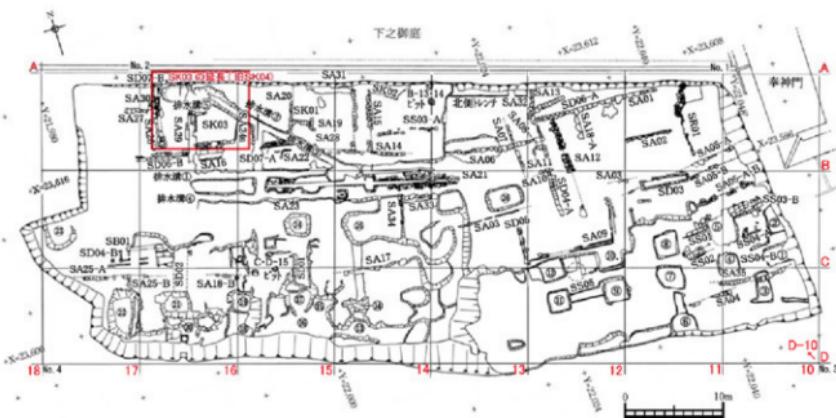
図版 4 上：B-16 SK03(東側)試掘壙 南壁(北より)
下：同上 SK03(東側)試掘壙 西壁(東より)



図版5 上：B-16 SK03(東側)試掘壙 北壁(南より)
下：同上 SK03(西側)試掘壙 南壁(北より)



図版 6 上：B-16 SK03(西側)試掘場 西壁(東より)
下：同上 SK03(西側)試掘場 北壁(南より)



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第8表 第Ⅰ期 SK03の延長(旧SK04) 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 長 残 存 幅 残 存 高	性格・形状・工法・機能の推定時期 など	主軸方位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-16 SK03の 延長 (旧SK04) 第18・21図	南北軸 3m20cm 東西軸 約5m	琉球王国成立以前の土壙SK03の一端とみられる。堆積層の大部分が戦後の造成で搅乱を受けている。14C前半～後半頃。	土壙SK03か ら北側に広 がっている。	— —	— —	土壙SK03、石積みSA24・ 29、排水溝③。石弾、角釘、 ガラス小玉、土器などが出 土。

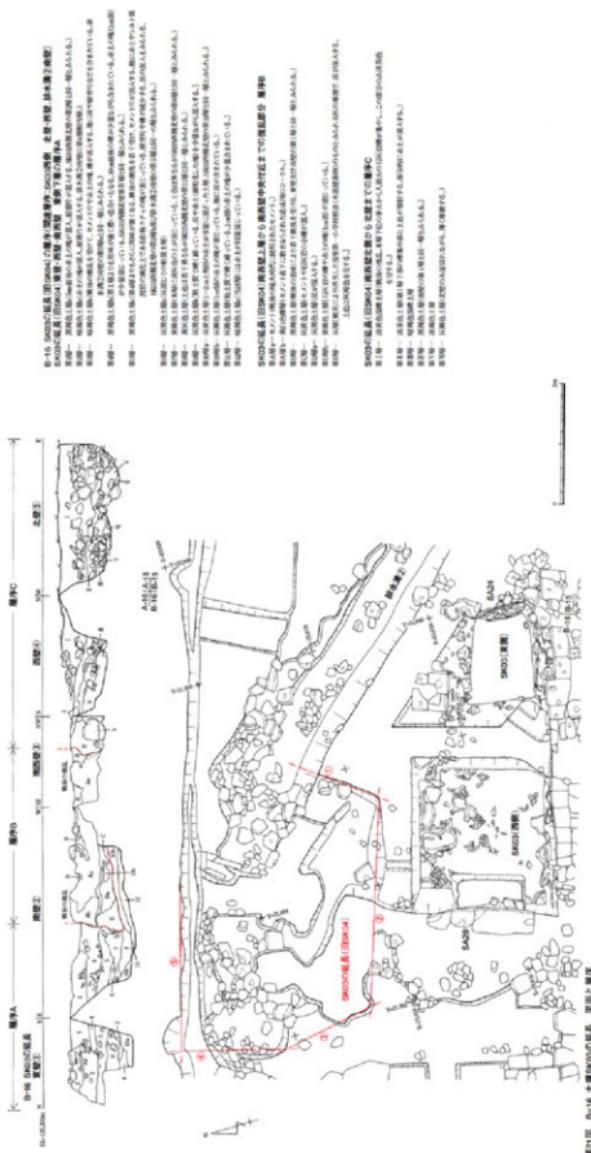


図21 図 B-16 建物構造図 (平面)



図版 7 上：B-16 SK03 延長部分 南より北側を望む
下：同上 SK03 延長部分 東より西側を望む



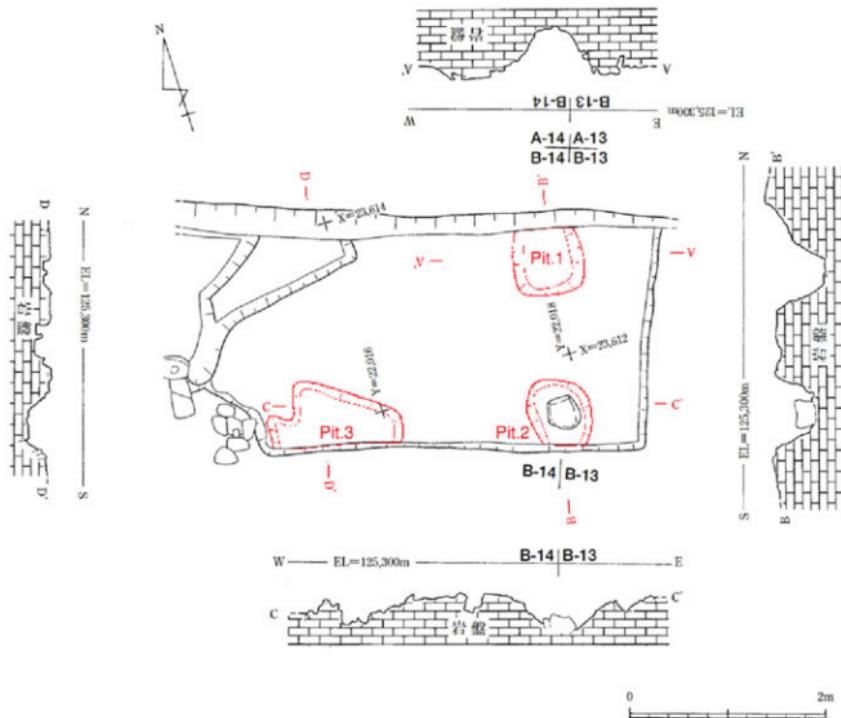
図版 8 上：B-16 SK03 延長部分 東壁(西より)
下：同上 SK03 延長部分 南壁(北より)



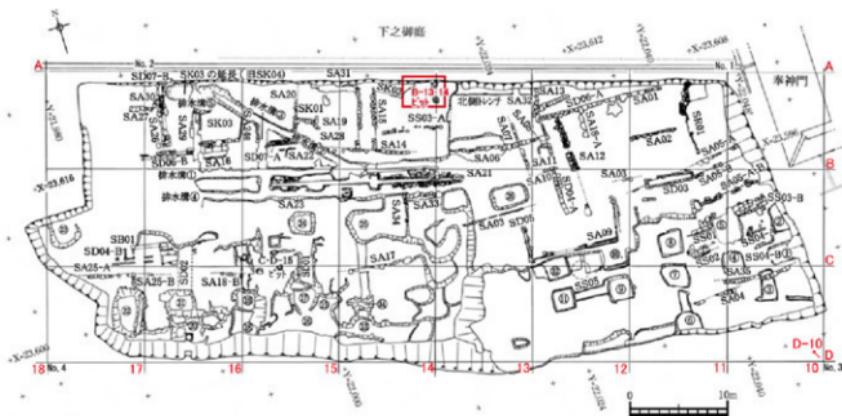
図版9 上：B-16 SK03 延長部分 南壁(北より)
下：同上 SK03 延長部分 西壁(東より)

第9表 第I期 B-13・14 ピット 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能 の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-13・14 ピット 第18-22図	Pit.1 長軸(78cm) 短軸76cm 深さ48cm Pit.2 長軸(100cm) 短軸74cm 深さ(礎石上面20cm) Pit.3 長軸140cm 短軸(66cm) 深さ27cm	岩盤の窪みを利用した 掘建柱の住居跡などの 柱穴。Pit.2で礎石が検 出される。グスク土器が 出土している状況から 当該期に比定。	建物などの南 西隅であるこ とから南北軸 はN 11°00' E	— — —	— — —	土壤SK02、SS03-A。Pit周 辺は王国時代や戦後の造成 や岩盤の削平などで擾乱を 受けている。



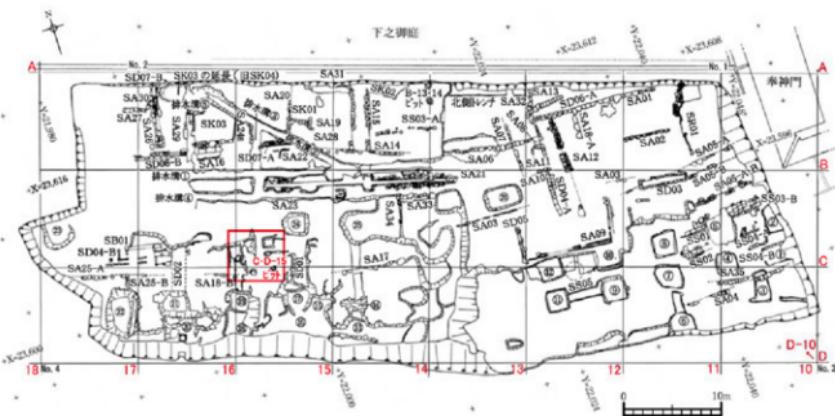
第22図 B-13・14グリッド内のピット 平面と断面



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）



図版 10 B-13・14 ピットを南側上空より望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第10表 第Ⅰ期 C・D-15ピット 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 長 残 有幅 残 有高	性格・形状・工法・機能の推定時期 など	主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-D- 15ピット 第18・23図	Pit.1長軸76cm 短軸46cm 深さ31cm Pit.2長軸64cm 短軸48cm 深さ44cm Pit.3長軸70cm 短軸64cm 深さ59cm Pit.4長軸96cm 短軸54cm 深さ41cm Pit.5長軸88cm 短軸50cm 深さ72cm Pit.6長軸88cm 短軸64cm 深さ30cm	岩盤の産みを利用したPit. Pit.2や Pit.5は、Pit 内の石灰岩の使用に よって摩耗する事から柱穴としての 利用も考えられる。Pitからプランは 把握できないがPit.1の周辺から青 磁香炉の出土やPit 内からラクシ、ブ タ、ニワトリ、ウサギなどの骨が出土 している事などから祭祀と関連する Pitかと思慮される。14C後半～15 C中頃。		重な五角 形で主軸 不明。	— — —	区画石積みSA18-B、石 開いのない御嶽(古い形態 の祭祀場跡)か。

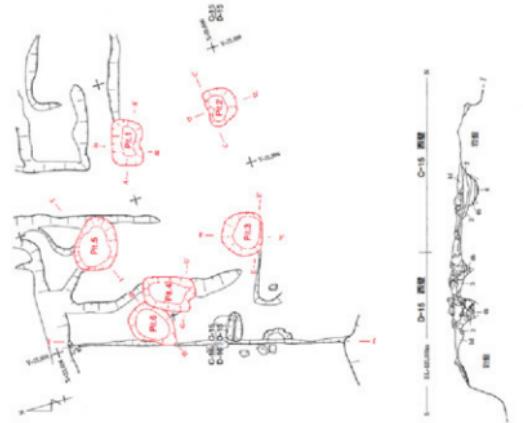
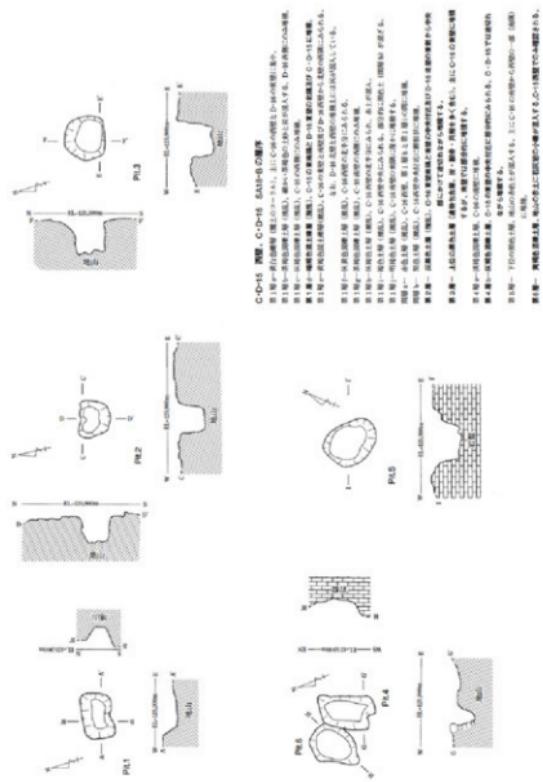


図23 図 C-D-15 グリッパのビット 平面と断面



C-D-15 図 C-D-15 グリッパの手形
P1.3 P1.2 P1.1
C:中心 I:内側 O:外側 R:半径
C-D-15 グリッパの手形
P1.3 P1.2 P1.1
C:中心 I:内側 O:外側 R:半径
C-D-15 グリッパの手形
P1.3 P1.2 P1.1
C:中心 I:内側 O:外側 R:半径



図版 11 上：C-D-15 ピットを西側上空より望む
下： 同上 ピット 東より西側を望む



図版 12 上: C-D-15 ピット 西より東側を望む
下: 同上 ピット 北より南側を望む

口. 第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）・（第24図）

当該期の遺構としてSA01・SA01背面（第25図～第29図・第11表。図版13～15）、SA05-A（外面）、SA05-A（内面）（第30図・第12表。図版16～20）、SK02（第31図・第13表。図版21・22）の3基が想定される。SA01は基壇を有する建物の面石とみられるものである。今回の整理でSA01背面の背面にあたる野面石積み（第28図・図版13下）を確認することができた。これにより基壇を有するSA01の梁行が4間強（748cm）が想定された。SA01の外面石積みには盤で印（記号）を刻み込んだ刻印石（註3）が19点確認されている。

次にSA05-A（外面）の石積みは外面が切石積み（第30図・図版16下・図版18上・図版19上）で、内面が野面積みのSA05-A（内面）である。SA05-A（内面）は野面石を丁寧に野面積み（第30図・図版16上・図版17・19下・図版20）で積み上げられている。SA05-A（内面）の位置はSS03-Bの北側寄りで検出されている。なお、SA05-A（内面）は第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）の時期でも再度使用している事が今回の整理で確認された。

SA05-A（外面）の北側に設定した東西トレーナー内から二次的に火災を受けた鉢（小札や金物）や釘が下層近くから出土している。この時期の状況を文献にあたると1453年に起きた志魯・布里の乱（註4）が予想されたが、最近の研究（註5）では当該時期（1453年）には王位継承の内乱による正殿の炎上消失はなかったことが文献資料などから裏付けられているようである。SA05-A（外面）の切り石は岩盤直上から石積みがなされている点や洪武通寶（初鑄造1368年）の出土などから志魯・布リの乱（1459年）以前から1368年以降の時期に普請がなされたものと予想されるところである。SA01とSA05-A（外面）の前後関係は、SA01が若干古く、SA05-A（外面）が新しい時期のものではないかと考えられる。

土壌SK02（第31図・図版22下で高麗系灰色瓦が北壁の下部にみえる）は下部の第9層から高麗系の灰色瓦の破片が多量に出土した状況から判断して当該期に設定した。土壌SK02は土壌SK01（SA19・20、SA28）の下位に位置する。

参考までに土壌SK01は、1459年の失火で消失した倉庫跡であり、多量の貿易陶器（推定個体数1,162個体）などが出土し、その内の518点と金属製品及びガラス玉一括が平成12（2000）年6月27日付で国の重要文化財として指定されている（註6）。

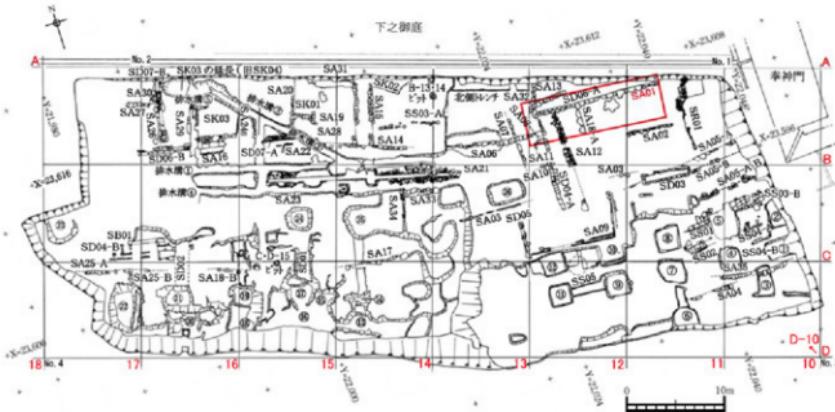
註文献

- 註3. 上地克也・上原靜《首里城跡検出の「刻印石」》『文化課紀要』第9号 沖縄県教育庁文化課 1993年3月。
- 註4. 沖縄県教育委員会『蔡温本 中山世譜 正巻』1986年。
- 註5. 高瀬恭子ほか『アジアの海の古墳球－東南アジア・朝鮮・中国－』琉球孤島書籍有限公司 榛樹書林 2009年7月30日。
- 註6.a. 沖縄県立埋蔵文化財センター「重要文化財指定記念 特別企画展 首里城跡の内蔵－貿易陶磁からみた大交易時代－」2001年3月。
b. 沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会 1998年3月。
- c. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年3月。



第24図 京の内北地区第Ⅱ期(14世紀終末～15世紀前半)遺構の推定復元



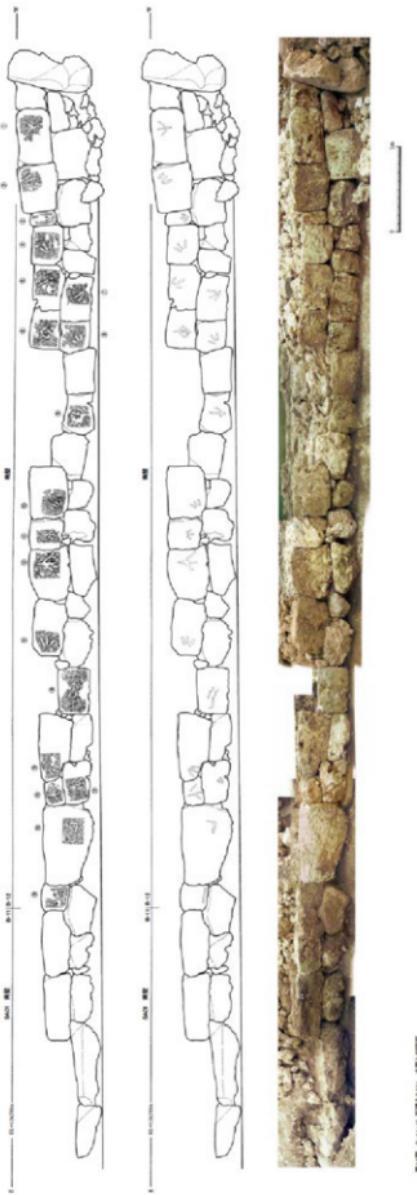


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

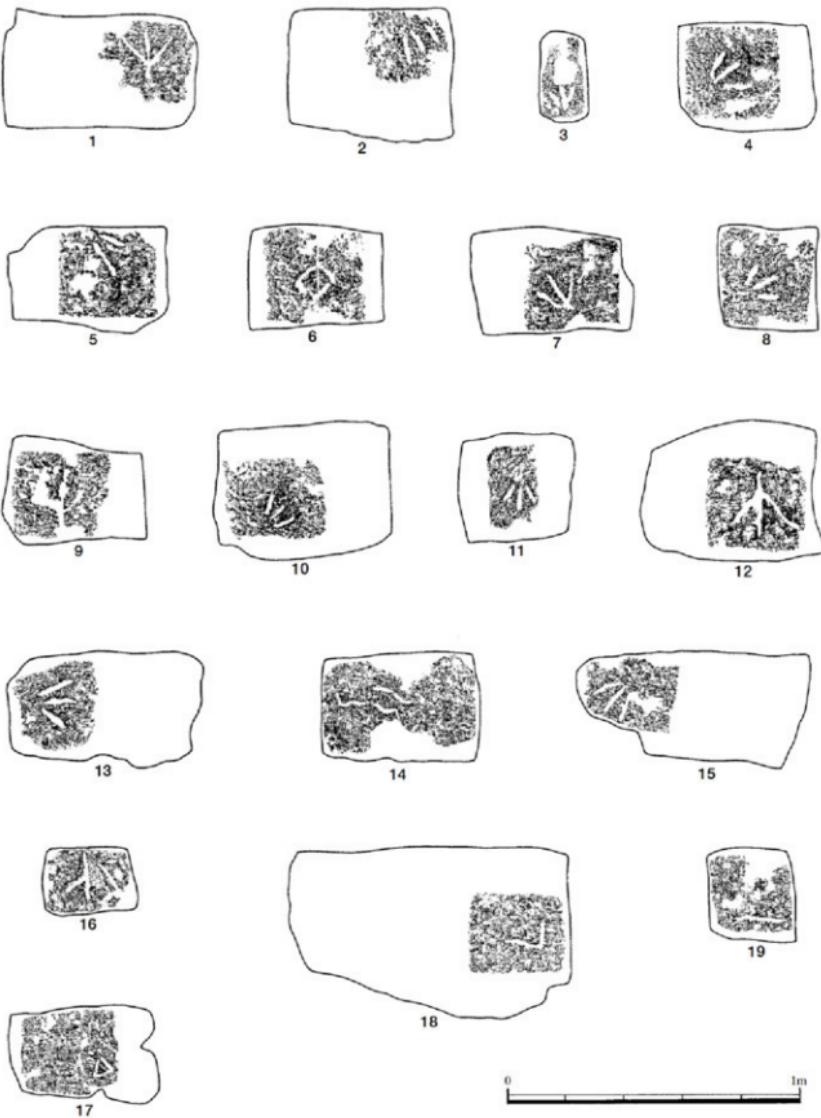
第11表 第Ⅱ期 SA01 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 長 残 存 幅 残 存 高	性格・形状・工法・機能の推定期 期など	主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-11・12 SA01 第24～29図	12m95cm 6m50cm 64cm	琉球王国初期頃の建物基壇。東西に延びる。岩盤を削平した面上に土盤となる土砂を6~7cm敷いた上から粗加工の大型切り石を設置。SA01の遺構を検討する中で二列配置の背面石積み(野面石積み)が確認された事は大きな成果であった。二列配置の野面石積みについて、建物の規模を把握する目的で、第29図を作成して検討をおこなった結果、南北軸が4間1尺(757cm)で、東西軸の残存する間数が7間半弱(1340cm+X)の建物であったことが推定できた。14C終末～15C前半。	N86° 45' W	切り石積み 全体勾配 65°・80° 一番石の 勾配 80°・83°	40~90cm 23~37cm 35~70cm	SA01の西端がSA13やSD04-Aで切られていて、SA01の西端を積み直している。その他、SA01の中央付近と西寄りの箇所で裏込め石の中からSA18-AとSA12の石積みが検出されている。また、第29図のようにSA01の背面石積み【二列配置の野面石積み】が確認された。外縁石積みの根石及び一・二番石に鉄釘による刻印がみられる。刻印の種類や組み合わせ、方向などから15種類19例(第26・27図)が確認。





新石器時代中期 烏石頭遺址
— 10 —



第27図 B-11・12 石積みSA01 外面石積みの刻印石



第28図 B-11・12、C-12 石積みSA01 背面石積みの根石設置状況模式図

B-11・12、C-12 石積み SA01 背面石積みについて

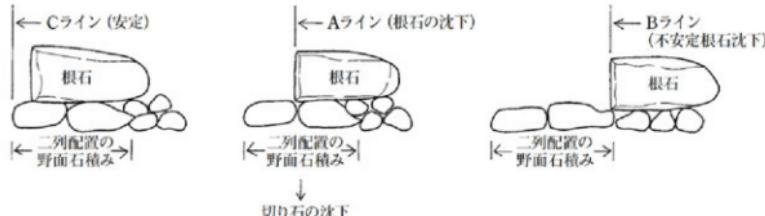
北側正面の切り石ラインから南側に広範囲に敷き詰められた栗石の中から東西方向に延びる野面の石を2列に配置された根石とみられる部分が確認された。この2列配置の石積みは、SA01とほぼ同一方向に延びていることからSA01の背面に石積みが設置された可能性が高いものと推察される。

参考までにSA01外面から背面石列(根石設置相当部分)までの直線距離(Aライン)は、748cmで4間強となる。実際に背面根石相当部分切り石を設置するとなると、下記B・Cラインの位置が想定される。

Bライン 4間(727cm)の位置

Cライン 4間1尺(757.5cm)の位置

各A~Cラインまでの三つのラインで、Cライン上に仮りに控え長40cm程の切り石を設置すると最も根石が安定する。A・Bラインは根石が沈下するなど不安定である。Bラインは建物の礎盤や礎石(柱)が設置された位置かもしれない。



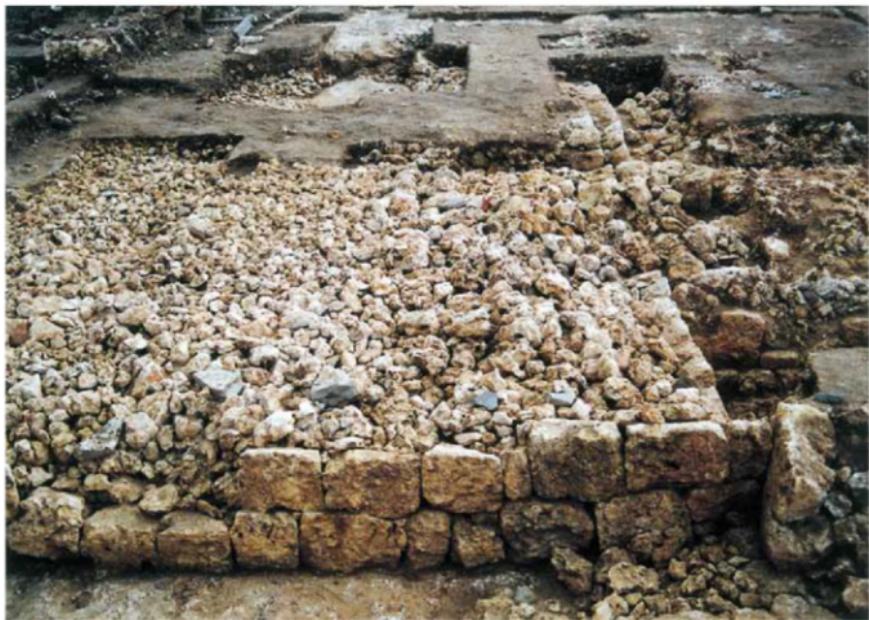
第29図 B-11・12、C-12 SA01(建物) 推定プランと根石設置ヶ所



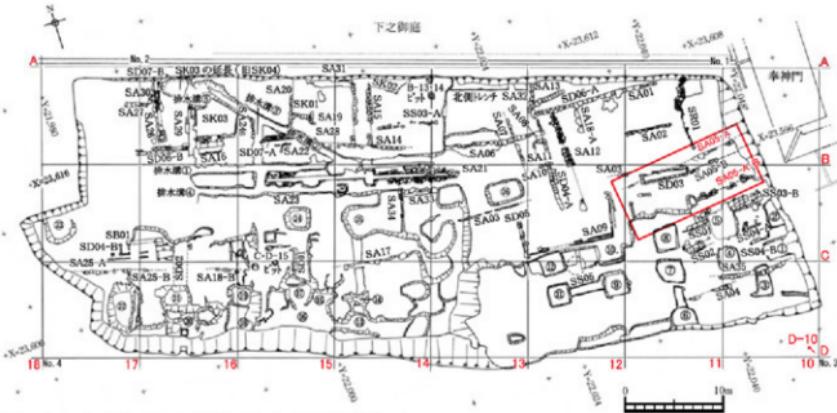
図版13 上：B-11・12 SA01(写真左側)ほかを西側上空より望む
下： 同上 SA01 南側上空より望む



図版14 上：B-11・12 SA01(写真右側)東より西側を望む
下： 同上 SA01 西より東側を望む



図版 15 上：B-11・12 SA01 北より南側を望む
下： 同上 SA01 北より南側を望む



「京の内」跡遺構配置図（赤色の枠内が遺構掲載範囲）

第12表 第Ⅱ期 SA05-A 遺構観察表

地区 遺構番号 掲図番号	残存 長 幅 高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え長	備考 (関連遺構・遺構の重複)
B-C- 10-11 SA05-A 第24・30図	11m90cm 6m00cm 67cm	琉球王国時代の区画石積み。東西に直線的に延びるが大半がSA02やSD03の下位に埋もれている。東端は未検出で奉神門南辺に延びる。SA01と同様に削平された岩盤の上に厚さ6cm程度の土砂を土盤に敷いてから丁寧に加工された切り石を設置。14C終末～15C初頭。SA05は第V期まで機能していたことが予想される。寿命の長い区画石積みとみられる。	N 95° 30' W	切り石積み 89°	32～65cm 28～39cm 15～52cm	SA05-A(外面)の上位はSA02の栗石SD03が重なっている。石敷きSS01～SS03-B、SS04-A・Bの主軸方向が近似。一番右の勾配は89°と椎石と同じ勾配。SA05の前面トレンチ内から二次的に火熱を受けた鐵の金物・小札や鉄釘が多量に出土。SA05-A(内面)の基礎は配石された野面石積みがC-11グリットのSS01及びSS03-Bの北隣りから検出されている。SA05-A(内面)の野面石積みは岩盤から積み上げていることがトレンチの発掘で判明している。今回の遺構検討の中で第IV期のSA05-B(外面)が新たに確認(第47図)された。SA05-B(外面)の内面は、SA05-A(内面)の野面石積みを再利用しているものと思惑されたことからSA05-B(内面)として取り扱った。その為、全体の遺構図(第17図)では、「SA05-A(内面)・SA05-B(内面)」、或いは第30図では「SA05-A・B(共通内面)」などと表記した。

图26 云山段 S405-A/B 断面剖面图

- 111 -





図版 16 上：B・C-10-11 SA05-A ほかを南側上空より望む
下： 同上 SA05-A (手前が外面、奥が内側石積み) 北より南側を望む



図版 17 上：B-C-10-11 SA05-A(右側が外面、左側が内側石積み) 東より西側を望む
下： 同上 SA05-A(手前が内側石積み、奥は外面) 南より北側を望む



図版 18 上：B-C-10・11 SA05-A 外面の切り石を北より望む
下： 同上 SA05-A(手前) 外面の切り石を南より望む

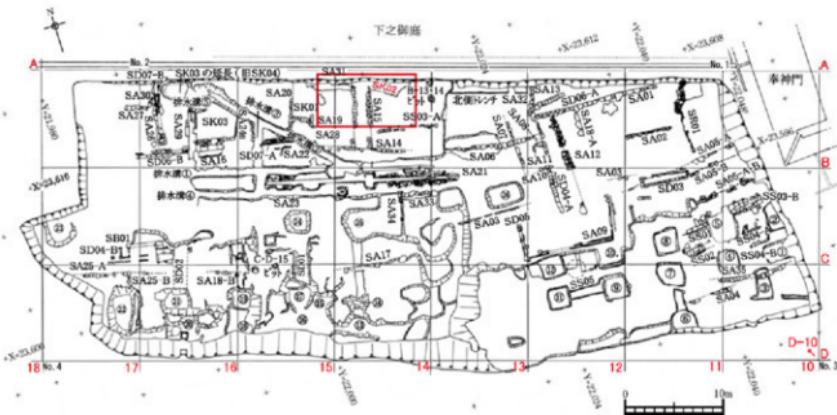


図版 19 上：B-10 SA05-A トレンチ 東壁(西より)
下：B-C-10・11 SA05-A 内側野面石積みと外面の切り石

右：同左 SA05-A 内側の野面石積み（黒枠内）

図版 20 左：B-10-11 SA05-A 内側の野面石積みを西より望む

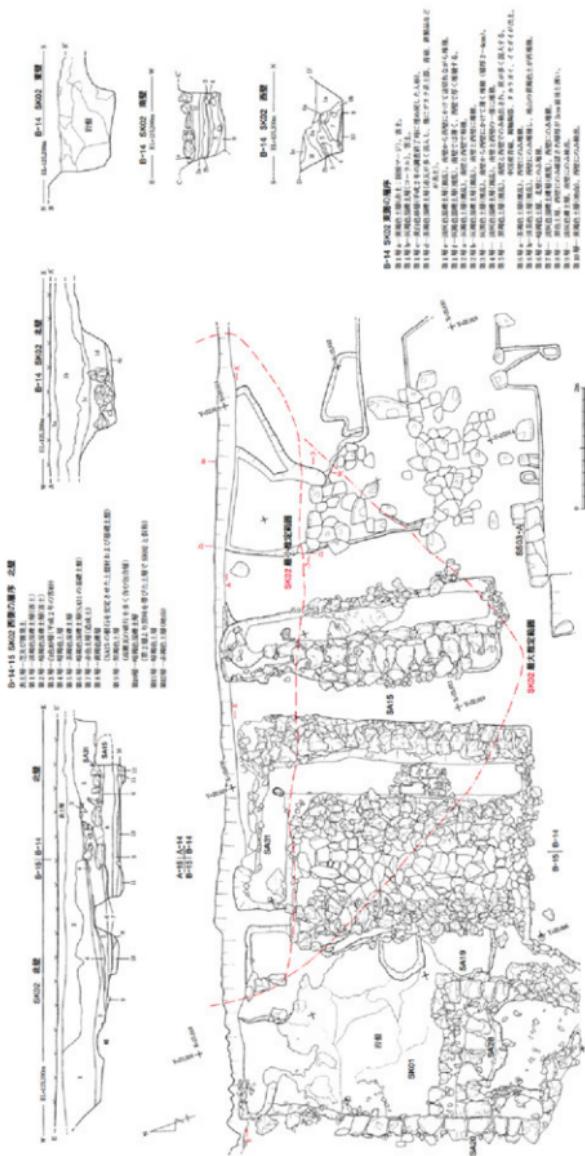




「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第13表 第Ⅱ期 SK02 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 長 残 存 福 残 存 高	性格・形状・工法・機能の推定期望など	主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-14-15 SK02 第24・31図	11m77cm 1m65cm	当該遺構の上位に第III期の土壌SK01(第44図)と第V期の石積みSA15(第57・61図)が存在する。土壌SK02の東西の端は岩盤で底みに堆積した包含層や遺物の造成土(石灰岩の繊を含む)である。石灰岩の底みは堆積した包含層の上から造成土で整地(雑な地均し)後に第V期のSA15の石積みを配置する。土壌内の下層より高麗瓦を主体とする遺物包含層が確認される。14世紀終末～15C初頭に埋められた土壌。	N72° 10' W が考えられる。	— — —	— — —	上位に第V期のSA15(第57・61図)と第III期のSK01(第44図)の遺構が重複して存在する。



第31回 B-14-15 土曜SM602 年度第6回



図版21 上：B-14・15 SK02(写真右側)ほかを東側上空より望む
下：B-14 SK02 東側 西壁(東より)



図版 22 上：B-14・15 SK02 西側 西壁(東より)
下：同上 SK02 西側 北壁(南より)

八、第Ⅲ期（15世紀中頃）（第32図）

この時期の遺構として第32図に呈示したように石積み、排水溝、土壙の三種類が存在する。以下、石積み、排水溝、土壙の順に遺構番号順、或いは関連遺構毎に記す。

1. S A 08（外側）と S A 10（内側）が対応（第33図・第14表。図版23・24）する。
2. S A 17・S A 18-B・S A 25-A・B（第34図・図版25～27）は、区画石積み（S A 17・S A 18-B）及び御獄（S A 25-A・B）の石積みとみられるものである。これらの石積みの内面は戦後の琉球大学校舎建築時の造成に伴う岩盤を削平した際に破壊され石積みの外側のみが途切れながら残存する程度であった。
 - a.) S A 17（第35・36図・第15表。図版28・29）の石積みの根石に外面に「H」・「N」字様の刻印のある石積みが2点（第36図）確認されている。
 - b.) S A 18-B（第37図・第16表。図版30）の石積みの北側・南側は、戦時に砲弾が着弾・爆発した際に生じた砲弾炸裂痕が二カ所で確認され、攪乱を受けている。
 - c.) S A 25-A・B（第38図・第17表。図版31～33）は、戦後の造成（琉大の建物の基礎工事）で大半が破壊されている。御獄の本体部分とみられる。
3. S A 33・34（第39・40図・第18表。図版34・35）の詳細については、平成21（2009）年に報告（註7）したとおり、1459年（註8）に起きた火災で焼失した倉庫の火事場掃除で、当該遺構の内側に火熱を受けた多量の陶磁器類の一部を廃棄した場所となっている。両遺構とも石積みの片面しか残っていない為、機能や遺構の展開はわからない。
4. S A 18-A（第41図・第19表。図版39・44・45）と S A 32・S D 04-A（第41・42図・第19表。図版39～43）の石積みは、対応するとみられる石積みであり、平成9（1997）年2月20日～3月21日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御獄復元整備に係る遺構確認のための発掘調査（図版36）で検出された首里森御獄の石積み（第42図・図版37・38）に繋がっていくことを現地で確認した。下之御庭の首里森御獄で検出された遺構などの詳細については報告書（註9）を参照されたい。
5. S D 06-A（第43図・第20表。図版46～48）は、上記のS D 04-A・S A 32と関連する遺構とみられる。当該遺構は、削平された岩盤の上に底板の切石が10枚程度敷かれている。底板となる敷石は東側へ緩やかな傾斜となるように配置され、その勾配は7°を測った。
6. S A 19・20、S A 28（第44図・第21表。図版49～51）の石積みは単独の三基として考えて発掘調査を実施したが調査の進展によりこれらの石積みは倉庫施設に関係する壁や階段と判明したことから土壙SK 01として捉えて整理・報告（註10）した。倉庫跡は、1459年（註8）に起きた火災で焼失した倉庫跡と判断した。

以上、土壙S A 01の倉庫跡は1459年の倉庫など失火の時期が想定された。倉庫内から出土した一括遺物は古くは14世紀中頃～15世紀中頃までの陶磁器が保管されていたものと推定され、主体となる時期を検討した場合、15世紀初頭～15世紀中頃が予想されるところである。倉庫の使用時期を考えるとすれば第Ⅲ期の1453年以降頃から始まり、倉庫機能の停止時期が第Ⅲ期の1459年頃として考えられるが一応、当該期に設定した。土壙SK 02は石灰岩の窓みに二次的に包含層を持ち込んだ造成土を主体とするが、下層においては高麗系灰色瓦の破片が多量に包含する層が確認されている。土壙SK 02直上にS A 15・S A 31の石積みや土壙S A 01が存在することなどから第Ⅱ期～第Ⅲ期にかけて存在した遺構として解釈した。

註および引用文献

- 註7. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(II)－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年3月。
- 註8. 1459年の倉庫などの失火については、明寶録之部 実京實録、巻301に「天順三年三月癸未朔〔甲申〕禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱 本国王府失火、延燒倉庫銅錢貨物…云々」の記録がある。日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における 日本史料集成 明寶録之部 1』 国書刊行会 1979年。
- 註9. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第47集『首里城跡－下之御庭首里森御獄地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年3月。
- 註10. 沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(1)－』沖縄県教育委員会 1998年3月。



第三期（15世紀中頃）

石積みSA08(外面)・SA10(内面)、SD04-A(外面)・SA18-A(内面)、SA17(外面)・SA18-B(外面)・SA25-A(外面)、SA32

御嶽石積みSA25-B

倉庫石積み 及び階段SA19・20、SA28

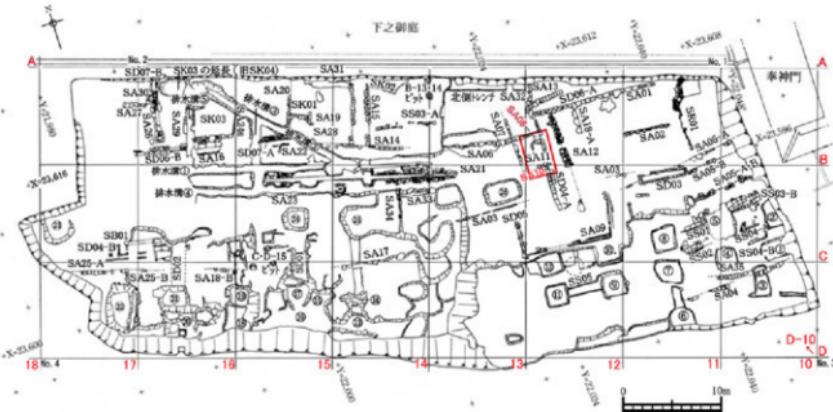
土壙SK01(倉庫内)

※土壙SK01、石積みSA19・20、SA28は1459年に失火した倉庫のひとつとみられる。

第32図 京の内北地区第III期(15世紀中頃)遺構の推定復元



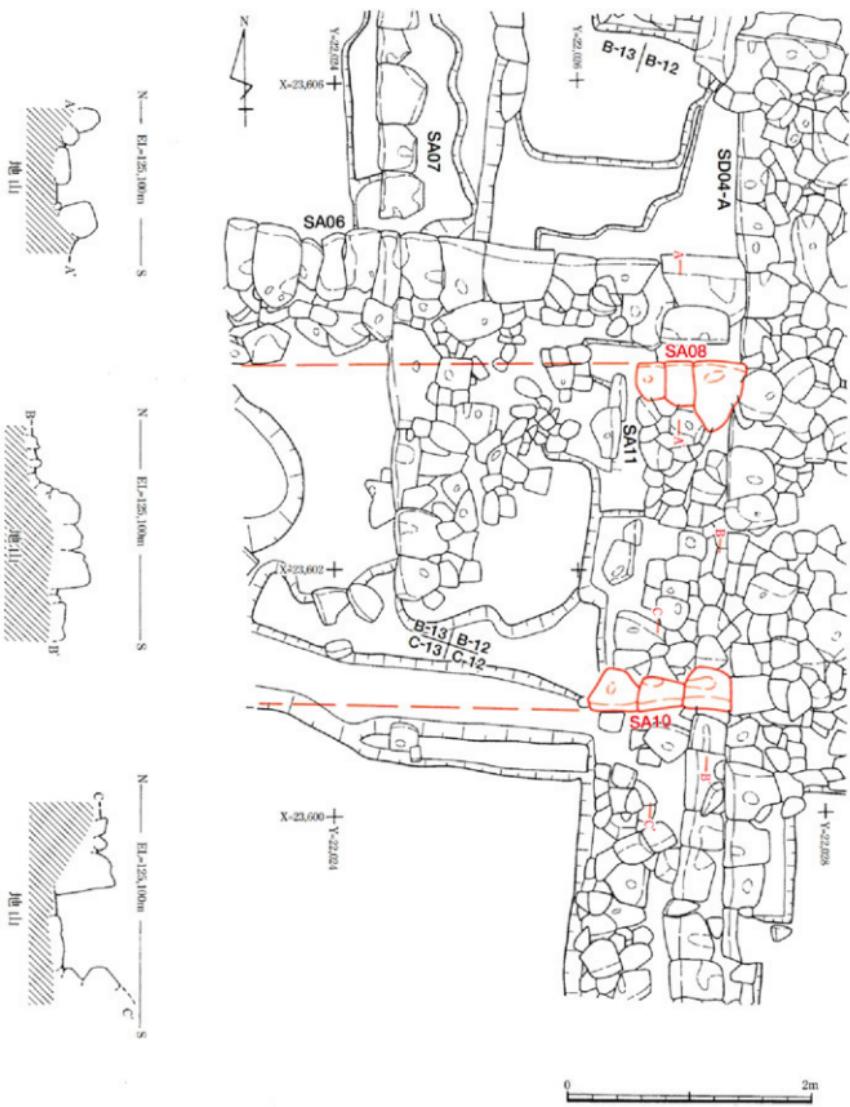
(外面)、SA33・SA34(内面)



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第14表 第Ⅲ期 SA08、SA10 遺構観察表

地 遺構番号 拵図番号	区 残 存長 残 存幅 高	性格・形状・工法・機能の推定期など	主軸方位	石積み種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-12 SA08 第32-33図	83cm 2m80cm 22cm	琉球王国時代の東西に延びる区画石積みの東端部分で、同時期のSD04-A（第41図）の上に被さるようにすり付けられている。なお、SD04-Aの石積みの一部を取り外してから当該遺構をすり付けている。造成土盤の上から切り石を設置して石積みをおこなう。15C中頃？（外側のトレチ内より白磁八角杯・博瓦などが出土）。	N89° 15' W	切り石積み 105°	23~37cm 22cm 28~55cm	SA08が外面でSA10が内面とみられる。第IV期のSA11（第48図）と第V期のSA13（第60図）の中間に位置し、SA11-SA13よりも古い時期の石積み。全体的に根石のすれにより外方向に傾く。
B-C-12 SA10 第32-33図	1m53cm 2m80cm 26cm	上記の石積みSA08と対応する琉球王国時代の区画石積みの東端部分で東西方向に短くなる。岩盤や礫を敷いた土盤の上に根石を設置。根石はやや難に加工される。15C中頃。	N90° 20' W	切り石積み 78°	30~40cm 26cm 20~29cm	同時期のSD04-A（第41図）より当該遺構は上位に位置することから時期的には新しい時期となる。SD04-Aの石積みの一部を取り除いてすり付ける。



第33図 B・C-12 石積みSA08・SA10 平面及び断面



図版 23 上：B-C-12 SA08、SA10 ほかを南側上空より望む
下：同上 SA08(左側)、SA10(右側) 西より東側を望む



図版 24 上：B・C-12 SA08(奥)、SA10(手前) 南より北側を望む
下： 同上 SA08(右側)、SA10(左側) 東より西側を望む



図版25 C・D-14 SA17、D-16 SA18-B、D-17 SA25-A・Bを東側上空より望む

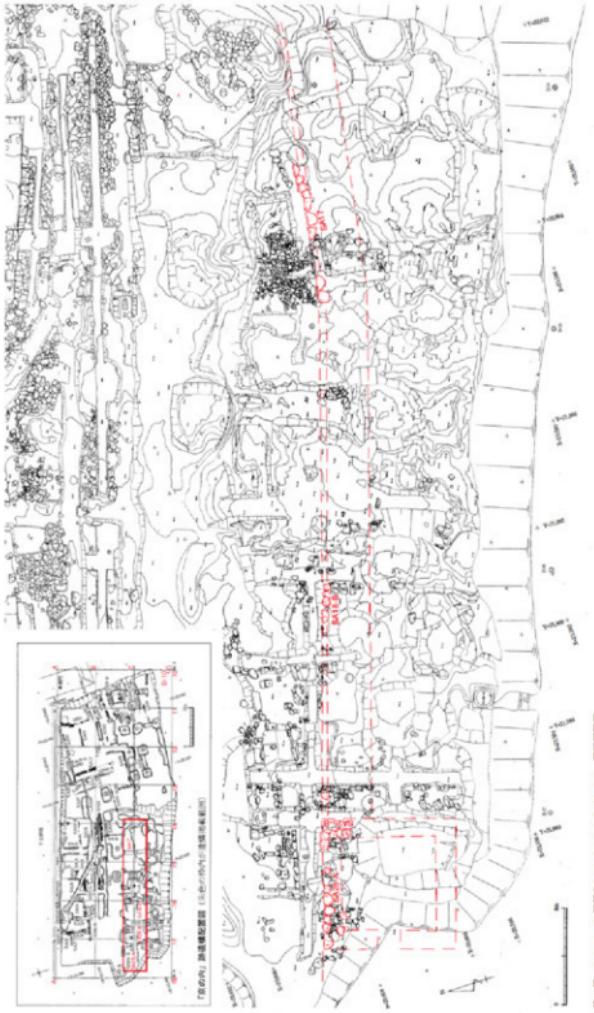


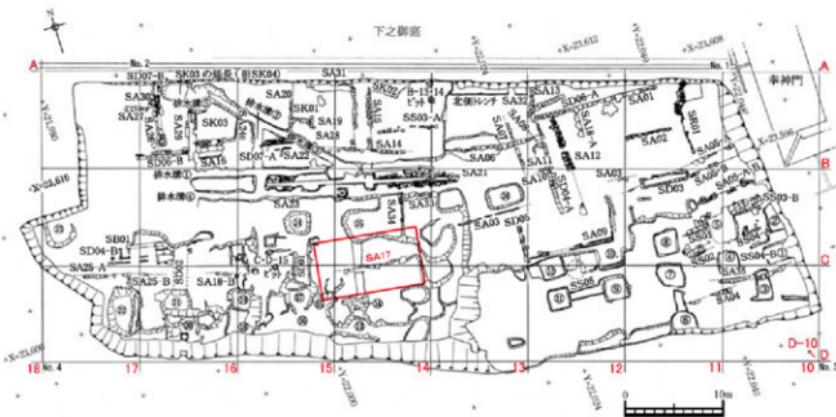
図24 図 C-D-H-17 試験場周辺地図 (赤枠部分拡大図)



图版26 C-D-14 SAN7-D-17 5055×456×36cmより上



図版 27 上 : C-D-14 SA17、D-16 SA18-B の一部を西側上空より望む
下 : D-16 SA18-B、D-17 SA25-A・B を北側上空より望む



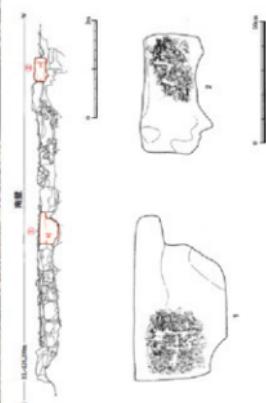
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第15表 第Ⅲ期 SA17 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 長 幅 高	性 格・形 状・工 法・機能 の 推 定 時 期 など	主 軸 方 位	石 積 み 種 類 根石 勾配	石 の サイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-D-14 SA17 第32-35-36 図	6m75cm 70cm 49cm	琉球王国時代の東西方向に延びる区画石積み、造成土と岩盤の上から石積みをおこなう。根石は切り石であるが、加工は粗雑である。15C中頃。当該遺構(SA17)の一部は琉大法文校舎の基礎工事の際に破壊。第V期まで存続。	N80° 45' W	切り石積み 90°	25~69cm 20~49cm 20~70cm	SA18-B(第37図)、SA25-A(第38図)とは一連の区画石積みとみられ。調査区内で東西方向に延びる区画石積みでは最長のものとみられる。根石の中には刻印のある石が2点(第36図)確認されている。



第35図 C-D-14 鹿島 Saito-Liynchite 平面図 岩手

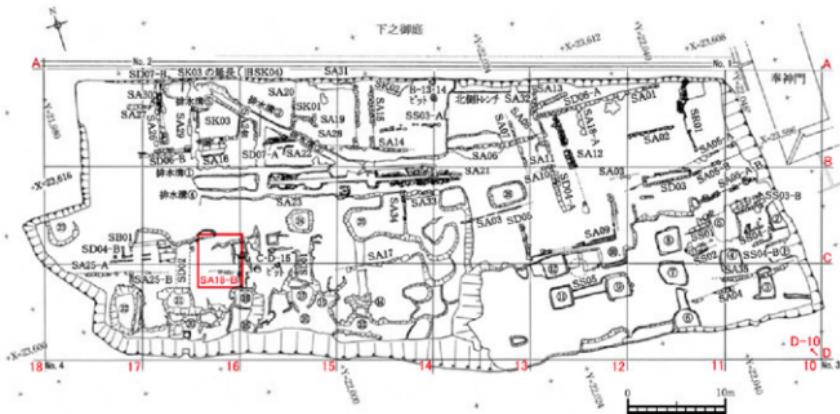


圖版四 G-D-14 石頭山-SAT7 外觀與剖面

圖版五 G-C-D-14 SAT7 陶質灰岩, 上部 G-D-14 SAT7 陶質灰岩
下部 SAT7 陶質灰岩



図版 29 上: C-D-14 SA17 東より西側を望む
下: 同上 SA17 西より東側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第16表 第Ⅲ期 SA18-B 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 長 残 存 幅 残 存 高	性格・形状・工法・機能の推定期区分	主軸方位	石 積み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
D-15 SA18-B 第32・37図	1m63cm 30cm 26cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残る。平面觀がやや直線的で東西方向に短くなる。造成土や野面の石を基礎として、その上から粗加工の切り石を根石として設置している。 15C中頃～19C後半(第V期)。	N70° 15' W	切り石積み 83°	27～38cm 26cm 27～30cm	SA17(第35図)、SA25-A(第38図)と一連の区画石積みであったものとみられ、東西方向に延びる区画石積みで最も長のものとみられる。

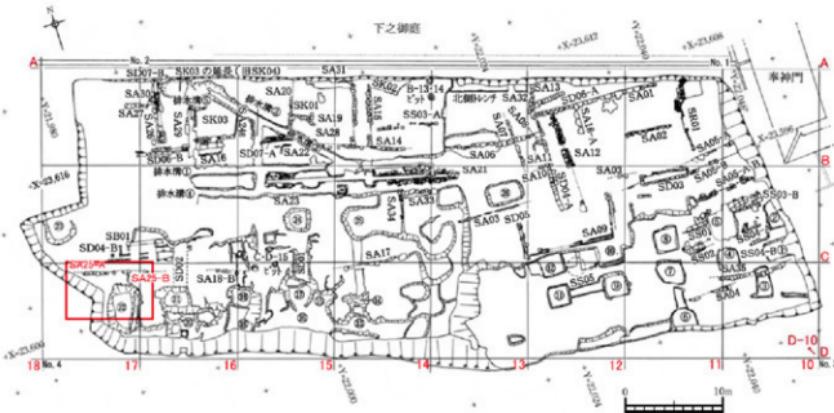


圖 3-2 D-16 地質剖面圖 平面及地質圖



図版30 上段 : D-16 SA18-Bを西側上空より望む

中段左 : 同上 SA18-B 西より東側を望む、中段右 : D-16 SA18-B 東より西側を望む
下段左 : 同上 SA18-B 南より北側を望む、下段右 : 同上 SA18-B 北より南側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第17表 第Ⅲ期 SA25-A、SA25-B 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 存 長 度 残 存 幅 高	性格・形状・工法・機能の推定時期 など	主軸方位	石 積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
D-17 SA25-A 第32-38図	4m86cm 1m37cm 40cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残るが、区画石積みを押所(御嶽)の石積みとして利用。残存石積みの平面觀は逆「ニ」の字状で東西方向に長く、両端に短く残っている。造成土や岩盤の上に粗加工の根石を設置。15C中頃～19C後半(第V期)。	N73° 23' E	切り石積み 86°	26～52cm 14～32cm 26～41cm	SA17(第35図)、SA18-B(第37図)と一連の区画石積みであるが、押所(御嶽)としての利用が考えられる。当該遺構(SA25-A)の東側でSA25-Bが上位にすり付けられている。
D-17 SA25-B 第32-38図	1m22cm 2m16cm 22cm	琉球王国時代の区画石積みにすり付けられた押所(御嶽)東側の外表面石積み。SA25-Aの上位にすり付けられている。そのため、平面觀が「L」字状となる。SA25-Aの梁石や造成土盤の上に粗加工の切り石を根石として設置。	N16° 15' E	切り石積み 91°	19～38cm 18cm 28～38cm	SA25-Aの石積みの角度を0°と設定した場合、SA25-Bは90°(直角)となる。切り石の根石は東側に傾いている。15C中頃～後半。



第38図 D-17 石積みSA25-A・B 平面及び断面



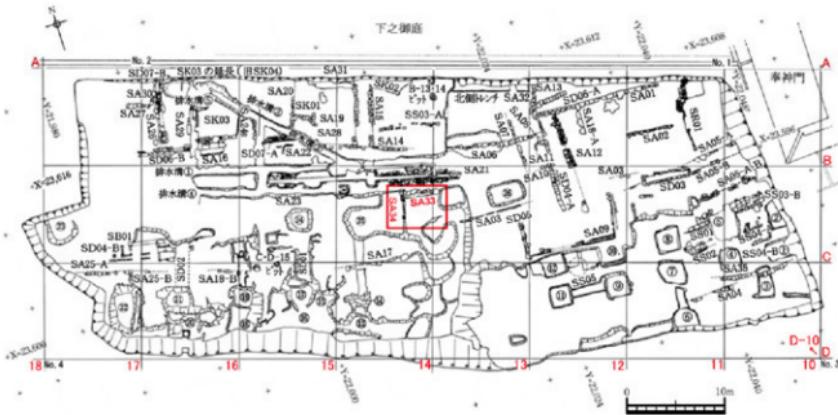
図版 31 上:D-17 SA25-A・B(写真右側)ほかを北側上空より望む(遠景)
下:同上 SA25-A・B(写真右側)ほかを北側上空より望む(近景)



図版 32 上:D-17 SA25-A・B を南側上空より望む
下: 同上 SA25-A・B を南より北側を望む



図版 33 上:D-17 SA25-A・B ほかを西側上空より望む
下: 同上 SA25-A・B 西より東側を望む

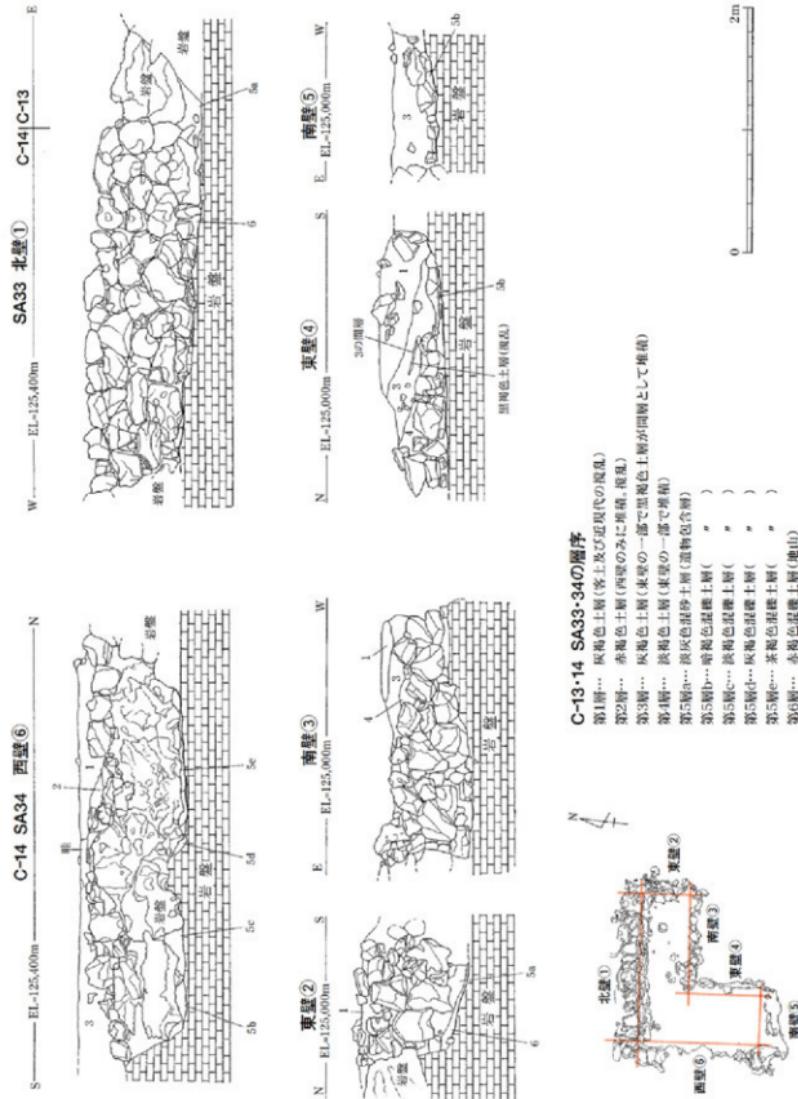


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第18表 第Ⅲ期 SA33、SA34 遺構観察表

地 区 遺構番号 捕図番号	残 長 幅 残 存 高	性格・形状・工法・機能の推定期 期など	主軸方位	石積 み 種 類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
C-13-14 SA33 第32・39・40図	3m00cm 73cm 85cm	琉球王国時代の区画石積みで、SA33と直交する。その為、SA33とSA34の残存する平面觀は逆「L」字状となる。東西軸(SA33)と南北軸(SA34)の方向に短く残る。東西方向の石積みの両端が欠落。造成土や岩盤の上から粗加工の野面積みを施す。15C中頃で、同期のSA10(第33図)が機能しなくなった直後の時期まで存続か。	N78° 10' W	粗加工の野 面石積み。 70°	13~48cm 12~30cm 29~39cm	勾配は根石から二番石までの勾配が46°である。SA34が西端に付いている。同時期のSA08(第33図)、第IV期のSA14(第49図)、第V期のSA21・SA23(第64図)が間接的に関係する遺構とみられる。SA33・34の内側に土壙SK01(1459年の火災で焼失した倉庫内にあった南磁器片などを火事場清掃の際に廻棄場として使用)出土の脚磁器と当該遺構出土の陶磁器が接合できた。
C-14 SA34 第32・39・40図	2m92cm 94cm 75cm	琉球王国時代の区画石積み。南北方向に途切れながらSA33と直交する。粗加工の根石下端は岩盤であり、岩盤を深さ50~60cm程度掘削した後に、岩盤の縁沿いに根石を直接配置している。15C中頃。	N18° 55' E	粗加工の根 石。 84°	12~24cm 12~24cm 20~40cm	根石のみ残存。SA33に北端が付く。関連する遺構として上記表中のSA08・SA10、SA14、SA21以外に南側に位置するSA17(第35図)が間接的に関係(SA17に付いて可能性がある)する遺構とみられる。





第40図 C-13・14 石積みSA33・34 立面及び層序



図版 34 上：C-13・14 SA33・34 西より東側を望む
下： 同上 SA33・34 北より南側を望む



図版 35 上 : C-13-14 SA33・34 東より西側を望む
下: 同上 SA33・34 南より北側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第19表 第Ⅲ期 SA18-A、SA32、SD04-A 遺構観察表

地 区 名 称	残 長 度 存 在 幅 幅 高 度 存 在 高 度	性 格 ・形 状 ・工 法 ・機 能 の推 定 時 期 など	主 軸 方 位	石 積 み 種 類	石 のサ イズ 幅 厚 み 根 石 勾 配	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-12 SA18-A 第32-41図	2m56cm 56cm	南北に延びていた琉球王国時代の区画石積みでSA32-SD04-Aとセット関係にある。内面がSD04-Aとみられる。SA01(第25図)の栗石を除去後に削平された岩盤や土砂の上から大型の粗加工の切り石を根石として配置し使用する。15C中頃。	磁北と重なり 0°である。	切り石積み	60~88cm — 40~56cm	SD04-Aとはほぼ平行に存在し、SD04-Aが外面でSA18-Aが内面とみられる。両者の幅は側構を含めて464cmで、側溝を除外した幅は432cmであった。当該遺構は下之御庭首里森御殿下部検出の基礎状遺構(第42図)とした石積みに接続する。
B-12 SA32 第32-41図	1m27cm 37cm —	南北方向に延びていた琉球王国時代の区画石積みで、SD04-Aと一連の石積みである。当該石積みの上面が上記したSA18-Aとセット関係にある。造成土盤の上から丁寧に加工された切り石を設置。16C~18C。	N1° 15' W	切り石。 —	35~40cm 未検出 31~37cm	第V期のSA13(第60図)と背中合わせて隣接する(SA13石の面は西側を向く)。SD04-Aとは一連のものとみられる。当該遺構も下之御庭首里森御殿下部古石積み(第42図)に接続する。
B-C-12 SD04-A 第32-41・42図	4m82cm 49cm 25cm	南北に延びる区画石積みにすり付けられた排水溝で縱断面が「L」字状となる。上記したSA32と繋がる一連の石積みである。石積みは造成土盤の上から切り石を設置し区画石積みと排水溝を含めたものを一連の遺構とみなして「SD04-A」とした。15C中頃。	N1° 15' E 85°・89° — 一番石 83°	粗加工の 根石。	14~64cm 14~51cm 15~30cm	区画石積みの根石は勾配79°であった。区画石積み下場からSD04-Aの縁までの溝幅は49cmであった。当該期のSA32、S D06-A、第V期のSA06(第59図)とも関連する。SA06東端の石積みはSD04-Aにすり付ける際に石の隅を「L」字状に抉って排水を確保。SD04-Aの存続時期は長期間使用か。

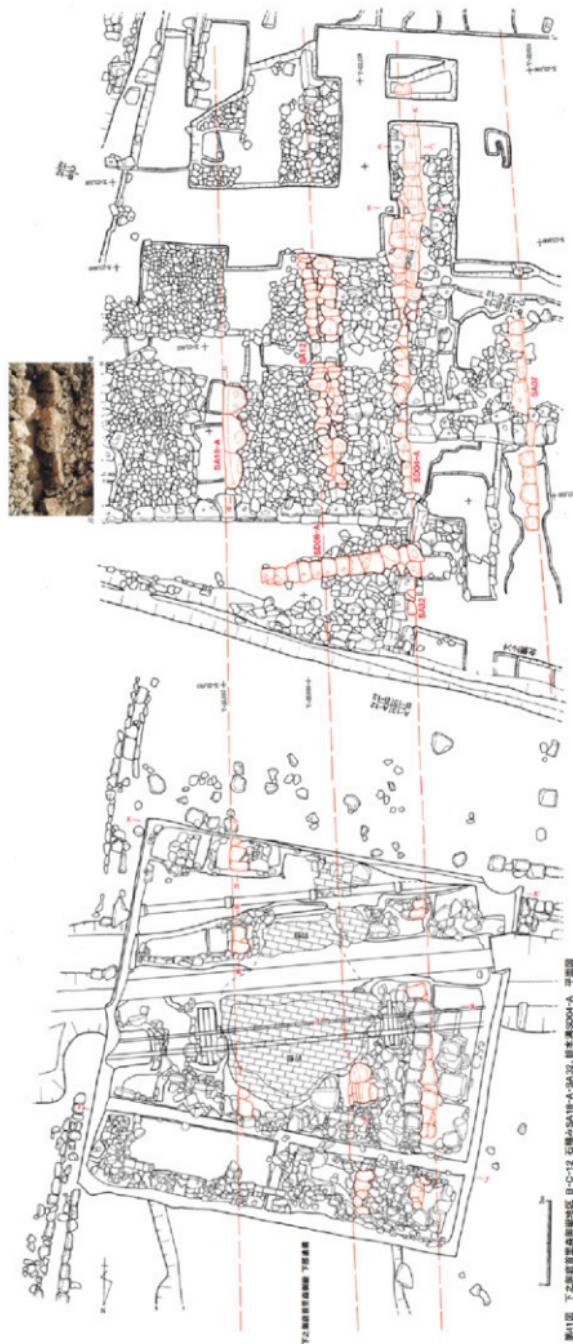
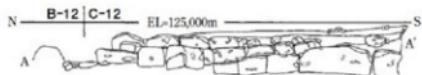
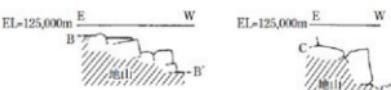


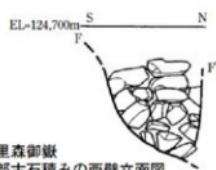
图11-12 下层墓室平面图 D-C-12 石棺人S632-A-3632, 砖木构, 高200cm, 平面图



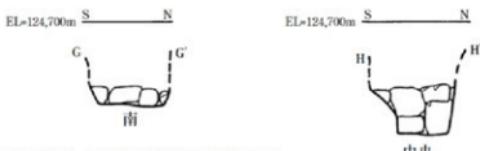
京の内 B-C-12 SD04-A 東壁立面図



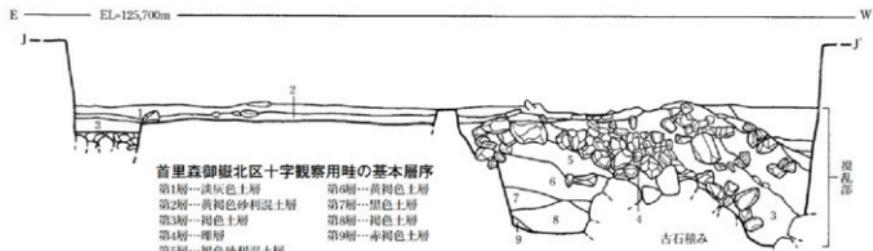
首里森御嶽 上部石積みと下部古石積みの北壁立面図



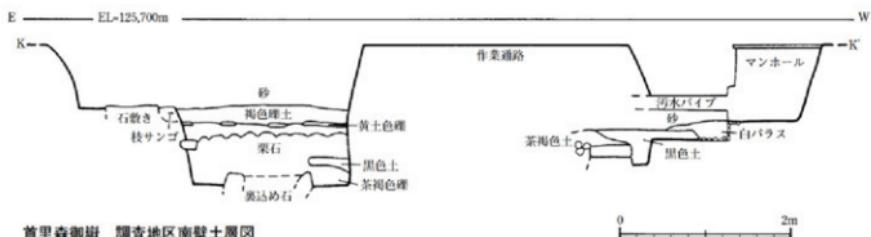
首里森御嶽 下部古石積みの西壁立面図



首里森御嶽 下部古石積みの西壁立面図



首里森御嶽 北グリッド中央畦南壁土層図



首里森御嶽 調査地区南壁土層図

第42図 下之御庭首里森御嶽地区及び京の内地区 B-C-12 SD04-A 立面及び層序



図版 36 上：平成 9(1997)年の下之御庭首里森御嶽地区 調査前の状況(南から)
下： 同上 発掘調査状況



図版 37 下之御庭首里森御嶽地区 遺構検出状況 (①上部: 石積み、②下部: 古石積み)



図版 38 上：下之御庭首里森御嶽地区 遺構検出状況(①上部：石積み、②下部：古石積み、③博敷き縁石)
下： 同上
遺構検出状況(下部：基壇状遺構)



図版 39 B-C-12 SA18-A、SA32、SD04-A ほかを南側上空より望む



図版 40 B-C-12 SD04-A 南より北側を望む



図版 41 上：B-C-12 SD04-A、SA32 北より南側を望む
下：同上 SD04-A 南壁(北より)



図版 42 上：B-C-12 SD04-A 南壁と西壁(東より)
下：同上 SD04-A 東壁(西より)



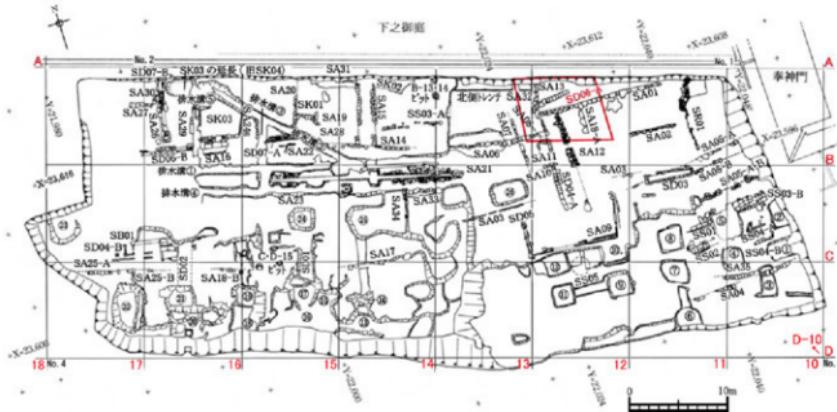
図版 43 上：B-C-12 SD04-A 東より西側を望む
下： 同上 SD04-A 南より北側を望む



図版 44 上：B-12 SA18-A 西より東側を望む
下：同上 SA18-A 東より西側を望む



図版 45 上：B-12 SA18-A 北より南側を望む
下：同上 SA18-A 南より北側を望む



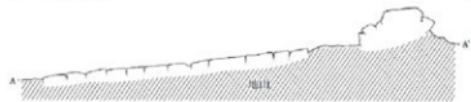
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第20表 第Ⅲ期 SD06-A 遺構観察表

地 区 遺構番号 挿図番号	残 長 残 高	性格・形状・工法・機能の推定 時期など	主軸方位	石 積み 種類 横石勾配	石のサイズ 幅 厚 み 控え 長	備 考 (関連遺構・遺構の重複)
B-12 SD06-A 第32-43図	3m87cm 47cm 15cm	琉球王国時代の区画石積み に付属する排水溝の底板。底 板は西側から東側へ傾斜す る。底板の傾斜は勾配7°で 東側の岩盤に向かって下つて いる。削平された岩盤や梁石 の上に底板を設置。底板は板 状に加工した扁平な切り石を 使用。16C後半～。		板状の切り 石。	22~53cm 7~15cm 34~57cm	第V期のSA13がSD06-Aの上位 にある。当該期のSD04-Aからの雨 水はSA32の石積みコーナー(後続 期にあたる第V期のSA06の時期に はSA06の東端の切り石下端の角を 抉った部分を流れる。SA13の石積み のコーナー)に雨水がぶつかって当 該遺構の上を流れて、周辺の栗石や 岩盤の上に排水される。流れ出た排 水は石灰岩に自然浸透させる工法を 採用する目的でSD06-Aを設置し たものとみられる。当該遺構には調査 の結果、縁石が検出されていないこと を記す。



E ————— EL+125.000m ————— W



第43圖 B-12排水渠SD06-A 平面及剖面

図版 46 B-12 SA18-A、SD06-A ほかを南側上空より望む





図版 47 上：B-12 SD06-A 南より北側を望む
下：同上 SD06-A 東より西側を望む



図版 48 上：B-12 SD06-A 北より南側を望む
下：同上 SD06-A 西より東側を望む